

女の言いたい放題誌

わいふ NO.244.

逐次刊行物

平成5年10月4日 成

国立婦人教育会館
婦人教育情報センター

● 特集 わたしが燃えているもの
● 新連載とともに生きる — 娘の発病そして臓器移植 —
● 特別寄稿 アメリカのパトカーに乗った!!



●内容案内 /

新刊 /
話題の書 /

●坂本廣子のガンバレひとりのごはん ① ひとりでも安心手料理



「炎のない調理のすすめ」

初めて料理をする方、何から手をつけたらいいのかわからない方、ひとりぶんはおっくうな方、火が心配な方…もう安心です！
●電化製品を上手に使う・炎のない調理システムで火を出す心配をゼロに。●つみれ焼きナス、ノリの佃煮…懐かしくておいしい料理法。●ひとりぶんのごはんを作りやすくする台所用具も。 *13000円

天然酵母で和風パン 国産小麦の

矢野さき子著 あんパン 蒸しパン、メロンパンから和風ピザまで60余種の、日本の小麦と天然酵母で作る、「おいしい」本。 *13000円

こんなに豆料理 ●気軽につくって

浅田鶴子著 初めての人もすくなくて失敗なし。大豆、金時、虎豆、空豆など14種を和洋中エスニックで例の料理を紹介。 *13000円

コガの気持ちで自然流育児

北山佐和子著 子供自身の「治る力」で便秘、下痢、発熱などを治す。産後の肥立ちにもいい心身リラックス法を写真で図解。 *13000円

酒井美代子の今夜はタイ料理

タイの屋台、家庭、王宮…の味即種を、味の決め手となる各種調味料や材料の入手しやすさ別に区分し、すぐ作れるレシピ集。 *14000円

食へあわせ健康法

増尾 清著 添加物や農薬の除去・解毒に効果のある、調理の下ごしらえや栄養素の組み合わせの基本をヘテランが説く。 *13000円

おいしい水で料理が変わる

早川 光著 成田俊幸写真・調理協力藤野鶴子 ●初のミネラルウォーター・クッキング読本24種の水を比較し、おいしい料理を / *13000円



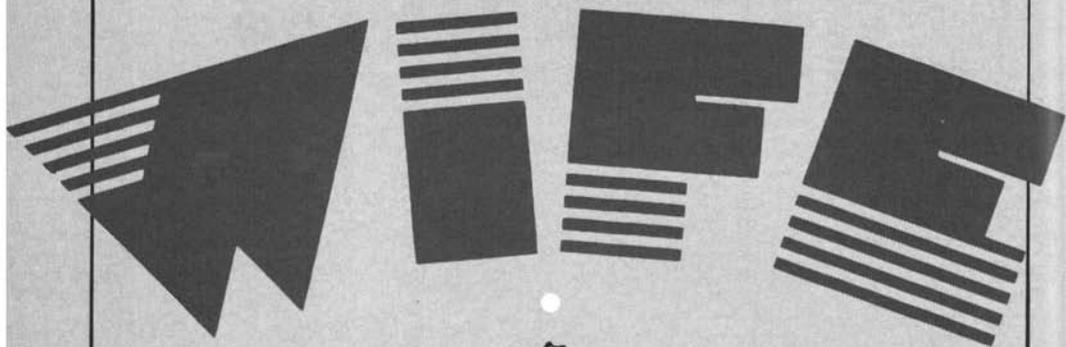
名もない女の「いのち」の記録！ 日本の食生活全集



全50巻 完結！

全巻を、ぜひ、お揃えください。

- ★9年の歳月を要して、全巻堂々として完結しました。
- ★出身県やお住まい県だけでもぜひご覧ください。
- ★お近くの公共図書館へ、蔵書をお勧めください。
- 最終回49・50 日本の食事事典ⅠⅡとして好評発売中 / Ⅰ素材編Ⅱつくり方食へ方編 大豆料理4千、大根料理2千種など全国各地の食文化事典 /
- 全50巻揃い14万5千円 各定価2900円
- A5判上製・本文平均300頁・カラー口絵・月報付
- ①北海道②青森③岩手④宮城⑤秋田⑥山形⑦福島⑧茨城⑨栃木⑩群馬⑪埼玉⑫千葉⑬東京⑭神奈川⑮新潟⑯富山⑰石川⑱福井⑲山梨⑳長野㉑岐阜㉒静岡㉓愛知㉔三重㉕滋賀㉖京都㉗大阪㉘兵庫㉙奈良㉚和歌山㉛鳥取㉜島根㉝岡山㉞広島㉟山口㊱徳島㊲香川㊳愛媛㊴高知㊵福岡㊶佐賀㊷長崎㊸熊本㊹大分㊺宮崎㊻鹿児島㊼沖縄㊽アイヌ㊾総索引



●
あなたのフリースペースです。

4 — 私のお楽しみ場 ①

月島倉庫(株)／(株)サイマックス社長・北川洋子
写真提供／文・北川洋子

10 — ●特集 わたしが燃えているもの
いつもそこに音楽が……
大味恵子

15 — 親バカ遊び
林 直美

19 — ヒップポファミリークラブ
上谷亜育

23 — 「わたしが燃えているもの」という
テーマで投稿できるようにするために
水谷順子

26 — 学徒動員の記録を
酒井智恵子

31 — エッセイスト・クラブ

藤野宏子・中松ミナ子・室井邦夫
望月敦子・関口雪枝・野中詔子

41 — サープレシープ

悠木翔子・伊藤琴子
黒崎和子・小野沢旬子

44 — 私の選挙運動体験記 風間達子

56 — ワンポイント情報

私の更年期障害
鈴木喜代子・小林やすえ
浅田節子・和田好子

59 — ファム・ポリテイク創刊のお知らせ 田中喜美子

60 — ズバリ一言

片山徳子・荻野菜穂子・浦川とめ

◆連載

62 — ともじき生きる — 娘の発病そして臓器移植 —
本庄たよ子

71 — 読んでみました

小山益誉

72

マイ・ジヨブ
マイ・プロフエツション

豊城智子・潮田京生子

78

痴呆性老人のための
ホームを見て

水落時子

84

アメリカのバトカーに乗った!!

伊藤琴子

94

女の時事放談 ⑥

女のボランティアは福祉の肩代わり?
風間ゆり・鈴木のぞみ・福田幸子

103

平成おつたまげーシヨウ ⑩

連載15

西田淑子

104

私の愛する外国人

ジヨリベ・ミュリエル

112

情報コーナー

114

ブック情報

116

コミック・痛快ノ一般人 ⑦

120

フリースペース

匿名・山中宮枝・福地園子・田中恵子

126

私を襲った

連載4

老人問題

早川裕子

133

わいふ30周年記念パーティーのお知らせ

134

わいわいがやがや

神山寿子・中野正美・青木和子

麻宮由美・七森 咲・石川真理子

万江初美・藤田勝美・鈴木洋子

次号投稿募集 141 投稿規定 142 編集だより 144

バックナンバー 25 自費出版は「わいふ」へどうぞ! 30

お友達に「わいふ」を 75 各地で文章講座を 102

私のしごと場

11

月島倉庫(株)社長
(株)サイマックス社長

北川洋子

東京都中央区



大学を卒業してから花嫁修業。結婚してみたらあなた生き生き出かける人、私夕飯つくるだけの待つ人の構図にがくぜんとする。

子供2人を育ててます
まず呪縛じゆばくが強くなる中で、出会った“わいふ”。

パートのセールスマン、アンケート調査員など新聞広告から拾った日雇い仕事に精を出す。その折、福祉財団が会計を募集しているのを知り、参考書を頼りに簿記の免許を取って正社員の資格を得る。

45歳を過ぎては何の就職口もなく、これはコネしかないと父の創業した月島倉庫に頼み込む。情報電算部をつくろうとしていたので、夜学に半年通って

免状をもらって入社。91年に(株)サイマックスというソフト会社として発足させ社長に就任。

翌年、夫が月島倉庫(株)の社長から会長に退いたのを機にバトンタッチされる。創業

48年、稼働坪数100,000坪の倉庫会社の社長に就任して現在1年と3カ月。従業員300人の生活費を稼ぎ出す施策とチームワークによる活力をひねり出そうとする社長室は、常に扉を開け放してみなが自由に出入りできるオープン方式。社長在席のランプを消して居留守を使いながら“わいふ”への原稿を書くのもこの部屋。

物流システムのノウハウではほかの追随を許さないソフト会社「サイマックス」を興して2年半。平均年齢23歳の若いSE集団の社長としてできるかぎり自由でのびのびした職場づくりを目指している。遊びと職場の境目を外したいという願いのシンボルであるぬいぐるみの「マックス号」は、みなが通りすがりにまで回すのですっかりうす汚れてしまった。



16年前“わいふ”の顧客管理作業を手伝いながら「何か仕事をしたい」ともんもんとして“わいふ”の仲間に呼びかけたところが懐かしい。



100%子会社の運輸会社「月島物流サービス」のトラックが街を駆け回って月島倉庫の宣伝を一手に引き受ける。若い血気盛んな運転手さんたち200名をまとめながら、きめ細かい営業で不況を克服する辣腕営業部長と品川物流センター前で。

事務所は、築地魚市場のすぐそば。昼休みは主婦に戻って買い物に精を出す。築地市場は、午後3時にはもう店を閉めてしまうし、私も仕事場から家までに2時間の長距離通勤で、おまけに夕方になって突発的な会議や接客が入ることが多いから、この買い物タイムを外すと、今夜はかりか明日の食事にも差し支える。



会議は明るく、活発な意見交換できることをモットーに。景気低迷の時期は、柔軟な頭から突飛なアイデアが出ないと乗り切れない。古い体質を脱皮して、せめて経営陣のよくらいは女が占められますように。

自然水の販売（タイムリーサポート事業部）

これからの時代は、ますます女がみな外に出る。専業主婦が減れば、当然に家庭生活の在り方が変わっていく。長年共働きを続けてきた自分が「働きやすい条件とは何だろうか」と探ることが、次の時代にマッチした仕事を創出するきっかけになる。で、東京の街に清冽な自然水を宅配する事業を始める。家庭に妻や夫が帰ってくる時間に合わせて、きちんと毎週水を届けることで週末の重くてかさばる買い物の負担を月島倉庫が肩代わり。





近年、倉庫をお貸ししているお客様の中にはユニークな倉庫利用をされることも多い。ギャラリー、ブランドプレタボルテのショールーム、音楽事務所、演劇の稽古場など。そのうちの一つ、勝ちどき営業所内のムーン・アイランド（ウェッジウッドやロイヤルコペンハーゲンなどの高級洋食器の直販店）の前で。

ラネロッシュ(ブランド プレタボルテ)も倉庫に彩りを添える。



倉庫の仕事は、無数の特殊な手作業から成り立っている。主婦の知恵を生かして倉庫マンと一緒に工夫した掃除機改造のビッキングマシンなどが、威力を発揮する。

ひがしやま
東山書房
 〒615 104 東京都中央区新川2-2-1 706
 東京都右京区山ノ内大町5-3-7 8
 ☎03 3553 3358
 ☎075 (84) 922 78

性からなるこころ

★
 ★
 ★
 ★

悩みはポイ!
 毎日中学生新聞連載
 村瀬幸浩・堀口雅子著



悩むことはいいこと。人の苦しみ・悩みのわかることは大切。でも時には、1人で考え過ぎず、「助けてー」と声を出すことも大事。みんなの悩みー性編、からだ男の子編、からだ女の子編、こころ編に2人が明快に答えます。(中学生に勧める本、主な思春期外来リスト付き)
 四六判/定価1500円(税込)

“人間と性”を考える話題の総合情報誌

Human Sexuality

「ヒューマン・セクシュアリティ」

- 編集長 ●村瀬幸浩 ●
- 企画編集 ●“人間と性”教育研究協議会
- 季刊 B5判・128頁・定価1400円(税込)

12号〈新刊〉《特集》今日の売真春の現実をどう見るか

- 編集長対談 今日の売真春を支えるもの
 ゲスト 森松左知子
 特集ルポ いま、あらためて「売真春」を考える
 三井篤美代+草野いつみ
 特集レポート 売真春情報を知る…… 珍野未夫
 特集インタビュー エイスと売真春
 〈宗像恒次氏に聞く〉
- 「売真春を考える」授業
 中学校＝「従軍慰安婦」問題を考える
 高等学校＝「売真春に関するアンケート」を実施して

- 11号 思春期の性と教育
- 8号 性情報・性文化の現況と「表現の自由」と新教科書がもたらすもの(増刷)
- 7号 シルバーエイジの豊かな性と生
- 6号 エイスの現在と近未来(増刷)

●直送定期購読者受付中●郵振・京都4-1067番
 1年 5,600円 2年 11,200円

父母と子の立場から教育・学校を考える
母と子 十月号 五〇〇円・千五百円

今月の視点 (見本誌(旧号)進呈)

民主主義と人権を問う

母と子 十月臨時増刊 一〇三〇円・千五百円

学習のつまづきを乗り越える

〈小学校篇〉

一年生から六年生までの各学年で、子どもたちがつまづきやすい学習のポイントをとりあげて、それをどう乗り越え、学ぶ楽しさをつかませるかに焦点を当てました。

- 漢字の面白さをつかませる ●位どりの意味をどう分らせるか ●表現することの弱い子に一年
- 話す、書くことを好きにさせるには ●漢字のウィジョンをふくらませる ●九九狂想曲―二年
- 「小數って何?」と意味がつかめない ●包含除の割り算の理解 ●実験、調査の不得意な子に一年
- 分数がどうしても分らない ●単位、換算の意味がつかめない ●地図と地域が一致して認識できない―四年
- 体積の概念が理解できない ●物が水にとける(溶解)とは ●興味をもって産業学習にとりくめない―五年
- 文章からイメージを豊かにえがきだせない ●作文を嫌う子 ●比例、反比例が分らない―六年

お申し込みは書店か母と子社へ

☎203 東久留米市中央町五四一八
 ☎〇四二四一七四一九一二五

母と子社

●
特集

わたしが燃えているもの





いつもそこに 音楽が……

千葉県船橋市
大味恵子(38歳)

今、「あなたが燃えているものは？」と聞かれたら、迷わず「音楽」と答えるだろう。私と音楽の付き合いは長く、五歳でピアノを始めてから、ギター、エレキトーンを経て、現在のヴァイオリンに至るまで、楽器に触っていなかった時期のほうが少ないくらいである。

経験した四つの楽器のうち結局、私の音楽の基礎をつくってくれたピアノと、始めてから数年のヴァイオリンが残った。子供のときは単なる習いごとでしかなかったピアノは、今やヴァイオリンとともに私のライフワークであり、自己表現の手段でもある。

今でこそ「音楽は生きがい」と大きな声で言えるのだが、昔からそうだったわけでは決していない。今、私が音楽とどのように向き合っているのかを語るには、子供のときからの音楽遍歴を語らなければならない。

(ピアノとともに)

小学校三年のときO先生が私の新しいピアノの先生になった。O先生は当

時三十代半ばくらいの男の先生で、私に通う小学校の音楽の先生でもあった。前評判どおりO先生は厳しかった。それまで私はオルガンを使っていたために、手に悪い癖がついてしまっていた。

とっくに卒業していたバイエルも一度戻され、徹底的にやり直させられたのだ。一つの曲が三度目ともなれば必ず暗譜、曲の途中で一度でも止まればアウト、人前で弾くときに譜面を見るなど絶対に許されなかった。何度弾いても先生の言うように弾けず、泣きだしてしまったこともあった。習い始めて間もないころ、「僕のレッスンにはついてこれないかもしれないですね」と言われたことがあった。

が、そんな劣等生の私にも一つだけ取り柄があった。耳がよかったことである。ピアノのレッスンでは、ソルフエージュ(楽譜を見ながら階名で歌うこと)や、聴音(先生の弾くメロディーを楽譜に書き取ること)の訓練も並行して行なわれたが、私はその音を聴き取る力だけはあったらしい。よって、伸

びる可能性は十分あると見なされ、引導を渡されずに済んだというわけである。

しかし、小五の夏、もともと体があまり丈夫でなく、病院通いもしていた私は、そのことを理由にピアノをやめた。それは私の意志というよりは、「先生の厳しいレッスンについていくのは、これ以上無理」という周囲の判断からだった。私もまた否定はしなかった。

小四の発表会のとき、よく弾けたことを先生から非常に褒められ、大いにやる気になったものだったが、「今度はもっと上手に弾かなければ」というプレッシャーが次第に重くのしかかってきた。何もそんなに気負うことなどなかったのだが、実際O先生に習い続けていくことはつらかった。たとえ体が弱くなくとも……。わずか二年半のレッスンであった。

短くともこの期間こそ、私自身の人間形成がなされるうえで、非常に大きな影響を受けた時期だったと思う。普

通のピアノの先生から教わる倍くらいのことを、この二年半で私は身につけたと思っている。ピアノの基礎をこの時期に、しっかりとコンクリートで固めてもらったおかげで、私はその後、ピアノを二度も中断しながら、そのたびに建て替えが可能だったのである。ほかの楽器を習う際にも、自信を持って始めることができた。今でも私はO先生の生徒であったことをとても誇りに思っている。

中二で私はまたピアノが恋しくなり、別の先生のもとへ通い始める。そして高二で自分の進路を決めるべきときがきた。私はピアノに未練を残しながらも音大を目指すことはやめることにした。なぜなら、とてもそこまで自信がなかったから。

それに、ほかにやりたいことがあった。でも、もしも今の私のまま高校時代に戻ることができるとしたら、きっと迷わず音大を目指したと思う。「好き」ということも才能の一つだ」という言葉を聞いたことがある。あのと

きは気持ちが一〇〇パーセントピアノのほうを向いてはいなかった。

その後、私は音楽以外のものを専攻し、ピアノ以外の楽器に触れ、一般企業に勤めた。

ピアノ一筋に生きてこなかったからこそ、再びピアノのよさを発見できたのではないだろうか。大学一年で二度目のピアノ中断をしてから十数年後、私は幼なじみの初恋の人に再会したような思いでピアノを見詰めていた。私に一番合っているのはこの人なのだ、と確信しながら……。

こうして長い旅路の末、生涯の伴侶を見つけた私であったが、さらにまたすばらしい出会いが待っていたのである。

（ヴァイオリンとの出会い）

四年半前、私は一台のヴァイオリンを購入した。楽器としては最低の値段のものだったが、それでも思い切ったことだった。この思い切りが実はそれから先の私の人生を方向づけた、と

いっても過言ではない。

ヴァイオリンに対するあこがれは子供のころからあったが、身近に習っている人もいなければ、楽器店でピアノのように試し弾きできるように陳列されているものでもなかった。ガラスケースの中にもいつも澄まし顔で飾られていて、私には遠い高根の花だった。同じ弦楽器なのに、ギターを手に取る気軽さとはなんと隔たりがあることか。

以前、テレビでヴァイオリンを演奏する四、五人の主婦たちのサークルが紹介されたことがあった。そのうち一人は専門に勉強した人だがほかはみな、三十代になってヴァイオリンを始めた人たちだという。決して上手な演奏ではなかったが、「ああ、これだ」という気がした。三十歳の手習いでも何とかなりそうだと。「いつかこの楽器を弾こう」と思ったのは、このときからだったと思う。

それから五年の後、私はヴァイオリンを手に入れた。しかし、当初は月謝を払ってまで習いに行こうという気は

まったくなかった。そこそこに弾ければよいと思っていた。ギターの経験が多少あったので、押さえる場所さえ分かれば弾けると思っていたが、それはとんでもないことだった。

初めてヴァイオリンを手にしたとき、ギターとはまるで感触が違うのに驚いた。大きさが違うのだから当たり前のことではあるが、なんと繊細な楽器なのだろう。調弦をしようと思ひ、糸巻きを回したとたん、弦がぶつりと切れてしまった。ギターのつもりで力を入れすぎたのがいけなかった。

慌てて楽器店へ行くと、なんとそこで楽器の無料点検と無料のレッスンをしてくれるコーナーがあるという。扱いは方もろくに知らないでボンと楽器を買ってしまった無謀な私にとっては、まさに渡りに船であり、救いの神であった。結局、計三回の無料レッスンを受けることができ、わずかな時間ではあったが実に多くのことを教えていただいた。楽器店のこの企画にはほんとうに感謝している。

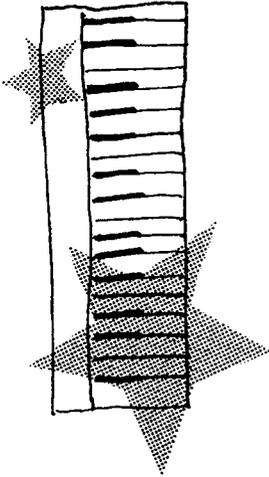


初心者がヴァイオリンを弾いても、まずあの美しい音色は出てこない。雑音に近い音しか出ないのが普通である。ヴァイオリンらしい音が出せるようになるまで二、三年はかかると思う。長い長い階段を、一段一段上っていくのごとく、実に忍耐のいる楽器なのだ。が、三回のレッスンを受けているうちに、私はいつの間にか本気でこの楽器をやってみたいと思うようになった。

（サークルへ入会する）

平成二年の四月は、記念すべきときだった。なぜなら末っ子が入園し、子供を持って以来初めて一人の時間ができたからである。このときを待ちに待っていた私は、近くの教室を探し、ヴァイオリンを習う手はずを調べた。

ちょうど同じころ、市の広報紙で私の目を引くお知らせがあった。ある弦楽アンサンブルのサークルがヴァイオリン初心者のための講習会を催すという。これもまた渡りに船であった。講習会そのものには半分しか参加できなかったが、これを機に入会させてもらうことにした。



実はこのようなサークルを私は探していた。個人レッスンを受ける一方で、ほかの人と合わせて弾く機会を持てば、第一楽しいし、上達も早くなるに違いないと思っていた。入会したのが八月、そして十月には市の音楽フェスティバルに参加し、ステージに立ったのである。といっても、後ろのほうでほとんど弾くまねをしていただけであったが……。

このサークルではバロック音楽が中心であるが、モーツァルト、ハイドゥン、そしてクラシック以外ではシャンソンやビートルズなども弾く。学生時代ギター合奏でバッハはよく弾いたが、ギターでは限界があると感じていた。あ

のところから好きだった曲を、今こそ本物の楽器で弾けることがこのうえなくうれしい。バッハの管弦楽組曲第二番を全曲弾いたときは感激したものだ。

どんなプロのすばらしい演奏を聞くよりも、たとえ下手であっても自分で演奏するほうがはるかに楽しいと思う。ここには腕はともかくとして、音楽が大好きで、弾きたい人間が集まっているのだ。それに、音楽の知識が豊富である。長年音楽とかかわっていないながら、なんと私の知らないことが多いことか。断片的にでも、知識、情報を仕入れられることがまたうれしいのである。日曜の午後の練習は、次第に私の生活の一部となっていくた。

面白いことに、サークルへ入会してからピアノを弾く機会もまた増えていった。指導の先生がいらっしゃるとき、簡単な伴奏を頼まれたりもした。そしてミニコンサートでピアノ三重奏を演奏したことは、私にとって画期的な出来事だった。

曲目はメンデルスゾーンのピアノ三

重奏二短調だった。ピアノパートは最も難しく、私は暇さえあれば練習していた。昔、ピアノを習っていたときでもこれほど一生懸命練習したことなどなかったほど。

本番では三人ともあがって、かなりテンポが速くなってしまう、散々な結果であったが、このとき私はまだまだ弾けると思ったし、このような機会をぜひまた持ちたいとも思った。

ピアノ三重奏……数ある重奏の組み合わせの中で私は最も好きだ。重厚なチェロの響き、メランコリックなヴァイオリン、甘美なピアノの音、この三者が見事に掛け合うすばらしさ。私は長い間こんなことがしてみたいと思っていたのだ。

（車 の 両 輪）

こうしてピアノを人生の伴侶としてから、私はヴァイオリンというすてきな恋人とも出会った。何とも欲張りな話であるが、私にとって両者は言わば車の両輪のごときものである。両

輪がついてみて初めて、本来あるべきものがやっとそろったような気がした。

今はヴァイオリンのレベルアップを懸命に図っているところであるが、片方が上達すればもう片方へも必ずよい影響がある。相互作用である。ヴァイオリンを始めてから音楽的視野が確実に広がった。オーケストラを見る目も聴く耳も変わってきた。そのうえで改めてピアノを見詰めることができるようになった。

私は三年ほど前から、知人に頼まれて近所の子供にピアノを教えるもいる。ごく初歩の子供たちで、しかも三、四人と小規模ではあるが細々と続いている。私の教えたことをちゃんと覚えていくくれ、そして進歩していく様子を見るのは、ほんとうにうれしいことである。

ピアノとの再会、ヴァイオリンとの出会い、子供たちにピアノを教えるようになったこと……これらは子育てが一段落したころほぼ時期を同じくして訪れた。というより、私自身が求めて

いった結果なのだ。

人間、長い一生のうちでも心を燃やせる対象となるものに出会うことは、そうたびたびあるものではない。そんな対象に出会えたことを幸せに思っている。

今、私はもっと勉強したい。まだまだ弾きたい曲はたくさんあるし、年齢相応の演奏がしたい。さらに深く、音楽を学んでいきたい。そして私の身につけたものを、いつか人のために役立つことができるのなら、なおすばらしいと思う。

幸い私の住む市は音楽の盛んなところだ。いつ、どんな形でかは分からないが、いつか音楽を通じて地域に貢献できたらと思っている。





親バカ遊び

東京都新宿区
林 直美

私は今遊びの開発に夢中になっていく。私の考えた遊びは、遊べる期間が限られているので、どんどんできなくなってしまふ。とにかく今精一杯楽しみ、そして次なる遊びを考えるわけだ。私の遊びは自分一人だけで楽しむものだと思う。決して押しつけてはいけない。だれかに見られると恥ずかしい気もするので、私はこっそり楽しんでいく。今しかできない遊びだと思えば、つついっ熱中してしまう。時々我を忘れた自分に気が付き、思わず赤面することもある。随分長い前置きになってしまったが、遊びの道具は、現在一歳二カ月になる息子なのだ。

（食べてしまいたいくらいかわいい）

私は結婚前に、義姉の入院で二歳の甥を実家で預かり、母を手伝って二カ月ほど面倒を見たことがあった。子供が苦手な私が甥のことだけは心底かわいと思えたので、不思議な気持ちがあった。かわいかったが、どこか遠慮があった。兄が迎えに来て、私や母

のことなど眼中にないように、喜びいさんで帰っていったときは、正直言っても私も母もがっかりしたものだ。もちろん、それで当たり前、親のほうがいいに決まっている。そうでなくては困ることくらい、十分承知している。甥は私がかわいがっていたのをよく知っていて、随分なついてくれた。しかし、どんなに大切にしても、しょせん母には孫で私には甥なのだ。

しかし私は、だから自分の子が欲しいなどとは夢にも思わずに過ごし、甥以外の子供は嫌いのまま結婚し、息子が生まれた。妊娠中は、甥のようにかわいと思うことができるだろうかなどと、それこそ不安が一杯だった。苦勞の末、緊急の帝王切開で出産し、この手に初めて抱いたとき、そんな不安など一瞬のうちにとどこかへ飛んでしまっていた。

息子が生まれて、私は「食べてしまいたいくらいかわいい」というのを初めて理解した。甥にはしたくてもどこか遠慮があつてできなかったことが、息

子にはだればばかることなくできた。かくして、私だけのひそかな喜びと言うべき、息子相手の親バカ遊びが始まったのである。

赤ん坊はとにかくむちむちしている。しかも肌のきめが細かく、信じられないくらいすべすべつるしているのだ。思わず、食べてしまいたくなるのだ。そこで、上機嫌でびんびん振っている足をがしっとつかまえて、いったんだきまゝすとばかりにぱくつといく。小さな豆粒のような指が並んだこれまた小さな足を、ぱくつとほおぶるのだ。手なんか丸ごと食べちゃうのだ。目が合って、息子にっこりなんてされるほど、どうしていいか分からなくなるほど、いとおしくなる。ねんねしているほっぺをつついてみる。鼻をつんとして、耳もちょっとつまんでみたりする。起こさないようにつつくのが、難しくまた楽しい。息子へのご褒美は「キスの嵐」と称して息子の顔に、ちゅっちゅっちゅとキスの雨を降らせる。いたずらしたときはこれが「キス攻め」

になる（していることは同じである）。だれに気がねすることもないので、何だってできるのだ。

（親孝行は五歳まで）

とはいっても、生まれたすぐから遊んでいたわけではない。息子はすくすくと育っていたが、私は産後体調が悪く、悲惨な毎日を送った。膀胱炎に始まり、いわゆる目いぼ、不明熱、挙げ句の果てに腰痛におそわれ、息子を抱くことはもとより、立てなくなってしまう。二カ月の息子をベビーカーに乗せ、半泣きになりながら医者へ行った。ほぼすべてが回復したのは、三カ月を過ぎてからだった。もちろん、遊ぶ余裕などなく、息子にはそこそこ相手をした程度である。それが、私には精一杯だったのである。

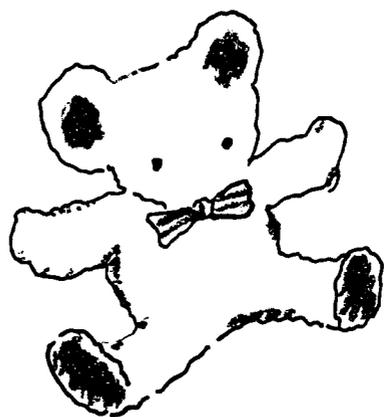
落ち着いてからも、覚悟はしていたが、育児はほんとうに大変だった。自分の時間なんか皆無だし、たまの予定も息子のためにあっさり中止になってしまう。ストレスがたまり、ほとんど

育児ノイローゼになっていた私は、息子の寝顔を見詰めながら、ふと思った。子供は五歳で親孝行のすべてを終わってしまうという言葉聞いたことがある。ほんとうだと思う。私の息子は、今私をこんなに静かな気持ちにしてくれているのではないか。ここしばらくの間、イライラする毎日を送って、息子を見て楽しみ、幸せな気持ちになれることをすっかり忘れていた。



五歳といわず、三歳にもなれば、友達と遊ぶようになるだろう。反抗期も来る。やがては母親を疎ましく思う時期も来るに違いない。赤ちゃんの時代は今しかない。育児は大変だが、今だ

からこそ楽しいこともあるはずだ。そんなふうになんか考えながら、少しずつ心が軽くなっていくのを感じうれしかった。



実際はおぼえて喜んでいた息子の足も、一歳二カ月の今、私の大きな口にも一杯になってしまふ。そのうち、どこへでも歩きだして汚い足になってしまったら、ばくつといく気もうせてしまふだろう。足はもちろん特大もみじの手も、先日ばくつといったら、ぱりつとひっかかれてしまい、手はもう食べられなくなつてしまった。ほっぺにちゅっちゅっちゅつとしても、時には

手で私の顔をはねのけるようになり、息子が大きくなっていくとともに、私のひそかな遊びもどんどん失われていく。寂しい気もするが、やはり息子の成長には代えられない。そして、私は新しい楽しみを探すのだ。

【専属スタイリスト&デザイナー】

息子はまだ歩かない。だが、はい回つてどこへでも行く。何にでも手を出して、泣きを見ることもしょっちゅうだ。汚したり、汗まみれになったりして、一日に何度も着替える。最近はこれがうれしいのだ。乳児から幼児になり、服装も変わりつつある。色々なコーディネートを楽しむことができる。幸い息子は衣装持ちである。兄の二人の子のお下がりと近所の方からのお下がりで、着せる物には不自由しない。姪のリボン、フリル付きのTシャツだって息子はかわいく着こなすのだ。大人と違って、とっておきのお出かけ用も、パンパン着せる。私はただの主婦ではなく、スタイリストになるのだ。昔、リ

カちゃん人形相手に遊んでいた自分を、懐かしく思い出しながら……。

今なら文句一つ言わずに着てくれる。服ならたくさんあるのに、あれ着せたい、これ着せたいと街で見かけるたびに欲しくなる。しかし、平凡なサラリーマンの家庭、先立つものもない。そこで、私はこの不器用な頭と手を駆使して、洋服づくりを始めた。赤ちゃん雑誌や本を見れば、簡単なロンパースだと材料がそろえば、三日くらいで仕上がる。一度「お昼寝中にできる」とあったパンツに挑戦したが、まるっきりの初心者私だと、三回分のお昼寝が必要だった。何せ、息子はミシンなんか見ると、目を輝かせて突進してくる。どんなにガードしていても、ちっちゃな人差し指がにゅつと出てくる。結局、昼寝と夜の間にするようになる。プロだと二、三時間でできそうな服が、私には三日もかかってしまった。

この服づくりというのは、恥ずかしくない遊びだ。デザイナーを考えたり、布を選ぶときもわくわくする。息子に着

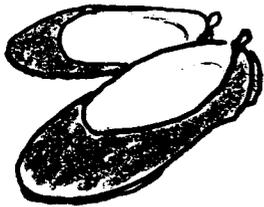
せたところを想像するのがまたいい。実際に着せて想像とは随分違うこともあるのだが、息子はいつもかわいいでよしとする。これが大事だ。どんな物ができてよしとする。そうすれば、またつくりたくなり、つくるたびに要領がよくなり上手になり、楽しくなる。息子は必ず着てくれる。褒めもしないが、決して文句は言わない。それに息子の着ている服は世界中で一着しかない。高価な服ではなくても、特別な服ならうれしくなるものだ。

（育児に燃えている）

息子は日ごとに大きくなる。紙おむつはそろそろサイズを用意しなくてはならなくなった。着替えやおむつ替えのついでに、しっかりしてきた体や腕をつんつんしてみる。息子の期待にこたえて、こちょこちょとくすぐる。のけぞって喜び息子をそのまま引っ繰り返して、ぶりぶりしたおしりの感触も楽しむ。思わず、ひねひねーとつまんでみたりする。この際かまうものかと、

ちんちんもちょっと引っ張ってみたりする。少し上向きかげんでテレビを真剣に見ているときなど、ほっぺからあらごにかけてぶくっとなって、まあほんとうにかわいくて、吸い付きたくなる。自分が信じられないほどで、食べてしまいたいくらいかわいい”を身をもつて実感している。

かわいが、はつきり言って今や腹の立つことのほうがずっと多い。本には少々のごとは大目に見て何でもさせて……など書いてあるが、限度というものがあるし、私自身がイライラしてきて身が持たない。不自然なことは

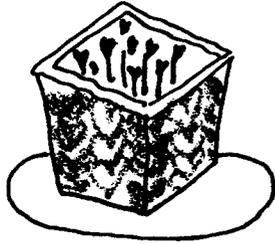


なるべくしたくない私は、息子の先回りを心掛けてはいるが、つい怒ってしまふ。しかし、かわいなのだ。怒った瞬間にはっとして私は反省し、他人事のようにしらっとしている息子をぎゅうぎゅうと抱き締めて、謝るのだ。そのついでに、罪滅ぼしの気持ちもあって、”豊島園ーっ””後楽園遊園地ーっ”などと叫びながら、息子を振り回して喜んでもらうのである。

子供を持つと心配事も山ほどある。何とかいう外国人の名前の診断名を言われて、知能障害があるかもしれない、歩くのも二歳を過ぎるだろうと告げられたときには、目の前が真っ暗になったが、今はたとえどうなっても大切に育てるのだと、覚悟もできている（現在は、とりあえずはうようようになったので、また一つ安心している）。

毎日息子の成長を発見し、怒って、泣いて、笑って、遊びを開発し、息子とともに楽しんでいる。恐らく二、三年だ。

私は今、まさしく育児に燃えている。



ヒッポ ファミリークラブ

東京都練馬区
上谷亜育

〔初めはほんの軽いノリだった〕

娘は小学校入学を機にバレエを習いたいと言いついていた。「うーん、発表会とかあるとお金かかるだろうしなあ」……私自身もバレエは好きで、時々、公民館でやる地域のバレエ学校の発表会に連れて行ってたりしたが、娘をその気にさせた一因だろうとは思いつつ、発表会に出た子とその母親の、きれいなひらひらのワンピースやすてきにカールした髪を思い出すと、どうも自分たち親子のイメージはそれにそぐわない。

そんなころ、たまたまヒッポファミリークラブを知った。「七カ国語で話そう」がキャッチフレーズの団体だ。このころはけっこう新聞やテレビなどでも紹介されている（『わいふ』二四三号の「私の愛する外国人」で、チェンさんにも紹介されていましたね）。でもそのときはどんなことをしている団体か、全然知らなかった。

「バレエもいいけれどテレビでやってる

『英語で遊ぼう』みたいなところがあるんだって。行ってみる？」「うん、いいよ」……で、オープンファミリーという一日無料体験に行ってみた。

児童館に通った経験から、自分が子供と一緒に歌ったり踊ったりするのはあまり抵抗はなかったが、児童館と大違いなのは、いい年のオジサンたちや、デイスコのほうがお似合いなのではと思ふような若いオニサンたちがいたりしたことだった。突然その場に足を踏み入れると「何だ、こりゃ、踊る宗教!」めちゃくちゃ陽気な雰囲気で、外国語の歌に合わせて踊ったりゲームをしたり、その次には七カ国語のテープに合わせてウニャウニャと言ってみる。日本語、英語、スペイン語、韓国語、フランス語、ドイツ語、中国語。

娘にとっては、その活動の陽気な雰囲気と、親も一緒ということが、よかったようだ。「バレエの代わりに通ってみようか?」「うん、いいよ」。

娘の学校生活がまだ始まっていないかったので、ヒッポの活動が主に夜（六

時半〜八時半)であることもあまり気に留めず、あちこちのファミリ(活動の場)に出てみた。都内だけでもかなりの数があるファミリは、会員になればどこに何回出てもいいのだ。

結局バレエに負けぬほどお金はかかるけど、私も娘も、そしてまだ三歳だった下の子まで一緒に楽しみながら、七カ国語(現在は十一カ国語)ができるようになるなんて、そりゃ結構!……ほんとは軽いノリだった。

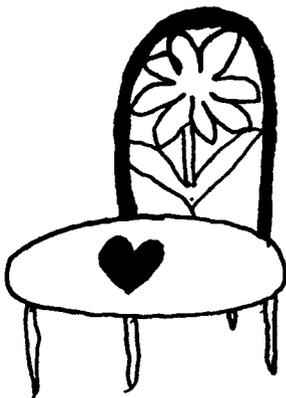
(ハマツテしまつた)

一カ月ほど経ったころにはすっかりハマツテしまっていた。なぜ私がヒッポにハマツテいったのか……

子育ての始めの五年、アトピーの子供を抱え、子供が育つ、病気が治るということについて、大きく考え方を変えざるを得なくなった私だった。知識を無理やり教え込むこと、自然治癒力を無視して薬で病気を押さえ込むことをやめて、自ら育つ力、自然に治る力を見守る、励ますことが周りの大人の

すべきことだと気が付いたわけだ。そこへヒッポとの出会いがあった。

環境さえあれば、赤ちゃんたちは、自然と言葉を身につけていく。ヒッポの多言語習得の方法、「赤ちゃんに学ぶ」という自然習得の考えが気に入った!先生はいない。テキストは見なくもいい。文法なんて気にしない。家でできるだけテープ(ヒッポオリジナルのストーリーテープ)を聞くだけ。ファミリで集まったときに、赤ちゃんになった気分で、みな話す多言語の中に身を置く。「あっ、あの音、テープの中に出てきたっけ」なんて気が付けたらうれしい! 言えるようになったことを言ってみる。フェロウと呼ばれるファミリののお世話役みたいな人たちがいて、実に聞き上手、褒め上手、乗せ上手! 「発音がちょっと違います」なんてぜーったいに言われない。どこの国の言葉でも、ちよつとも言えたら大賛辞! ちよつと、赤ちゃんがおしゃべりできるようなころの親のような接し方をしてくれるのだ。



線路端の小道で飽かずに電車の行き来をながめながら、「電車、行っちゃったねー」と言う親の言葉をまねて、「:チャ、:タ:」と言っていた幼児の言葉は、いつしか「:ンチャ、:タッタネー」になり、そして「デンチャ、イッタッタネー」になっていく(こういうことをヒッポでは大波だったのが切れ込んでいくと言っている)。親は目を細めてそれを見守り、決して「ンチャじゃないでしょ、デンチャよ。デは齒茎に舌をつけるの。チャじゃなくて、



シャよ。さ、言っでごらん、発音練習
しましよう。それとね、イッタって
うのは過去形だからね……」なんて
ことは言わない。そんなことしなくて
も、ちゃんと子供は「デンシャ」と言
うようになり、自然と過去形、現在形
の使い分けだってできるようになるも
のだというヒッポメンバーの話は、と
ても興味深かった。

細かい部分にこだわらず、全体を大

波でとらえる。英語らしさ、スペイン
語らしさ、韓国語らしさ、がつかめて
くる。雑音のようになにか聞こえなかつ
た言葉が、何度も聞くうちに耳になじ
んでくる。子供が意味も分からずに歌
謡曲を歌ったり、コマージュルをそっ
くりになねたりするように、ふと、あ
るフレーズが口ずさめるようになる。
一つ一つの単語の区切れ目なぞ分から
ない、まして冠詞だの単数形、複数形、
過去形、現在形かの分別もできないけ
れど、とてもその言葉らしく、〇〇語
らしく、言えるようになる。

今の私に体験できているのはそこま
で。

ところで、この「〇〇語らしく言え
るようになったフレーズをみなの前で
披露すること」をヒッポでは「芸」と
言っていて、その「芸」を引っ提げて
海外へホームステイに行ったメンバ
ーたちが、数日から数週間その国の言
葉をどんどん話せるようになってしま
うのだ。もちろん、かなりのテープの
聞き込みがあつたことなのだけれど。

海外からのホームステイを受け入れ
て、その人の国の言葉を話せるようにな
ったというの、ヒッポでよくある
話。

残念ながら今のところ、行くのも受
け入れもできていない私だ。それでも
入会して二カ月後、あるファミリーの
集まりで、メンバーの話を聞いていた
ときに、ふと韓国語のかなりまとま
ったフレーズがズルズルッと浮かんでき
た。そのフレーズの中に入っていた言
葉をそのメンバーが話に取り上げてい
たことで私の「芸」が触発されたみた
いなのだ。確かにテープの中では何度
も聞いているけれど、ことさらそば
かり熱心に巻き戻して聞いたわけでも
ないフレーズがどうして急に言えるよ
うになったのか、よく分からない。

（私、韓国語知ってます！）

それからしばらくして、子供とバス
に乗っていたときのことだ。前座席に
座っていた学生ふうのオニイチャンた
ちの一人が子供に「コンチワー」と話

しかけた。そのときは、子供好きなオニイチャンドと思っただけで、はにかんでいる子供に「ホラ、おにいちゃんがこんちわわって言うてくれたじゃない」と返事をするように促すと、なんとオニイチャンたち同士で話しているのは日本語ではない！

「あらっ、中国か韓国の方？」と尋ねると「韓国から来ました」とっさに「私、韓国語知ってます！」なんて言ってみようかなんとなんともまあ心臓強い私であることか。「アンニョンハセヨー（こんにちわ）」と言ったとき、彼らがなんとうれしそうな顔をしてくれたことか！

頭の中で懸命に韓国語のテープを早送りして、使えそうな言葉を探した。「チョンベケスニダー」「チャイプタカムニダー」「カムサンニダー」などと連発すると、「はじめまして、ですね。どうぞよろしく、ですね。ありがと、ですね」と、日本語の上手な彼らはニコニコ応じてくれた。「韓国語を勉強しているのですか？ とても上手です」な

んて言われて舞い上がってしまった私である。もっともそのときは「かなりまとまったフレーズ」の「芸」の披露はできなかった。だって、「えーっ、ジヤネットなの？ 写真と全然違う。ああ、分かった。髪を切ったんでしょ？ かわいい！」だとか、「さあ、みんなでテーブルを片付けよう」なんていうフレーズが唐突に飛び出してきたら（ストリーテーパーで覚えるわけなので）、幾らそれが韓国語でも、彼らだって面食らってしまうだろうから……。それにしても私にとって十分にうれしく楽しい出来事だった。

（子供より楽しんでる私）

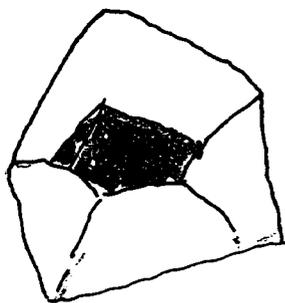
韓国語のペラペラなメンバーがいつからどんなふうに見えるようになったか話してくれた。初めて自転車に乗れるようになったときの、そんな感じ。ずーっとできないんだけれど、繰り返していくうちに、あるときから急にパツとできるようになって、あとはどんどんうまくなる。

いつか私にもそんな日がくるかと思うとワクワクする。

このごろではただ外国語が話せるようになれたら、という思いだけでなく、海を渡ったところに住む人々と交流したいなら、同じ日本語を話す、すぐ近くに住む身内やご近所の人たちとの交流だってもっと大切になりたいな、などと殊勝なことを考えたりしている。海外のニュースにも、以前より耳を傾けるようになった。

外国語にはとんと興味がないという夫は、私のヒッポ熱がいつまで続くことかと言ってニヤニヤ笑っている。でもお父さんメンバーだけの集いや、合宿にも出てくれてからは、けっこう話題が通じるようになった。

今、子供より、自分のほうが楽しんでるヒッポだ。メンバーはほんとうに幅広い年代層で、私の母くらいの年の人ももちろんいる。イキイキヒッポおばあちゃまたちを見ていて、私の老後の楽しみはバッチリだワとひそかにほくそ笑んでいる。



「わたしが燃えているもの」 というテーマで投稿できる ようになるために

川崎市中原区
水谷順子

仕事に、趣味に、生き生きと頑張っている女性たちが、原稿用紙に向かって、あふれでる自分の思いをつづっているのかと思うといいなあため息が出してしまう。「今何しているの」と聞かれて、「ダイエット」なんてごまかして答えるかわりに、「仕事が忙しくて」とか、「ボランティアで毎日大変よ」なんて言ってみたいものだ。それでも半年ほど前に比べれば、随分と心が落ち着いてきたと思っている。

（抜け出せないのは、娘のせい？）

一年ほど前にこの地に引っ越してきた。以前から、主人の転勤を機に働き始めようと考え、主人も賛成してくれていたのだけれど、娘たちは環境の変化に慣れるまで時間がかかり、「もう自分のことは自分で考えなさい」と突き放すわけにはいかなかった。長女と次女は年子で中学入試。二人とも塾が大嫌いだ。でも家での勉強で試験に合格するほど甘くないことは自分たちがよく知っている。

こんな娘たちのストレスを目の当たりに見ると、自分だけ「仕事をするから」とばたばたと動くのはどうにも後ろめたく、またこの不況で、週に三〜四日の都合のよい働き口もなかなかなくて、次女の入試が終わるまでは、娘たちにじっくり付き合っていこうと決めた。

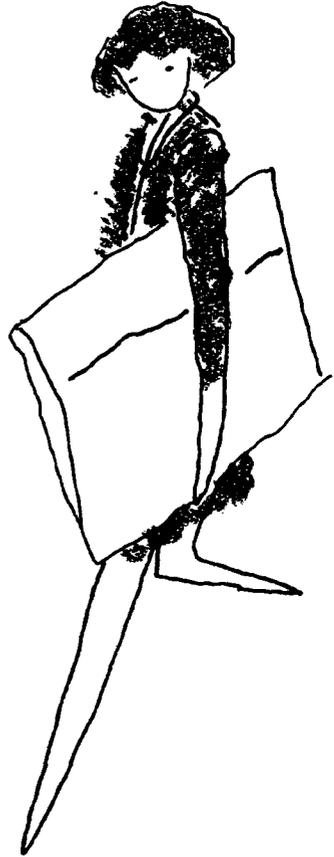
ここまではよかったのだけれど、実際には娘たちが、学校から帰り、塾へ行くまでの時間と、夜の勉強を傍らで見ただけのために自分が縛られている気がして何ともむなしかった。みなぎが学校へ行っている間、私は一体どうやって時間をつぶせばいいのだろうか。そして帰宅して、いらいらする娘たちをなだめたり、すかししたり、しかったり。こちらのほうもストレスがたまって、「親子でこんな思いをするなら、いっそ入試などやめてしまえ」と思うのだが、子供を産んだ以上この程度のことです。責任を放棄するわけにはいかない。多分これほど親が必要とされる時期は最後であろう。

そう思いつつも、私はどんどん落ち込んでいった。結局は私が主婦の座にどっかりと腰を下ろして抜け出せないのを子供のせいにしていないのではない。塾が楽しいという子もいるのに私はどこかで間違えて育ててきてしまったのかも知れない。セーターを編み、サンドレスを縫い、週に何回かケーキを焼く生活が急速に色あせていく。

（発 想 の 転 換）

そうだ、考え方を換えればいいのだ。次女の受験が終わったなら、一生懸命仕事を探すのだから、それまでは休職期と考えよう。ずっと仕事をばりばりとこなしてきたキャリアアウーマンは自分がすり減ってしまう前に、充電の時間が欲しいと、きっと思っているはず。彼女たちならどんなふうに使おう？

まずは「書く」ということに携わっていききたいのだから、ライターの講座を受講することにした。一週間に一度、はじめに学生する。宿題はワープロ仕上げなので、悪戦苦闘。漢字は忘れて



るし、頭も感性もすっかり固くなっている、「働くななんて無理かも」と自信喪失。それでも大きなバッグに資料を詰め込んで、電車に乗ることだけでも背中がしゃんとする。「格好だけなんてむなししい」と自嘲したくなるのをぐっとこらえ、文を書くためには読まなければと本を開く。

そして本を読んだり、文を書いたりするのはなかなか時間を取られるものだということが分かった。暇を持って余す現在ならともかく、働くようになってからもっと時間を効率よく使うようにしなければ、年中忙しがって疲れるば

かりだろう。食べ物の汚染、環境問題のことも本で読むうちに、有機栽培の野菜などの宅配を頼むことにした。安全な野菜のみならず、肉や魚、無添加の調味料やお菓子も頼むことができ、献立に計画性もできたし、何よりも届けてくれることによって、私の買物に費やす時間は驚くほど減った。

これで将来働きに出ても、出来合いのお総菜で急場をしのいで家族の不評を買ったり、後ろめたさに小さくなることもあまりないかもしれない。すっかり気をよくして、次はカタログ販売。こちらでも色々試したりするうちに、気

に入った会社に絞り込んで、あらゆるものを頼むことができるようになった。こちらでも衝動買いをしないので経済的
と思っている。

お使いに出ないで済む時間をさてどうするか。それこそ有閑マダムの特権、アスレチックジムに通って、筋肉トレーニングを始める。

健全な精神は健全な肉体に宿るのだから、まずは器を鍛えてやろうではないかと目一杯汗をかいて、ビールはぐっと我慢してポカリスエットを飲めば、まるでニューヨーカーの気分。このそうかいさに家事も手早く片付ける。ここまでくればもう下を向いている自分ではない。

〔覚悟はついた〕

さあ仕上げは娘たち。この夏休みはなるべく家の中のこまこまとしたことをやらせようとした。お米をといたり、そうめんをゆでたり、洗濯物を取り込んだり、お風呂をたいたり、少しずつ、反発されないように。

娘たちは家事を手伝うことによって、家族という単位を再確認して、主人との会話も増えてきた。この夏休みは親離れと、家族の結びつきという相反する事柄をみなで少し学んだと思うのだが、これも気持ちと時間にゆとりがあったせいだと思う。

さあここまでできてやっと、心置きなく娘の入試に付き合う覚悟ができたよ
うな気がしてきた。私が昼間、だらだらと過ごしてもしかられるわけでもないけれど、反対に一生懸命にやっても結果となって現われるものはないし、これも評価してくれるわけではない。だからこそ、自分の責任で、納得して過ごしていくのみである。これまでの私の「子供と向き合ったお母さん」の生活は決して悔やむものではないが、子供も私もその時期は過ぎようとしているし、また時代も変わってきている。
近い将来必ず仕事をすることを自分に約束して、そのときの自分を想定することににより、今をこつこつとやっていきたい。

★わいふバックナンバー

- 226号 セカンドハウス持ってみたらば
- 227号 子どもの出現
- 235号 我が家を手に入れるまで
- 241号 こうして夫を変えました
- 242号 私のマスコミ体験
- 243号 特集ナシ

子育てはつらい

核家族のための
子育てガイドブック 三〇〇円

書きたい女たちへ

―体験的文章入門― 六四〇円

性

妻たちのメッセージ 一三〇〇円

お申し込みは電話でどうぞ。
☎〇三―三三六〇―四七七―
三三六〇―四七七―

学徒動員の記録を

横浜市港北区
酒井智恵子



私が今、心を燃やすもの、それは先の大戦末期のころ、私が体験した学徒動員の記録です。

なぜ？と聞かれたら「動員先で手榴弾、九二式歩兵砲、高射砲などの武器をつくったからです」と答えましょう。

（今は「こどもの国」も昔は）

当時、私は横浜にある神奈川高等学校（現、神奈川学園）の三年生でした。政府は勝つために国民を根こそぎ動員しようと計画し、老いも若きも男も女も働くことを義務づけました。家で花嫁修業する娘たちは挺身隊に。兵役猶予の特権を持つ大学生は学徒出陣。私たちのような中学生、女学生からは勉強を取り上げ、工場行きを命じました。

動員に駆り出されたのは昭和十九年（一九四四年）六月二十三日です。十四歳でした。

私たちの学校の三年生以上は各方面に分けられました。私の組は、JR横浜線長津田駅から四キロほど離れた多

摩丘陵の山の中にある工場でした。東京陸軍兵器補給廠、田奈部隊と呼ばれていました。現在は「こどもの国」という遊園地になっています。何年前かの「わいふ」一八八号「子連れ遊びのガイド」に紹介されたことがありますからご記憶の方もいるでしょう。

作業の危険性から山あいの谷間、谷間に、火工場、熔填場、穿孔場、完成場、弾薬庫などが点在していました。そこで高射砲、中小口径野戦砲、手榴弾、戦車地雷、発煙筒、小銃、拳銃などがつくられ、本土決戦に備えて備蓄したり、長津田駅から引き込んだ支線で前線に運んでいました。弾薬取扱量は日本一だったそうです。

動員学徒は私たちのほか、中学生（男子）（現、神奈川県立横浜翠嵐高校）もいました。

女学生の仕事は、高射砲の薬莖に入れる黒いスパゲッティ状の黒色火薬を両手で丸めて白糸できつく縛ったり、その火薬を入れる円筒型の布袋の底にあるポケットに砂状の発火薬をしようこ

で流し込んだり、ポケット口を縫い針で半返しにチクチクとじたりすることでした。このほか、熔填場という黄色火薬の工場では、弾頭にペンキで記号を刷り込んだり、出来上がった手榴弾を浅い箱に入れて南の島の自決用にと緊急発送しました。

いつも火薬を扱うので、手のひら、足の裏は黄色火薬そっくりのレモン色に変わり、幾ら軽石でこすっても取れなくなりました。

その年の秋、十月十日に私は火工場五号で九二式歩兵砲の弾頭検査を命ぜられていました。連日の疲れと空腹からか、その弾丸を自分の右足の親指に落としてしまいました。その夜、傷はずき、丸太のようにはれ、つめは後日はがれるというけがをしたのです。この仕事は本来男子工の役でした。それが次々に応召となり、ついに女学生の細腕が代わることになったのです。この弾丸は四キロほどの小型とはいえ、体重三十七キロの私には重すぎました。現場から男手が消えるほど、戦況は悪

化の一途をたどっていたのです。今もその親指は押しつぶされた形をし、生え替わったつめは一段と部厚くけがのこん跡を残しています。

私たちは毎朝中学生と長津田駅前に集合して、部隊差し回しのトラックかバスに乗って部隊に行くことになっていました。ところが秋も深まった十一月三十日に、荷台に中学生を満載したトラックが部隊直前に流れる奈良川に転落し、六名の尊い命を奪われるという事故がありました。



それをきっかけに、貨車通勤となりました。ぎゅうぎゅうに詰め込まれた後、外から鉄の扉を「ギイッ」と閉められ「ゴットン」と動きたすと、まるで奈落の底に落ちていく気がします。私たちは荷物か動物並みの扱いでした。

（恐ろしい爆発、やがて空襲）

年が明けて昭和二十年（一九四五年）の二月七日に、決して起きてはならない爆発事故が起きたのです。多数の死者が出ました。完成した樺地雷を貨



車に積み込み中の出来事だったので。たまたま現場付近を通りかかったクラスメイトの四人がこの事故に巻き込まれ、そのうちの一人、今は亡きSさんは片足切断の重傷を負いました。

絶えず危険にさらされる毎日でしたが、私は一種のスリルを感じ、戦争に役立つ武器をつくれることに誇りを持ち、喜んでいました。

この動員を母も喜び「頑張りなさい」とげきを飛ばしました。父は背が低く

て兵役に就くことができず、母は男の子を産んでいません。天皇陛下に身内をささげることができないので、周りの人に肩身の狭い思いをしていたのです。私が軍隊で働きましたので「娘をお国にささげた」と、ことのほか喜んでいました。

工場に行きだして何カ月かは、空襲はまだ他人事でした。やがて三月十日の東京大空襲を皮切りに、その手は私の住む横浜の外れの町、六角橋まで伸びてきました。

「ヒュルヒュル」焼夷弾しょういだんの降る中を、家を守る父を残して、母と姉との三人で近くの丘の横穴式防空壕に逃げようと表通りに出たときには、B29が頭上にはいました。焼夷弾は燃え盛るまきのようにバラバラと落ちてきます。母は恐怖のあまり坂の途中で座り込みました。腰が抜けたのです。振り返ると町は炎の中で、六角橋郵便局の二階建ての建物が紅蓮の炎を背に黒いシルエットを浮かび上がらせていました。五月二十四日の夜でした。それから一週間もし

ないうちに横浜は大空襲に遭い、市街地の九〇パーセントは灰と化しました。連日の空襲のサイレンに防空壕へ逃げ込むので、夜は寝る間もなかったのですが、翌朝にはしゃんと立ち上がって工場に出かけていきました。間もなく日本は無条件降伏。

（女学生も戦争犯罪に加担した）

そして平和の道を歩み始めて年月が経ち、私はいつしかあの動員時代を忘れていきました。

それが突然よみがえったのは、戦後も三十数年経って、クリスチャンになり、ふと耳にした一言です。

「だれでも他人を傷つけていない人はいない」

このとき、記憶の箱はパツと開きました。そして私の誇りでもあった弾丸つくりが飛び出してきました。

銃後の乙女として純粋な気持ちでつくり続けた武器は、知らないで犯した罪として迫ってきたのです。あの時代、抵抗を感じるどころか、一人でも多く



の敵を倒すのだと、祈りにも似た思いでつくり続けた弾丸は、ひよっとすると、いや間違いない人を傷つけたり、死に至らしめているのです。私は弾丸の飛んでいった先のことなど気にもしていませんでした。私の誇りはこのときペッチャンコにつぶれました。やりきれなさで胸はふさがり、懺悔の涙がほおを伝いました。戦争に巻き込まれると、人々は好むと好まざるとにかかわ

らず、被害者と同時に加害者にもなりうるのです。

戦地に送った手榴弾は、私と同じ年ごろの沖縄の少女をも犠牲にしてしまったと聞いたのは戦後です。彼女たちは追い詰められた壕の中で、私の送ったかもしれない手榴弾で散っていったのです。食糧のなくなった南の島では、味方同士の食糧の奪い合いに銃が使われたと生存者は証言していますし、戦争文学の「俘虜記」などにも書かれています。

先日、知人から聞いたのですが、今の大学生に「挺身隊とか女学生の学徒動員って知っている？」と尋ねると「ああ、あの従軍慰安婦のことでしょ」と答える人がいるそうです。女子挺身隊＝従軍慰安婦。驚きというよりあきれます。終戦特集番組には必ずといってよいほど、学徒出陣と学童疎開が報道されますが、その中間の世代、学徒動員令によって学業を捨てざるを得なかった中学生や女学生のことには、すっぱり抜けているのです。

（武器のない時代の到来を祈って）

私は、小さな一歩ながらこの記録をまとめようと思ひ立ちました。まず初めに国立国会図書館に行きました。田奈部隊の存在を確かめたかったので、資料はありません。次に訪ねたのは横浜市の市立図書館です。そこで戦史双書をめぐり、田奈部隊は地名をつけた通称で、正式には東京陸軍第二造兵廠であったことを突き止めました。

同じ図書館で偶然、一緒に動員していた中学生S氏の父親の日記が見つかり、息子の動員生活が克明に書いてあり驚きました。同じ組のYさんが動員生活を日記につけていたことも分かり、見せてもらいました。その日記で私がそれまでどうしても思い出せなかった九二式歩兵砲を落とした場所、日時が分かったのです。徴兵されるまで田奈部隊に徴用工として働いていた方も見つけ、話を聞くチャンスもあり、おぼろげな記憶も確認できました。「求めよ。さらば与えられん」

そうこうするうちに、私は住民検診で肺ガンにかかっていることが分かり、一カ月のベッド待ちをしました。その間、ひたすらこの記録に没頭したのですが、もしあのとき心を燃やすものが高かったら、私はどんなにいらだったことでしょう。

やがて入院。手術を受け、ベッドに横たわる身となりました。私はそのとき、「もう一度、立ち上がれるようになったら、沖繩の戦跡地巡りをして『ひめゆりの塔』の前で頭を垂れたい」と願ったのです。

手術後の経過はよく、念願かなって夫と沖繩に飛んだのは平成四年（一九九二年）の二月です。戦跡地の「ひめゆりの塔」や摩文仁丘に行った日は豪雨でした。私は雨の中で頭を垂れ「二度と再びこの手で武器をつくることはありませんように」と、神様に祈りました。そして旧約聖書のミカ書四・三の一節を思い出していました。

「主は多くの民の争いを裁きはるか遠くまでも

強い国々を戒められる
彼らは剣を打ち直して鋤とし
槍を打ち直して鎌とする
国は国に向かつて剣を上げず
もはや戦うことを学ばない」



降りしきる雨は、この地で戦いに倒れた犠牲者たちの「もう戦争はしない」と訴える号泣に思えました。

私は今、三カ月に一回は病院に通い検査を受ける身です。何とかして、このライフワークともいえる「学徒動員の記録」を完成させたいと思います。武器のない世界を夢見ながら。

(え・田沼千恵)

自費出版は

「わいふ、へどうぞ！」

「わいふ、編集部では自費出版の制作をしています。本をお出しになりたい方はぜひご利用ください。」

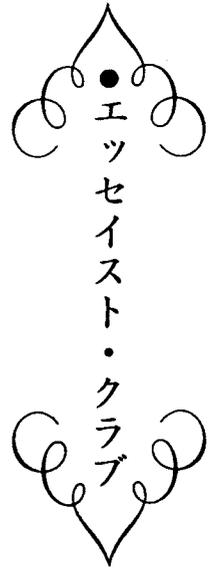
自分史、回想録、旅行記、童話、詩集、歌集、句集、同人雑誌、絵本、コミックまで、何でも作れます。

費用はモノによりいろいろ違ってきますが、市価よりは確実にお安いです。ご事情を伺いご相談に応じますので、ぜひお問い合わせください。

イラストも用意できますし、お書きになれない方のために、聞き書きのまとももいたします。

人生の記念にご計画なさってはいかがでしょう。





故郷の家

千葉県習志野市 藤野 宏子

姑の初盆なので墓地のある故郷の村へ明日出かけます。広いだけで何も古い家に身の回りのもものを持ち込んで、一人で泊まることになりました。ほんとうは心細くて怖いのですがそんなことは言ってもらえません。

夫は休みが取れず、私は行くか行かないかどちらを選ぶかと考え、行くほうを選びました。

都会暮らしの夫と私が結婚する五年前、夫の父は一晚の病で亡くなりました。四人の子供のうち夫が長男、弟が故郷の家を継いで百姓になりました。私たちが結婚した年の暮れ、父と同じく一晚の病で弟が亡くなりました。まだ二十四歳でし

た。弟の嫁さんと遺児も今は亡く、その家を建てた祖父母も老いて亡くなり、町で暮らしていた姑も亡くなりました。古い家は一時は人に貸していましたが今ではだれも住んでいません。妹二人は嫁ぎました。

住む人のいない古家に私たち夫婦はいつの日か住むようにしたいと思っています。夫は定年を半年延ばし、またもう少し延ばしして勤めています。私は市内の商店にパート勤めをもう長くしています。友人も多く、ボランティアも忙しくて、田舎へ帰ることは今のところできません。

村には湯倉井という清水のわく井戸があり、長寿の人が多かったと古い記録にあります。子供たちが都会暮らしをするようになって朽ち果て、つたが絡まりやぶになった家もあります。私たちが古い家へ戻らなければいざれ廃屋になることでしょう。

私はあの家がとても怖かったです。どの部屋にもだれかの目があるような気がしました。中でも奥の天窓のある部屋は特別怖いのです。床板が朽ちかけ畳を踏むとブヨッと体が沈む感じのところがあります。座敷のほうもブヨッとしたところがあります。そこは避けて歩くつもりでもいつでも足を踏み入れてしまいます。夏でもひんやり

とした空気が漂っています。

故郷の家のもろもろを全部引き受けて、私は堂々としていたのです。先祖代々の村と墓地を守り、祖父母の建てた家を守り、私たち夫婦は畑を耕し、花を咲かせ、できれば短命の家の過去を盛り返したいと思います。

古い、広いあの家で一人で寝るとうなされるかもしれません。眠れないかもしれません。いよいよ明日八月十二日、新幹線のピークの日、私は行きます。初めの一歩さえ出せば私の気持ちは据わると思っています。

おじいさま、おばあさま、ご両親さま、弟よお嫁さんよ、Tちゃんよ、縁あって身内になった人たちに明日は花を奉りましょう。

私は「実家の母」

和歌山県日高郡 中松ミナ子

まだ若かったころ、「実家」ということばに出会うたびに、たとえようもない甘く懐かしくそしてこの上もない安らぎのある場として私はそれを思い描いていた。同年輩の知人から「今日は実家へ帰るの……」とか「これ実家の母から……」な



ど、「実家」という言葉を聞かされるたびに、ひそかにうらやましくてならなかった。

なぜなら私は結婚後、間もなく商売を手伝ってもらうという事情もあって、母とともに暮らすことになり実家は自然消滅せざるを得なかった。

以来、世間一般と比べてみると実によくできた寛大な夫ではあったが、気ままな性格の母との共同生活には穏やかな関係を持続するばかりとはいかなかった。

大波小波は繰り返し起こった。その都度夫と母のはざま、神経は疲れ果てたけれど、さりとて実家へ駆け込むことはすでに不可能となっていたから、私は自分自身の内面でのみ七転八倒しながら一人で立ち直るしかなかった。

結婚後も母とともに暮らせたことは幸せであったわけだが、その分「実家」を失った寂しさは心にいつもあった。

そしていつの間にか私は実家の母の理想像を心

に形づくっていた気がする。

娘が嫁いだとき、私は自動的に「実家の母」という立場になった。

商売をなりわいとしてきたわが家では年中忙しく、子育ては手抜きばかり……。その罪滅ぼしのためにも実家の母を完璧にやり通さねばならなかった。

さて娘の連れ合いは中学校の同級生。校区が同じということでは家もごく近いことでもあり、現在東京勤務のため、二人の帰阪を待ちかねるのは両家とも同じ。そうなると娘も気を遣って七対三か八対二の割合でしか里帰りをしなくなった。張り切っていた「実家の母」の大役なのに、舞台のソデで出番を待つ心境の私であった。

娘も「実家が近いのもちょっとマズイよ」と苦笑したことがあった。

ところが去年、私たちが夫の郷里についての住み家を持ったことで、月の半分は大阪、あとは和歌山暮らしの変則二重生活を余儀なくされることになり、娘はこの夏、初めて黒潮望むわが家で三泊したのだ。待望の「実家の母」という役割がここに来ていよいよ脚光を浴びることになったのである。

たった三日間だが私はそれはいそいそと全力投

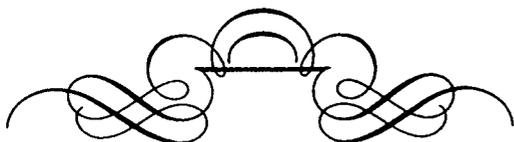
球の心意気でやり通した。だが本音は（あーあ、疲れたア……）の一言に尽きたが……。

実家の母は婚殿にテーブル一杯の料理を用意しなければならぬ。何しろ娘一家ときたら収入の大半を食費に費やすという食いしん坊夫婦であり、息子の嫁に言わせれば「グルメ一家」なのだ。そうだ。

しかも娘夫婦は羽が生えたように滞在中はゴルフに飛び回って、夫と私はポツポツ人見知りの始まった十カ月の孫を交替で抱いたりあやしたり離乳食を食べさせたりの大奮闘。

ようやく帰京前夜、娘は荷づくりしながら、「よかったわ、ここに来られて。お母さんも幸せネ。ステキな景色を毎日ながめて……」「うん、まあネ」「また来るわ、ゴルフ場もよかったし、それにお母さんには気を遣わなくて済むもの最高よ。彼も大満足よ。魚もおいしかったし……久しぶりの夏休みだったってエ」「そりゃ、よかったワ」そして翌日、真夏が戻った南紀の青空へ娘一家を乗せたプロペラ機はアツという間に飛び去っていった。

すっかり頭の薄くなった夫が白いハンカチをちぎれるように振っている……。実家の母も最後の力を振り絞って同じように手を振った。



妻

福島県南会津郡 室井 邦夫

妻が六十四歳で脳内出血のため倒れてから二年五カ月になる。

病院に十カ月、そのうち二カ月は意識不明であった。

退院後老人保健施設に四カ月入所、現在は自宅で私の介護を受けている。

妻は右半身不随である。会話は何とかできる。毎日二回りハビリをしている。まだ歩けない。

妻を思うと哀れである。

夫にとって妻の存在は大きい。

妻は商家の出であるが、きゃしゃな体で四十年間よく農業をやってきた。

私がサラリーマンなので一人百姓であった。

結婚してから私は妻との優雅な生活を夢見、妻の労働を少しでも軽減したいと思った。

そのため計画的に貯蓄をし将来に備えた。だが現実には厳しく、実現には長い忍耐を要した。

いつも私は努力が足りない、まだ努力が足りない。

いと生きてきた。勤務の傍ら可能なかぎり妻の農業を手伝い、二十代には本気で植林もした。苦勞したと思つたことは一度もない。

そうした生活の中にあつても努めて妻と小さな旅をした。

昭和四十年、三十八歳のとき粗末な農家づくりの住宅を全面改築し、目標の一つをひとまず果たした。



農業のほうはその後政府の減反政策があり、水田は全部貸し付け、畑のみとなったので妻の労働も軽くなった。

そのころから生活に少し余裕ができたので二人で遠くに旅するようになった。

生きていることは感動である。二人の旅は互いの発見につながり人生を深くしてくれた。

始めあれば終わりあり。人生は長いようで短い。

相対的世界に煩わされることなく自由人として生きるのが私の目標であり、私の哲学である。

母は二十年前に亡くなった。

共に喜び共に悲しんでくれた人、それは母と妻であった。母と妻があつて私の人生があつた。



妻は私の文学人生の支えでもあつた。

その妻が今は寝ているときのほうが多く、介護なしでは一日も生きてゆけない。

妻がどこまで回復するかは分からない。このまま生涯を終えることも覚悟している。

今は妻を介護することが私の生きがいの一つとなった。余裕を持って生きたい。

二人がこの世に生かされている時間はそう長くないだろう。

毎日一日一生を生きている。

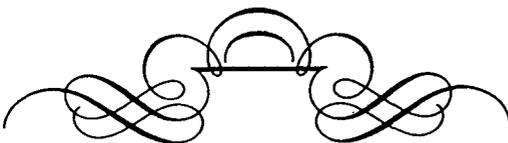
しらす考 あさり考

東京都小金井市 望月 敦子

しらすは、いけません。いえ、嫌いなんじゃないくて好きなんです。炊きたてのご飯にしらすをバラバラと振りかければ、それだけでもう、十分おいしくいただけます。

けれども、あの数の多さがいけません。小ささがいけません。一つ一つの命の重さを考えてやりたいと思つても、それにはあまりにも数が多すぎます。一つ一つを大事に食べてやりたいと思つのに、舌の上でその一匹を確認するのは不可能です。それどころか、うっかりすれば一匹や二匹は床の上にこぼれたり、食べ終えたお茶わんにへばりついたりして、食べられることなく、捨て去られることにさえなるのです。

一食のうちに数えきれないほどの数のしらすをいただいで、あるいは無駄にして、このことは、おいしくしらすをいただく私の心を曇らせます。世の中には、鯨を食べることが残酷だと主張する人々がいるようです。けれども（それはもちろん、命を犠牲にしているということでは残酷だけ



れども)、とにかく一頭の鯨に犠牲になってもらえば、たくさんの人たちがおなかを満たすことができます。舌を楽しませることができます。命の重みが鯨もしらすも同じとすれば、一人の人間がものすごくたくさんのしらすをいただくことは、たくさんの人が一頭の鯨をいただくことより、ずっと罪深く感じます。

それでもやっぱり、私はしらすが好き。今日も「ごめんなさい。ありがとう」を言いながら、たくさんのしらすをいただきます。

あさは、いけません。いえ、嫌いなんじゃないんです。あさりバターもおいしい、酒蒸しも捨て難いけれども、何と言ってもすばらしいのは、あさりのおつゆです。これはもう、お澄ましにしても、おみそ汁にしても、最高です。



けれども、あさは自分で調理するまで生きていくというのがいけません。あさりのおつゆをつくるには、あさを水から入れて火にかけます。お湯が沸き始めると、あさはくっつくつと踊ります。『いい湯だなあ』と踊っていると、ほどなく『あっちうちち』に変わり、あさはぱっくりと殻を開いて息絶えてしまいます。その過程は見るも恐ろしいものです。けれども命をいただいて食するのに、その恐ろしいところに目をつぶって何事もなかったかのように食べるのでは、あまりにもあさりが報われない気がします。そこで私は、ついつい一部始終を身じろぎもせずに見てしまいます。

考えてみれば、色々な生き物の命をいただいで食しているのに、あさりにだけ同情するのもおかしなものです。牛だって豚だって、その他数えきれないほどの種類の生き物が、人間が食べるために、麻酔もかけずに刃物を入れられ命を絶たれているのです。ただし、私はそういう食品加工のルートに身を置く立場ではないから、現場を目撃していません。それが、ただ目の前で五右衛門よろしくかまゆでになるというだけで、あさりのへの同情を禁じ得ないというのは理屈に合いません。そう思ってもやっぱり、あさに命をいただくと

きの、あの緊張感はなくなりません。あさりのおつゆをつくるたびに、心底ドキドキしてしまいません。

それでもやっぱり、私はあさが好き。今日も「ごめんさい。ありがとう」を言いながら、あさをいただきました。

回顧

東京都葛飾区 関口 雪枝

夏になると思い出す、あの日のこと。

昭和二十年八月十五日の終戦の日は、私は青森の大鰐温泉にいた。戦火を避け本州の最果てまで、学童疎開した集団の中であった。

青森の夏は短く冬の寒さは厳しい。冬に備えて毎日毎日、野山を駆け巡りふきやわらび採りをする、帰ってそれをゆでてから皮をむく、塩漬けにする、これが続いていた。

ある日、寮長のI先生から「いつもの山菜採りを明日は休んで、天皇陛下のお話をそろって聞くように」と、訓示があった。

それが、突然の敗戦――。

I先生は目を泣きはらした。初めて大人たちが

号泣するさまを見てみんな驚嘆した。号泣の輪は子供たちにまで広がり、やがてすべての人が泣いた。

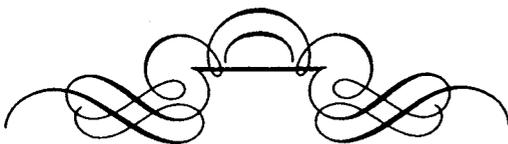
「欲しがりません勝つまでは」とか「一億一心」と全国民が頑張った、あの戦争。

「この苦しみ、悲しみ、痛ましき」はどんな言葉でも言い表わせないくらい深い。

ほんとうに敗戦を自覚したのは、しばらく経って大鰐町へ米軍が大量に進駐してくるのを目にしたときであった。恐ろしいので二階の窓の透き間からそっとのぞいた。背の高い、赤顔の、わしのような鼻を持った人々を見た。一瞬心が凍った。赤鬼に見えて、しんから恐怖を感じた。「これかどうなるのだろう？」と幼い胸を痛めたのだ。私が一年有余の疎開生活に終止符を打って、不安と深い悲しみの重い心を抱いて、小雨降る品川駅に帰ってきたのは二十年十月二十二日のことであった。

東京は焼け野原となっていた。大多数の人々は着のみのまま、家は焼かれ、食を求めてさまよっていた。幸いわが家は焼失を免れたが、学校は焼けてしまった。焼け跡は菜園と化していた。

間もなく四十八回目の終戦記念日がやってくる。思い起こせば敗戦の年の晩夏に、私は大腸カ



タルを患って寝込んだ。生死を分けた闘病の末に、迎えに来た父に伴われて東京に帰った姿は、さながら幽界の人のようであったという。

大鱈町を流れる若木川の清流で遊んだこと、小坂の川原で蛭を追いかけた夕べ、りんごが木になつてゐるのを初めて見た日の感激、苦難の中にもささやかな、楽しいときもあった。

過ぎ去れば懐かしい思い出となる。すべてはるか遠い日の出来事となったが、「いつまでも心に焼き付き、決して忘れることはないだろう」



心に残る名演説

埼玉県熊谷市 野中 詔子

その人と直接に深く接したわけではない。その人は私のことを覚えていない、だろう。けれども私の心のどこかにその人が住んでいて、何となくめいっているときやわけもなく悲しいようなときにふとその人の言葉が思い出され、"そうなんだよな"と自分を励ますことがある。二十年近い年月のうちに、その人を自分の心の中でシンボリックに育ててきたのかもしれないが、とにかく心に残る人なのである。

小学校以来素直に教師というものを好きになつたことのない私としては大いに驚くべきことであるが、その人とは、私の高校時代の校長である。高校の校長といえば、一学期に一、二回ある集会や式典で、壇上からスピーチするときぐらいしか生徒と直接接することはなく、ほとんど記憶に残らないのが常だろう。私の高校時代も同様で、"まあ今度の校長の話はなかなか気が利いているなあ"ぐらいにしか思っていなかった。ところがあるとき事件が起こり、そのときなされた名演説

によって、先生の姿が鮮烈な印象を持って私に残ることとなったのである。

あるとき校内で盗難が発生した。出来心による(？)盗難事件はこの学校でもしばしばあるものだというが、そのときはかなりしつこかった。

女子校であるため特別の更衣室がなく、体育の授業のときは洋服も貴重品も教室に置きっ放し、もちろんかぎなどなくいつ盗まれても不思議はない状態を突かれて、現金の盗難が頻発したのだ。学校というところは、入る気になればだれでも簡単に入ることができ、警備もなく、泥棒には最適である。犯人は外部かもしれないし内部かもしれないなかった。

クラスごとに事件についての説明と貴重品の管理を各自がしっかりするようにという連絡がされ、来校者のチェックも始まった。けれども盗難は続いた。全校の集会でも校長からその旨の話がされ、教員による校内巡回も行なわれた。それでも続いた。

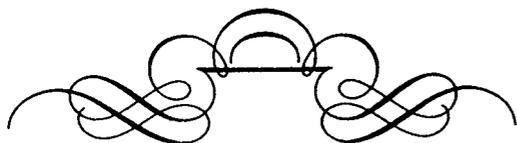
最初は他人事と思っていた多くの生徒もだんだんといやくな気持ちになってきたころ、また全校集会があった。そして、そのときの校長の話は次のようなものであった。

「みなさんも承知のとおり現在校内で盗難事件が連続発生している。当初から推測されていたことであるが、内部犯であることは今や明らかである。

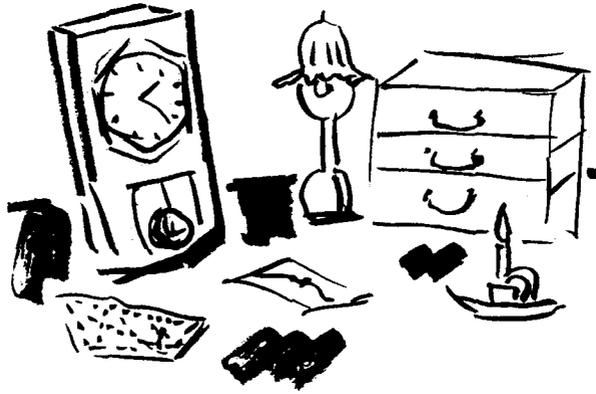
けれども、我々は今まで一環して盗まれる側の無防備さに注意を促してきた。それは、あたかも盗まれる側の不注意に非があるように聞こえたかもしれない。けれどもそれは内部犯であることを認めたくなかったからではない。ほんの出来心から迷える小羊となった思春期の少女への思いやりなのだ。教師も生徒もみんなして暗黙の合意のうちには思いやりの行為を続けてきたのである。

にもかかわらず、一カ月以上経つ今も盗難は続いている。はっきり言って、盗まれる側より盗むほうが悪いに決まっているし、悪いことはかばう必要ないのである。

しかし、それ以上に許すことができないのは、こうした人の思いやりや優しさというものに気がつくことのない無神経な人間である。一時的な過ち自体は、罪を償い反省すれば済むことであるとも言える。けれども無神経な人間というものは常に多くの善意ある人々にいらだちを与え続けることとなる。十六、七歳にもなってそんなことにも気付かない人間は人間として生きていく資格がな



い。そのような者をこれ以上氣遣うことは本人のためにも好ましいことではない。



もし、今後も盗難が続くようであれば、私は断固として警察の介入を要請する。心してほしい」

その後、盗難はピタッと止まった。

先生は、終戦で復員してから地元男子高校の

教員（埼玉県は戦後も男女別学が続いた）になったのだという。戦争で片手が結んだまま開かないという障害を持ち、貧しい長屋生活をおくっていたという。「熊手」というあだ名だったという。とだが、このひどく差別的な呼称さえも、当時は学生の尊敬の念をこめたむしろ親しみの呼び名だったらしい。

小柄な体格、決して押し出しのよいとは言えない容ぼうであったが、物静かで眼光鋭く、深い教養を持ち、厳しくも優しい人柄は、一九六〇年代、高校にまで及んだ学園紛争の波の中でも多くの学生の人望を集めたと聞く。

最近、偶然にも先生の息子さん（もう五十歳であるが）に仕事でお世話になることがあったが、優秀な頭脳と周りに好感を抱かせる伸び伸びとした人柄を見て、つい先生のことを思い出してしまった。そして親の子供に与える影響力の大きさを妙に感じてしまい、わが身を反省したりしたのである。

表面的な優しさに惑わされ、本質的な思いやりや氣遣いに欠ける無神経な人間がじりじりと増えてきているように思える昨今、あの事件のときの先生の厳しい言葉を、時々思い出しては一人納得したりしている私である。

● サレブレシブ ●

お墓

東京都 悠木翔子

「葬儀屋に取り仕切られ、形式ばった、そしてお金のかかるお葬式なんか絶対にやってほしくない。私が死んだら骨は海にまいてほしい。お墓に入るのも絶対いや」と私は常々思っていました。

最近では「死んでもお墓に入りたくないあなたのための法律Q&A」という本を買って研究しています。

ところが……、一四三号の「骨になるとき」の話ではありませんが、わが家でも同じような会話がありました。

夫の母をわが家に招き、一緒に食事をしていたときのことです。母の知り合いに「子供がなく、後継ぎがないのでお墓を

買えなくて困っている人がいる」という話が出ました。

すると、同席していた夫の従姉が「私はお墓とかお葬式とか、そういうの一切興味ない。死んだら私のことを思ってくれる人が私の骨を海にまいてくれれば、それで十分！」と発言したのです。

「ああ、なんてうれしいことを言ってくれるの！」とこそとばかりに「私もそう思う！」と力強い口調で続けました（さすがの私も、姑を目の前にして自分からはこういう意見は言い出せないのです）。この日はチャンス到来！でした。

「ねえ、そう思うよね」

「うん、ほんとうにそう思う」

二人で意気投合して話が弾んでいるところに姑の一言……。

「翔子さんは大丈夫よ。心配しなくても、お父さんが買ってくれた悠木家のお墓がち

ゃんとありますから。安心してください」満面に笑みをたたえ誇らしげに発言したのです。

「げえ……」

声には出しませんでした、もちろん。でも心底、ドツと疲れるというのはこういうときのことだな、と感じました。

後日、同じ考えを持つ友人に相談しました。

「ねえ、どうしたらいいと思う？ 死んだら周りの人間に勝手にされてしまう可能性大よ。夫とて信用できないもの」

「だから、とにかく長生きして、子供に私たちの意志をしっかり伝えて、子供にそのようにやってもらうしかないわよ」

今のところ、これくらいしか方法がないでしょうか。

近い将来、人々の「墓意識」が大きく変わることを望みつ……。

方言バンザイ

アメリカリトルロック市 伊藤琴子

「わいふ」二四三号の三野友子さんの「博多弁万歳」を読み、とても新鮮な感動を覚えました。大変刺激のある文章で、楽しく読ませていただきました。ありがとうございます。

日本全国、色々な土地の言葉があって、私には全く意味の分からない方言もたくさんありますが、三野さんの文章はとても簡潔、明瞭でよく分かりました。ま、これなら私も初級博多弁はいけるかな、という気さえしました。

私は名古屋出身です。昔タモリがTVで、おみゃーさんのエビフリヤーだの、名古屋弁はみゃーみゃー弁とか言っておちよくなっていたんですが、この笑の発音が問題なく英語でも言えるという特典があったのですね。例えば、ハヤピー。

数年前リトルロックで、あるアメリカ人の集りがあった時、神戸出身の方が「伊藤先生の名古屋弁は、うんぬん」と言いまし

た。

自分の育ってきた土地の言葉を汚物扱いされて、私はとても腹が立ちました。その土地土地でちゃんと機能している方言は立派な言葉であり、優劣つけがたいと思います。

三野さんのおっしゃる通り、方言は「日本語のきめ細やかな感性を育てることに大切」であり、また私は日本の財産であるとも思います。

私の住むリトルロックは南部なまりが強く、五年前オハイオから移ってきた時にはちんぶんかんぶんでした。

例えば、十はティエン、時間がタイム、領収書がティケット。清涼飲料水はコーラ類すべてを一括して、ソーダまたはコーク。

最近私はずい分慣れてきて、「あなたはアーカンソーが好きですか」と聞かれると、すかさず、「アーラーク イット」と言うとりです。

土地の人にはとてもフレンドリーな人だと言われておりますたい。

「病院の悪習ワースト3」の高松さん

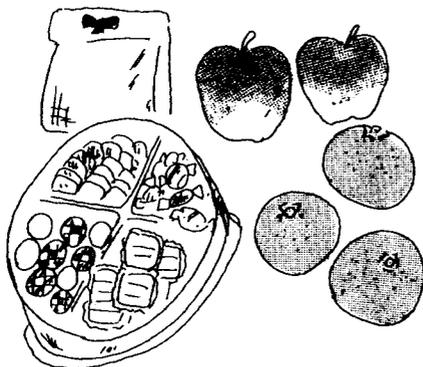
横浜市 黒崎和子

折しも入院中の私は、その(一)、その(二)とも力強い援軍を得た思いで読んだ。高松さんがおっしゃるとおり「普通でない状態のときに、自分を見失わないようにするのは骨の折れる」ことである。

七月中旬入院したその日、まだ荷物の整理をしているうちに、四人部屋の同室者の一人が「どうぞ」と大きな桃を差し出した。そのとき、私はどう対処するか考えてあったので、「折角ですが間食をしないことにしています。お気持ちだけちょうだいします」と断わった。以後、食べ物は一切いかなかった。差し上げないで今日まで通してきた。

例外は退院していった同室者が私の不在中に置いていった菓子で、これは返そうにも返す先がなかったから。

だから、栄養のバランスを考えてつくつてあるに違いない三度の病院食をほとんど



残さず食べる。私も好き嫌いはない。早めの夕食も消灯時間（九時）を考えれば適当なタイミングと言える。全体として入院中という条件の中で快適なように考えてあると思う。

その後、入れ替わった同室者やその見舞い客が「いかがですか？」と、食べ物をくださろうとするたびに断わるのだが少々お

となげないとは思う。あるいは付き合いが悪いのかもしれない。でも私は退院の日までこの自分で決めた原則を守りたい。気に染まぬ甘いものを口に入れるより、病院の食事を残さぬよう食べるほうが重要だと思っ

「老親の引っ越し」 を読んで

千葉県八千代市 小野沢旬子

「老親の引っ越し」を読んで、意地悪く書かれている兄嫁さんにとっても同情し、ペンを取りました。

田中さんのお宅が一軒家であることや、お子さんが一人は大学生であることを読めば、少なくとも小学生三人で塾経営の兄嫁さんのところより、ご両親を引き取ってあげられる条件が整っているのではないでしようか。

お嬢さんは大学生ですもの、おじいちゃんおばあちゃんと一緒に暮らして、「面倒を見ることも可能でしょうし、入れ替わって暮らされてもよいではありませんか。

田中さん自身よくお分かりのように、田中さんは「しよせん」「手伝う」という気楽な立場」にいますのです。それなのに、実際に引き取る兄嫁さんの一言一言を取り上げて、冷たい人のように書くのは許せないので。

「できるだけのことはするわ」と言うだけで、田中さんはズルいなあと正直なところ思われたのです。何を言おうと実際に引き取り、日々のこまごまとしたことをする人が一番立派なのです。

「平等に両親の面倒を見たい」という田中さんが、不平等を兄嫁さんに押し付けているのです。

それに、もし家庭条件がほぼ同じだとしたら、親を見るのは嫁より娘のほうが何事もスムーズではないかと思うのです。男と女の差は考えたくはないのですが。

田中さん、ご自分をご両親を引き取られたこと考えてみてください。兄嫁さんと同じようなことを、きつとお兄さんに言いたくなると思いますよ。

でもね、田中さんはお引き取りにはならないでしょうね。きつと。

(え・田村幹代)

私の選挙運動 体験記

埼玉県 風間 達子 (48歳)

政治家Hとの出会い

私が政治家のHに出会ったのは、今から十六年前のことである。夫の友人を通じて、日本の将来を担う器の大きな男がいるので会ってほしいという話があったのが、きっかけであった。

Hが自民党から出馬という点に、私は抵抗があった。それまで私は特定の支持政党は持たなかったものの、少なくとも自民党に票を投じたことは一度もなかった。

私の父親が革新政党の熱心な支持者であったこともあり、体制にはいつも批判的な目を持っていた。

「政治をもっと身近なものにしたいのです。何でも疑問に思ったことは話してください。必ず時間をつくります。どんな小さな集まりでも伺いますから」
何度か会ううちに、Hの人物の大きさ、温厚な人柄、誠実さを肌で感じるようになった。政党よりまず人物、そして、何より庶民の感覚で話し合える人と確信を持てたので、私は夫とともに

に彼を支援する決心をしたのである。
私は障害者のための、あるボランティアグループに属している。数年前、こんなことがあった。市民には気さくで評判のいい市長のNが会合に見えたときのことである。

「いやあ、みなさんいつもご苦労さん、まったくねえ、昔は聞引きがあって、どこかおかしい子は育たなかったものだが、今は医学が進歩してみんな生きちゃうからな。障害者が増えて、みなさんの仕事も大変になるわけですよ。ほ



んとうに、よくやっていただいでいます」

私たちをねぎらうつもりで言ったらしいN市長の言葉に、私はあいた口がふさがらなかつた（政治家なんて、こんな無神経なものなのか……）。これがいわゆる政治家と接した最初の印象だった。Hの何でも話し合いたいという姿勢が、私の政治家に対する見方を変えさせた。

何回目かにかった折、夫の仲間が提案した。

「Hがなんで保守系から立候補するのか。ゆっくり聞いてみたいね。彼がどこまで懐の深い男か、一度怒らせてみようじゃないか」

ビールを飲みながら、話し合いは深夜まで続いた。Hは将来は総理大臣を目指していると言い、そのためには自民党の中にいることが必要であり、また、その中で勉強もしたいと主張した。

リラックスしてくると、みなは口々にHを非難し始めた。彼が逆上してもおかしくないような失礼な発言、明らかに言い掛かりとしかいえない暴言、私はハラハラして聞いていた。しかし、Hは決して激怒するようなことはなかった。一言、一言、日本の将来について熱っぽく語るHの姿に、私はさらに信頼を深くした。

Hは最初の出馬こそつまずいたが、その後は順調に政治家の道を歩んでいった。そして後援会の組織もだんだんしっかりしたものになっていった。私た

ちはひそかに応援はしていたが、表立って運動することはなかった。

ところが、今回の総選挙では、突然の解散に加え、Hの夫人がほかの選挙区から立候補することになり、苦しい選挙が予想された。

私の夫は小さな動物病院をやっており、政治的にはどうしても中立の立場をとらざるを得ない。そこで、私だけでもお役に立てればと思ひ、ボランティアで事務所を訪れた。人手が足りないので早速手伝ってほしいということになり、私は生まれて初めての選挙運動を体験することになったのである。

何事にも好奇心の強い私は、選挙対策本部がどんなものか、とても興味を持った。また、選挙を身近に感じてみたいという思いもあった。

選挙事務所を手伝う

Hの選挙事務所は、市の中心部からかなり離れたところにあった。駅前の目抜き通りに事務所を構えるのが通例だそうだが、繁華街は交通の渋滞も激

しく、事務所で働く人にとって是不都合なことが多い。今回のHの事務所はわが家から車なら十分、自転車でも十分という位置にあるので有り難かった。地元の支持者が無料で貸してくれたという四百坪ほどの敷地は、車が三十台ほど収容できる広いものであった。そこに二階建てのプレハブが建てられている。一階の表通りに面して受付・応接棟があり、その二階が事務局、受付から別棟になって調理場と食堂がある。長いテールブルが二列並べられ、一度に三十人くらいは食事をとることができるようになっている。その食堂の真上が運営局になっており、二階は渡り廊下で結ばれている。私の働く場所はその二階の事務局であった。

外線電話が八本引かれ、常時二十人ぐらいの人々が働いていた。急な選挙にもかかわらず、これだけの事務所を開設するにはどんなにお金がかかることだろうというのがまず率直な感想である。

事務所に入った私が最初に心がけた

ことは、お互いに気持ちよく働ける場にしたということだった。事務所は若い活気であふれており、二人の秘書をはじめボランティアで詰めている支持者の中には夫と交際のある人が多かった。私は持ち前の人懐っこさをフルに生かし、知らない人ともすぐ仲良くなり、気の利いた雑用係のオバさんの位置を確保するのにそう時間はかから



なかった。事務所内では会う人ごとに、「苦勞さま」、「お世話さま」、「お疲れさま」と声をかけ合った。

選挙戦も中盤を過ぎたある日、ドキリとする電話を受けた。

「H事務所かね」

「はい、H事務所でございます。大変お世話になっております」

「実は、こちらに票があるんだがね。買ってもらえないかね」

中年の男の声である。

(これは大変な電話だ……どうしよう)

部屋で仕事の指示を出しているT氏に相談すると、

「えっ、票を買わないかだって?……やっかいな電話だな。Sさんお願いしますよ」

ちょうど昔からHと親しい支持者のS氏が、事務所に見えたところであった。S氏はゆっくりと受話器を取り上げた。

「はい、もしもし、電話替わりましたが、どちら様ですか。はあ……一票一万円です?……とんでもない、こちらの候補は金がないんですよ。いやいや、私もボランティアで手伝っているんでね。そんな金はないし、あったとしてもそ

んな手には乗りませんよ。そんなことしたら、お宅も手が後ろに回ってしまおうでしょう？

ところで一体何票あるんですか？……え、五票を五万円で……なるほど……ダメならほかへ持っていく？……まあ、市会議員の選挙なら十票、二十票の差で勝負がつくこともあるけど、衆議院の選挙は十萬票くらい獲得しなくちゃ当選できないんですよ……残念ながら五票じゃどこでもちょっと役に立たないネエ……エッ、そんなことありませんよ、Hはホントに金がないんですよ。金がないから、こうしてポランテアで応援しているんじゃないですか。選挙に関心があるなら、一度事務所所に遊びに来て、一緒に昼飯でも食いませんか……いやいや、飯で買収だなんてとんでもない。ただの握り飯ですよ。それでよかったですら来てください」

S氏は笑いながら電話を切った。私はその対応ぶりにほっとした。

「追込みに入っていると、時々こんな電話もあるんだよ。本気なのか、引

かけなのか分からないけど、相手を怒らせるわけにはいかないから、気をつけなくてはネ」

何だかテレビドラマのひとコマを見ているようであった。

また、こんなこともあった。

私が裏手の階段を上っていくと、黒いスーツ姿の三十歳ぐらいの男性が、へっぴり腰でドアの中をのぞいている。様子がどうもおかしい。

「何かご用ですか」

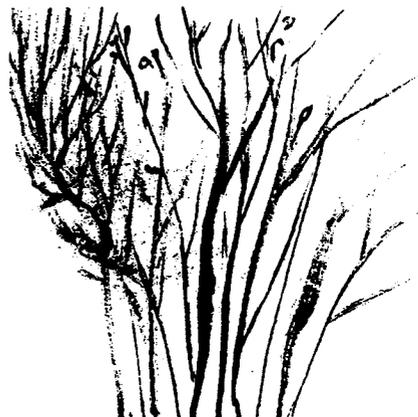
「あ、あのう、ここは何の仕事をしているのですか？」

「選挙の事務所ですけれど……失礼ですけれど、どちら様ですか？」

「えっ、あ、あの……本部から来ました」(やっぱりおかしいなあ、表にはあんなに大きくH候補の名前が書いてあるのに……)第一、本部はここなんだし……「ここが本部ですけど、どなたにご用でしょうか？」

「あ、いえ、K市(同じ選挙区内)から来た者です」

「あ、K市の選対の方ですか。では、今



「だれか責任者を呼んでまいりますので」

「いいえ、けっこうです……」

「と言いか言わないうちに、男はあたふたと階段を下りて走りだした。私は、(もしかするとあれがうわさに聞く選挙スパイでは?)とびっくりする思いであった。

選挙期間中、私はHと一度も出会うことがなかった。秘書の話によると、候補者は六市のミニ集会を飛び回っているとのこと。もちろん、私が事務所に

いることなど知る由もない。私も急なお手伝いのため、趣味の会合やボランティアの予定が詰まっており、そのうえ、家事もあるので思うように時間がとれない。それでも午前中に二時間、夕方から三時間など可能なかぎり事務所に詰めていた。

主な仕事は、応援に駆けつけた人へお茶を出すこと、かかってきた電話を受けること、集まってくる後援者名簿を整理することなどである。午前午後と続くときは、一階の食堂で用意された昼食をいただいた。大抵は、お握りにお新香、みそ汁という質素な食事である。それでも熱心な支持者の協力でお握りの一つ一つに愛情が込められており、残すのがはばかられるほどであった。

一日に、昼は約百食分、夜は五十食分の食事を用意するのは、並大抵のことではないな、と思う。各地区の後援会の主婦十数人が交代で献立を考え調理しているという。調理場と食堂のテーブルには仕切りがなく、暑い中、忙

しく立ち働く姿には頭の下がる思いであった。なぜかこの場所には冷房がなく、大きな扇風機が二台回ってはいるが、火を使う主婦たちは首からタオルを下げ、流れる汗をぬぐっている。「なぜ、ここに冷房を入れないのかし

との答えである。

「へエー、なるほどネ……」

と納得はしたが、調理の人の苦勞を見ているとほんとうに気の毒な気がする。

「それにネ、前の選挙のときに、困ったことがあったの」



ら？」

と一緒に事務を執っているベテランのKさんに尋ねてみると、

「あまり居心地がよいとダメなのよ。食べたらすぐ立って、次の人に交代するほうが能率がいいでしょ」

Kさんは、選挙のたびにお手伝いに駆けつける主婦の一人で、選挙事務所のことには詳しいらしい。

「この前の選挙のときね、夜、八時過ぎに事務所に、握りずしが三十人前も届いたのよ。だれも頼んだ人がいないの



に……調べてみても分からない。でも、選挙中におすし屋さんとかケンカするわけにもいかないの、そのまま引き取ってお金を払ったわけ。そのときはもう事務所には十人くらいの人しか残っていないかった。生ものだし、食べきれないのを捨てるのがとても、もったいなかったわ」

「エーッ、そんなことがほんとうにあるの？ 一体だれが注文するのかしら」「反対派の人か、嫌がらせか、分からないけど、とにかく選挙っていうとそんなことザラにあるのよ」

「へー、驚いた！ それじゃ、お金もかかるわね」

「おそばが大量に届くことも、よくあるって聞いたわ。翌日まで残しておけるものならいいけど、ほんとうに困るわよね。だから今回はそんなことがないように、事務所からは絶対に出前の注文はしないことを徹底したくて、大きい食堂を用意したらしいわ」

お米は熱心な支持者からの寄付だとのことだが、これだけつくるのには、材料費だけでも相当なものだあと、感心した。

途中から大学生の娘も夏休みとなり、社会勉強になるからと選挙事務所に通い始めた。仕事は受付嬢である。

選挙戦も後半に入り、夕方から人手が少なくなるので二人とも帰宅するのが午後八時を回ることが多くなった。当然、家事はおろそかになり、家の中は乱雑を極めた。

ある日、自宅の近くでH候補のミニ集会が催されることになり、夫にも声

がかかった。もちろん、私の留守中のことである。忙しい時間だったので、夫はちょっと顔を出してすぐ仕事に戻ったという。間もなく集会が終わると、H本人がわが家を訪れ、私と娘が応援していることにお礼の言葉を述べ、慌ただしく帰っていったという。一分一秒を争う忙しいときなのに、十数年前のHと少しも変わっていないなああと、信頼の気持ち強くしたものである。私はますます張り切って働いた。

脇差の男

受付係の娘も思いがけない体験をした。これは娘から聞いた話である。

ある日、三十歳過ぎのやせぎすの男が事務所を訪れた。白地に紺の縞の着物を着流している。手には一メートル弱の細長い包みを持っている。娘は地元の武道家かなと思ったという。無言でフラリと受付に立った。

「いらっしやいませ。よろしかったら、お名前をお書きいただけますか」

そのとき受付には三人の女性がいた

が、だれもが何者だろうといぶかしく思った。男は手に持った包みを横に立てかけ、おもむろに記帳を始めた。そのとき、ゴトン！と重い音がして細長い包みが倒れた。その場に居合わせた人はみな、はっと息をのんだ。長いものはどうやら脇差らしい。

「だれか上の者はいないのか。話がしたい」

「はい、ただいま呼んでまいりますので、どうぞお掛けになってお待ちください」

慌てて二階のN氏を呼びに行った。

N氏はHにほれこんで、これまでの選挙すべてにかかわってきた支援者の一人である。

男は受付のテーブルに座って、N氏と四十分ほど話して帰っていった。

N氏の話によると、二千票の票があるが買わないかとの取引に現われたのだそうだ。H候補にはお金がないので買えないと丁重に断わったという。男は翌日も事務所に見われ、お茶を飲んでN氏と話して帰った。その後男は、刀を持って何度か事務所に来たという。



選挙の最終日、ちょうど男が事務所に見られたとき、備え付けのテレビでH候補の政見放送が始まるころであった。男はいきなり電話を貸してくれと言った。

「もしもし、ああ、オレだ。今テレビでHの政見放送をやっている。すぐビデ

オにとっておけ。何をグズグズ言うてるんだ!! テメエとっておかなかつたら、タダじゃおかないからな!」

荒々しいその声に、受付にいた女性たちは顔を見合わせた。

「映画の中の任侠の世界を見ているようだったよ。風体が普通じゃないから、

みんな遠慮きにしてたけど、私たちに
対してはけっこう紳士的だったしね」
そのときの様子を娘は興奮して話し
てくれた。

政見放送を見終わると、男はいきな
り懐からキラリと光る小柄こぶかをテーパー
の上に差し出した。娘たちはびっくり
し、腰を引いて身構えた。

「あの、だるまの両目に必ず目が入りま
すように……。命張って応援します!!」

男は刀に向かって一礼した。後でN
氏に話を聞くと、

「最初はちょっとした脅しと、探りを入
れに來たらしいんだけど、H候補がど
んな人間か時間をかけて話したんだ。
票の話はその後全然出なくてネ、帰る
とき、オレの一票は必ずHに入れるよ」
って言うてくれたんだよ、有り難いね」
H候補の手柄を伝える根気よい説得
に、私はN氏の温かさを感じた。

明日は投票日

選挙戦も盛り上がり、いよいよ最終
日の午後、駅前広場で総決起大会が行

なわれ、私も動員されることになった。
小雨の降る中、選挙中初めて目にする
H候補は、私にはとても疲れているよ
うに感じられた。背広もくたびれて地
味に見えだし、心なしが右足を引きず
っているのが気にかかった。事務所に
戻り、支持者のO氏にそのことを話し
た。

「まったく、Hはもう少し上等な背広を
着なくちゃダメだよなあ、農協でつく
った六万円だかの安いサーブスイー
ジーオーダーの背広なんか着ているん
だから、まったくしょうがないよ。前
回の選挙のとき、当選祝いに銀座の一
流テーラーのお仕立て券をプレゼント
したんだけど、出来上がったのを見たら
何てことはない、今までのと同じ紺
の地味なやつでさ、がっかりしちゃっ
たよ。Hはそういうやつなんだ」とO
氏は笑いながら話してくれた。
O氏の愛情あふれる話を聞き、Hの
別の素顔を見たような気がした。
昼間気にかかっていた足のこと、秘
書のF氏をつかまえて聞いた。

「H候補、右足を引きずっているようだ
けれど、どうしたの?」

「あ、あれですか。靴擦れなんですよ」

「エッ、靴擦れ?」

「はい、ちょっと靴が合わないみたいで」
「まあダメじゃないの。大切な候補者な
んだから、靴ぐらい上等のものを履か
せなくちゃ。せめて、靴擦れしないく
らいの……。あなた秘書じゃないの!」

「はあ、すみません」

「それからね。あのH候補の髪型、ちょ
っと評判悪いわよ。成金みたいなイ
メージで。何とかもっと本人の誠実さ
が伝わるヘアスタイルはないのかしら。
オバさんのパワーってバカにできない
んだから」

「そうですねエ。よく考えてみます:
…」

最終日の午後六時、私は有権者の手
ごたえを感じてみたいと、最後まで事
務所に詰めていた。おおかたの予想で
は順調に支持層を固め、見通しは明
いとのことであった。

午後八時三十分、全員が食堂に集ま

り、残っていた伍ビールとジュースを前に、本部長からねぎらいの言葉があり、解散となった。私はこの数日間、主婦として感じたこと、気になったことを、次回の選挙のお役に立ててほしいと秘書に話した。できたら簡単なレポートにまとめてくださいと言われ、翌日の午後六時過ぎに事務所を訪れる約束をした。

涙の落選

投票日、午後七時。選対ではテレビを前に開票の速報を今か今かと待っていた。その中で私は前日約束していたレポートを秘書に渡し、目を通してもらった。取るに足らないささいなことばかりであったが、選挙を支える人々のためにぜひ改善してほしいことを列挙した。例えば、事務所のどこにも鏡がなく、外に出かけるときなど、服装や髪をチェック、化粧直しなどとても不自由したこと。電話の対応の悪さ、仕事の指示の命令系統が明確でなく困ったこと、炊事係がこぼしていた

愚痴、受付で娘が感じた不備などである。秘書は一つ一つにうなずきながら目を通し、必ずH候補にも伝えることを約束してくれた。



午後八時。全国の開票状況が刻々とテレビに映し出され、事務所内にも緊迫した空気が流れ始めた。私は吸い殻で山盛りになっている灰皿を片付け、お茶を入れ、ここまで来たのだから、ぜひとも当選の瞬間の空気を味わってみたいと思っ

たと思った。

午後九時。H候補は第四位、思ったより票が伸びず苦戦しているとの報告が入り、不安な空気が流れた。支持者が続々と押しかけ、プレハブの二階は危険な状態になるほどであった。私は食堂へ下り、炊事係のおばさんたちとともにそのときが来るのを待っていた。「早く決まってほしいねエ」

「何とか四位で滑り込んでもらいたい」
「ああ、ドキドキする、心臓に悪いよ」
「そうだよネ、私は手を合わせているよ」
H先生はいつだって、私たちにも分け隔てのない態度で接してくれる。あんな人を落としたり地元を恥だよ」
「まったく、有権者の目も節穴だよ」

おばさんたちも不安の色は隠せない。午後十時。いよいよ状況は険しくなってきた。三人の当確が決まり、あと一人の議席を争っている。H候補は五位である。人々の口数が少なくなり、うつろな視線が宙をにらんでいる。私は黙ってお茶を入れ替える。

午後十一時。落選が決まる。思いが

けない結果にぼう然としてしまう。

「Hのような政治家をつぶすのは日本の損失だ。選挙民もレベルが低いよ……」

だれかが力なくつぶやいた。のろのろと帰り支度をする人で、事務所もごった返し始めた。私は自分がどうしていたらいいのか分からなかった。

(とにかく私はこんなとき、帰るわけにはいかない。最後まで付き合おう。何か私にできることがあるだろうか)

テレビカメラが据えられ、H候補が登場し、敗戦の会見が行なわれた。

「みなさん、新しい風が吹くのがこれほどとは思いませんでした……。すべてそれを見通せなかった私の責任です。ほんとうにみなさんはよくやってくださいました。その努力を無にして誠に申し訳ありません。敗戦の原因は私自身の中にあります……。しかし、私から政治を取ったら何も残りません。次のチャンスに向かって、また、コッコツと最初からやり直します。みなさん、どうか変わらぬ応援を私にお願いします」
大きな体を折るようにして、深々と

頭を下げるH候補にカメラのフラッシュが光り、あちこちからすすり泣きの声が漏れた。

H候補の苦しい表情を撮ろうとテレビカメラが執拗に追う。

「もういいだろう。いいかげんにしろよ！」

支持者の中から怒りの声が飛ぶ。

私も思わず目頭が熱くなり、この数日間のことが走馬灯のように脳裏をよぎった。

「すみません。ほかの事務所でも支持者のみなさんが待っているので今日中にあいさつに行かなければなりません」

Hは疲れた顔を笑顔に戻し、出かけていった。

午後十一時半。クモの子を散らすように、人々は去っていった。

「落選したやつは事務所には、もう用がないね」

手のひらを返したような現金な声が胸にこたえた。ガランとした事務所に人は放心したような本部長をはじめ、数人が残った。



「さあ、ここを片付けなくては」

「祝勝のビールを冷やしておいたのに……がっかりだね」

食堂のおばさんの目も真っ赤だ。部屋の片隅では秘書のF氏が肩を震わせて泣いている。こんなとき、平凡な主婦でしかない私は、一体どうすればよいのだろう。胸が詰まる。

「さあFさん、あなたが参ってしまっただけよ、H候補も言ったとおり、次

の選挙へ向けて頑張らなくちゃ！ 負けたのはあなたの責任じゃないわ、ほんとうによくやっていたもの……」

慰めにならない言葉を口走りながら、私も涙が流れるのをどうすることもできなかった。

振り返つて

よくよく考えてみれば、この選挙には始めから無理があった。宮沢政権の懐刀としてHは常に政府側の立場で発言せざるを得なかった。PKO問題にしても、私は自民党の判断に疑問を持っている。そのことについて日本人はどんな考えを持っていたのだろうか。私は彼の考えも直接聞いてみる機会がなかった。選挙の直前、新聞に政治家の資産公開の一覧表が掲載されたことがある。Hは土地、建物、定期預金、株式、ゴルフの会員権、すべてゼロ、そして借入金だけが二億と申告している。この件に関して、有権者の反応はとも複雑だった。私がHを応援していると親しい友人に話すと、

「あの申告は信じられないわ。だって、あんな大きな家に住んで、生活費もないなんて信じられる？ 第一、お金がなくて選挙ができるの？」



と率直な疑問を口にした。

私も正直なところ、この点はすつき

りしないものを感じた。Hに財産がないことは知っていたが、住まいが夫と共有名義になっていないことが不自然に思える。選挙のたびに借金ができるといふ話も秘書から聞いた。どうして、もっとお金のかからない選挙ができないのだろうか。資産公開のことに関して当然マスコミも取り上げたが、Hのクリーンな面が逆に裏があるように有権者に想像させてしまった。しかし、資産公開の条件の中には、生活費などの普通預金は含まれない。一覧表を読む有権者に、そこまでの認識があったかどうか疑わしい。正しい申告をしたHがこんなことで落選したのだとしたら、マスコミの報道の仕方にも責任があるのではないかと思う。

「ほんとうに政治を志したら、決してお金なんてたまりません。この選挙事務所はHを支持する人の厚意と、Hの熱意だけで成り立っているようなものです」

私はこの秘書の話を信じたいと思う。もちろん、お金のかからない選挙が望

ましいのの言うまでもない。だが一方で、友人の指摘も無理はないと思う。私たち多くの有権者は、マスコミの流す情報によってしか候補者を判断する材料を持たない。記事を書く記者も事実をよく調べ、誤りを招くような報道にならぬよう配慮してほしいものだ。

また、M夫人に対しても、以前から支持者の中には非難の声が多かった。

「M夫人を切らなければもうH候補の応援はできない」

「女房も御せぬで政治が治められるのか。一体Hは何をしているんだ」

と、後援会幹部が詰め寄る場面もあつたようだ。

「彼女には彼女の主張があります。Mのどこがいけないのですか。私は彼女を理解しています」

H候補の答えはいつも同じであったという。この話を聞いて私は思った。お互いを尊重する彼の考え方は決して間違っていない。これからの夫婦の生き方として私は共感を持つことが出来る。M夫人にもそれなりに問題はあ

っただろう。私は彼女に魅力を感じるが、「大衆とともに手を携えて歩む」という姿勢が欠けていたのではないだろうか。今回の落選をよい試練にして再出発してほしいと願っている。

新しい風についても、国民が期待したのも分かるような気がする。けれども、マスコミのつくり上げたムードだけに流されて、実態のない政党が大量得票するのは、どこかおかしいのではないだろうか。その結果、ほんとうに有能な政治家を失うのはとても残念な気がしてならない。

当選した議員がほんとうの意味での志を持った「改革派」なのか単なる便乗組でしかないのか、「改革派」を旗印に当選した議員の中にも、金権候補が紛れ込んでいるかもしれない。これから、私たちはそれをしっかり見極める目を持たなくてはならない。しかし新しい風が吹いたことは、日本にとつてよいことであると、私は信じたい。

十二時半。家に戻って夫と色々話合った。

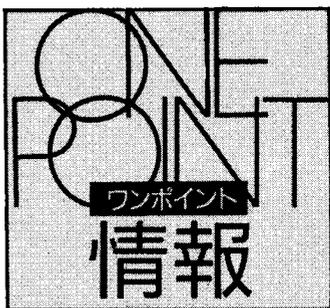
「今回の落選は、もしかすると彼のためにはいいことだったかもしれないよ。あまりにHは政府側の姿勢を貫きすぎた。自分というものを、ちっとも主張していない。落選しても大きな器を持っていることは多くの人が評価している。また、やり直せばいいさ」

夫は選挙運動の中になかった分だけ冷静に見ているようだ。

「私もいい社会勉強をしたわ。マスコミのつくったイメージがどんなに大きな影響力を持つものか、分かったような気がする。それに選挙の実態もちょっとり見えてけっこう面白かったわ。事務所では気持ちよく働けたし、ステキな人々との出会いもあったし、手伝ったことは後悔していない。人間関係は財産よね」

「そうさ。主婦の目で見えたこと、感じたことを何か形に残しておけよ」

そんなわけで、今回の体験をつたない文章にまとめた次第である。これで私の初めての選挙運動の幕を閉じるとにしようと思う。



●私の更年期障害●

お医者様でも 草津の湯でも

千葉県東金市

鈴木喜代子

私の更年期は四十五〜六歳ごろから始まったように思う。その最中はそうと気づかずただ具合の悪さに辟易^{へきえき}していたものだ。ある日何となく胃のつかえを感じた。でも食事は普通にできるので放っておいた。

そのうち食道の下部か胃の上部辺りに固形物が詰まってギュッと締めつけられる感じがして

きた。「サア大変。ガンの発生では？」とおそろおそろ胃腸科に行った。

レントゲンで透視ということをやった。後日異常なしとのこと。消化剤をもらい様子を見ていたが、胃のつかえは依然として続いた。

食物はいくらでも入り、食べているときはつかえを感じなかった。そうはいっても四六時中食べ続けてはいられない。いらだちがつのった。一カ月ほど我慢をした後思い切って別の胃腸科で検査してもらったが、やはり異常なしだった。うれしいのか悲しいのか何だか拍子抜けした。そこで「エイイ。もうどうにでもなれ」と開き直ってがむしゃらに物を食べた。

幸いというか、私はそのころ近くの会社で事務仕事をしていたので、仕事に没頭しているときは気が紛れ、せめてもの救い

だった。家にいるときは趣味らしきもの見つけてそちらに気が向くようにした。

四十九歳で心機一転バイクの免許を取った。

乗り始めは神経を使うので胃のつかえはどこへやら、これも救いになった。

五十を過ぎて退社するころにつかえは感じなくなっていた。もちろんその間生理に伴う異常はいろいろあったが。

一連の障害が過ぎて「これで女性機能も終わりか」と複雑な気持ちになった。

更年期障害は個人差があり、重くも軽くも悪くなる部分も違うのだと、自分の悪戦苦闘を今

では人ごとのように思い出している。

ああ、私死ぬ じゃないかな

千葉県松戸市

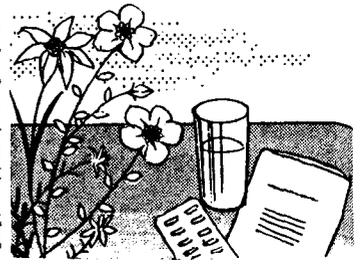
小林やすえ (56歳)

最後の生理があったのは、今から四年前の二月五日だった。

その三日前に天井がグルグル回るほどのめまいを感じて思わず、「お父ちゃん助けて！」と叫んでいた。その日、自分の顔を鏡で見たときの驚きを今でも覚えていいる。灰色で縦に深いシワが出ていた。まるで死人のようだった。

その三年前から秋口になると体の調子が悪く、気分も沈みがちとなった。それが更年期のためとは全く考えてもいなかったし、生理も毎月あった。そんなころ、心電図に異常があって医師から家で静かにしていなさい





と言われた。自分の体は元気に動きたくてウズウズしていたので、他の医者には診断をお願いしてみると全く異常はなかった。そんな体験から私の伯母が昔、四十八歳で結核を疑われて静養していたことがあり、それが誤診だったと言う話を思い出した。

医師たちは更年期期の女性の体について余り知らないのではないかと思う。

翌年の秋から生理が二カ月か、三カ月に一回となり、やっと私も閉経が近いことを意識できた。日々の生活は、公民館の

学習活動に追われて忙しかったが、それが一段落した年の冬に、前記のような症状で「ああ私死ぬんじゃないかな」と感じたほど、生きるエネルギーが減少していくのをどうすることもできなかった。自分の身の回りを整理し始めた。

まず内科に行ったところ、精神安定剤のみの治療だった。どこも悪くありませんよというところで処理されたのが非常にさみしかった。女の体が男の医師に分るものか！と腹の中で叫んでいた。

閉経後半年は安定剤のお世話になり、時々ユーウツになって死にたく思った時、ボランティア仲間の友人に助けを求めた。そんなことがあめまいの後、二カ月に三回はあった。二年間は自分の体をいたわって無理しない生活を送った。今ではすっかり落ち着き元気、元気の毎

日を送っている。

もう一つ書きたいことは、周囲の仲間から「気のせいよ」と言われ続けたことが悲しくて、そのころは一時やめていた「わいふ」を思い出して手紙を出した。すると編集部の和田さんから、私の辛い気持ちを理解されたお手紙が届き、あの時は救われた思いであった。

女が女を理解することの大切さを、しみじみと感じた体験であった。女の問題を学習する一人として、もっと多くの女性が更年期を語っていくべきではないのかと思っている。

更年期は夫の協力が必要

神奈川県大和市
浅田 節子（61歳）

あのイヤな気分！ 毎日がまるで梅雨空のように曇天の日々……それが一カ月や二カ月

で終わればいいのだが、私の場合七年以上も続いた。

一時は半病人で、台所に立つとムカムカし、炊事洗濯すべてダメ！ 一番辛かったのは二年位で、外食したり、店屋モノのお世話にもずい分なつた。

夫にしてみれば、一体全体どうなっているのかと理解に苦しんだわけで、「更年期障害」の本を求めては読みあさっていた。

同じ体質と思える二人の妹は、私ほどヒドクないのである。個人差があり、性格的な面にも大きく左右されると後で分かったが、家庭環境の問題も影響するようだ。

私の場合―夫には申し訳ないが、九州男子で古い因習が尾を引き、女はドレイとの意識が潜在的にあり、女房は自分の思い通りになるものと思込んでいます。私も同じ土地柄に育ち夫に絶対服従の生活を続けてき

た。

それが重荷となったころ更年期にさしかかり、精神的な悩みがピークとなった。

定年後の夫は、人間的にもまろやかに主婦業の辛さも体験し、私も自分の意見をわりと言えるようになった。

それが気持ちをかかなり楽にしてくれたが、自分の体質に合ったホルモン剤でビタミンEの多く含まれたものを飲み、夫の協力を得て、ネムル事が一番であった。ただひたすらに睡眠がほしかった。

お医者さまから「自律神経失



調症」のお薬もいただいた。その時「お姑さんと同居ですか？」と質問された時はびっくりしたが、それほど夫に対して私はビクビクしていたわけである。

現在は夫の理解も深まり、苦しい暗いトンネルを通り抜けてみると、更年期の時期は夫婦で乗り切ってゆかなければと少し思っている。

しびれる

東京都八王子市
和田 好子

買物に行こうと家を出て、十メートルばかり歩いたところで、急に異常を感じた。

左の手が付け根からしびれ出し、たちまち手先まで、ついで肩から脇腹までしびれて感覚がなくなった。

あわてて引き返し、しばらく

横になっていた。というのは、

三年来ひどい疲労感、のぼせ、血圧上昇、心電図の異常という変なことがあり、五十歳近い成人病になりつつあると思っ、お医者回りをしていたのである。またおかしくなった！と、とりあえず寝たのだが、どうもおさまらない。

タクシーを呼び、病院へ行ったがもう時間外で当直の女医さんが、「血圧が高い（計ると上170、下110）。脳出血の前駆症状らしい」と言う。

さあそこで家族中大騒ぎ、姑も駆けつけてくれるし、とにかく安静に、としびれはじき直ったものの二日はど寝ていた。そこへ姉が聞きつけて見舞いの電話をくれた。

「そりゃ更年期障害よ。婦人科へ行ってごらん。私は伊勢丹で半身しびれて、救急車のお世話になったけど、婦人科ですぐ分

かった」と言う。

さっそく行くと、診断のためだとホルモン剤をお尻に打たれた。これでよくなったら疑いなし、更年期だ。

翌日は気分爽快、まるで二十代に戻ったようなので、我ながらあきれてしまった。

「なおりました！」と婦人科に行ったら、血圧も正常になっていた。

自律神経失調症に利くという薬をくれ、二カ月飲むようになったが、一カ月で大分よくなり、もう正体が知れて安心だと、あとの薬はお断りした。

最初の症状はのぼせで、四十六歳のときだった。以来結局七年悩んだのだが、五十三歳で閉経したらびたりと直ってしまった。

四十歳を過ぎた女性で、病氣らしき症状があったら、婦人科へも必ず行って見るべきだ。

(え・梅村 菫)

ファム・ポリティク

(政治的な女Ⅱ仮題)

創刊のお知らせ

政治が、面白くなりました。何をやっても無駄、という思いが消えて、女たちが燃え始めています。

その思いを踏まえて、今私たちは、ささやかな政治雑誌創刊の企画を立てています。

政治関係の出版物というと、一定の主義主張を持った政党の出しているものがほとんどです。さもなければ、市民運動に燃えている人たちのもの。

それはそれで、大事な役目を果たしてはいるのですが、自分の立場からの主張が多く、私たちが知りたいこと、面白いと思うことはほとんど書いてありません。これから出す「ファム・ポリティク」は、そういうものとはまったく異質の、普通の間人が知りたいと思わなかったテーマ、意想外だけれど身近なテーマを女の目で斬っていこう、というものです。今のところ年六回を予定しています。創刊準備号は九月二十日に発売。

編集部 田中喜美子

創刊準備号の目次

1・政治家はほんとうに「政治浄化」を望んでいるのか(小選挙区比例代表並立制浮上のほんとうの原因を浮き彫りにする)

2・インタビュー「素人議員に何ができる？」堂本暁子VS田中喜美子(素人でも働ける仕組みがないわけではない、だが……)

3・議員とお金「国会議員の給与と活動費」議員は国からいくらもらい、いくら使っているのか)

4・書評「日本改造計画」小沢一郎著

5・議長選出劇うらおもて(土井さん選出があんなにめめたわけ)

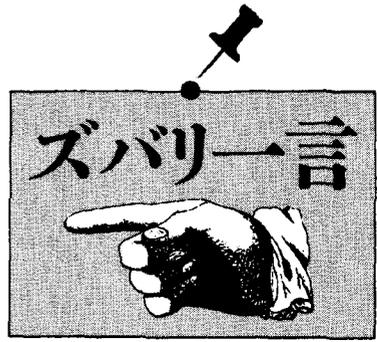
ここでみなさんにお願したいのは、この雑誌に名前を付けていただきたい、ということ。

色々考えましたが、どうしても名案が出ません。「ファム・ポリティク」は仮題です。いっそ公募しようということになりましたので、どうか奮ってタイトル案をお寄せください(サブタイトルを付けてくださってもOKです)。はがきで「わいふ」までどうぞ。採用分には薄謝を差し上げます。

その他、色々な意味で読者参加の雑誌にしたいと思っています。どうかアイディアをお寄せください。

大きさはA4判で一六ページ。定価は三〇〇円、送料七二円。

予約購読ご希望の方は「わいふ」編集部まで。



ベビーベッド のない小児科 って……

神奈川県海老名市●片山徳子

娘が二週間に一度通院していた
た大学病院の小児科には、ベ
ビーベッドがなかった。普段は
気にも留めていなかったそのこ

とをことさら不便だと思ったのは、私が出産・入院したときである。見舞いに来た夫が開口一番「今日の通院は大変だった」と言う。聞けば、娘のおむつを替えようとしたがベビーベッドが見当らず、受付で尋ねると女子トイレにしかないとの返事。「そんなところに入れるわけもないし、うんこをそのままもできないし、待合室のいすも気が引ける。しょうがないから、かわいそうだけど男子トイレの便器に寝かせて替えた。男親が連れてくることを考えてない」とひどく憤慨していた。

退院して今度は生後間もない赤ん坊を連れていくと、なおさら不便さを痛感した。寝入った息子を置いて荷物をまとめようと傍らを見ると、ほかの子供がいすの上で立って立って、とても寝かせる気になれない。子供のいたずらやスペース不足

もあるから立派なものでなくてよい、ちょっと寝かせておく場所があれば、おむつ交換はもちろん、長い待ち時間の娘の退屈を少しでも粉らわせてやれるのに、と何度思ったことか……。もちろん、病院のような人の多い場所に生後間もない子供を連れていくのは非常識だと分かっているが、特殊外来で木曜日しかやっていないし、核家族で、近くの友人にもみな幼い子供がいて、赤ん坊がアレルギーで、粉ミルクがだめで、預けられなくて……となると、連れていかざるを得ないのが実情なのだ。

その後引越してその病院には通わなくなったが、新しい通院先にもやっぱりベビーベッドはなかった。ただ諸手続きで訪れた海老名市役所には立派なベビーベッドが据え付けられてあって、少しほっとした。もっと

も処理が迅速で使う間もなかったけど。

選挙権ください

●荻野菜穂子

七月、総選挙の結果を日本語の新聞で読んだ。地球の裏側、ドイツに住んでいても、衛星版で日本と同日に朝刊が届く。

そうかあ、自民党が過半数を割ったかあ、ふんふん……各選挙区の結果をながめていてふと気が付いた。私の一票はどこにもない。

外国に居住する日本人は、離国するとき転出届は出しても、国内のどこにも住民登録できないから、どの選挙区にも属さない。当然、投票用紙は送られてこない。また企業の駐在員とその家族などのほとんどは、現地の市民権がないから、居住国の

参政権もない。成人としてはちょっとむなし。憲法で保障されている選挙権なのに、制度の落とし穴のために、手放すことを余儀なくさせられている。

ひょっとしたら、比例代表制の選挙には投票できるのかな、と在外公館に電話で質問してみました。「現行はできません。今後はできるようになるかもしれませんが」

ああやっぱり。将来はできるかもということ、選挙制度が変わったらということなのだろうか。

新政権は衆議院議員選挙にも比例代表制を導入する方針とのこと。

在留邦人は増えたとはいえ、大勢に影響するような票数にはならないだろう。寝た子も起きる宣伝カーや、同じ顔が幾つもあるポスターとはまったく無縁なので、情報不足であるとも言

える。でも、ふるさとは遠くにありて思うもの、日本にいたときよりずっと自国の行く末を考へ、意識する人が多いのも事実だ。

どうかお願い。選挙権をください。

新政権が自らの利害に関することのために忙殺されることなく、私たちが抱えているような小さな矛盾にも、真剣に取り合ってくれるものと期待する。

おばさんたちの、ある習性について

川崎市川崎区●浦川とめ

おばさんたちの習性で、いつもこっけいに思うことがある。ここでおばさんとは中年の女性である。でもって私自身おばさ

んである。だから他人事のように「だからイヤなのよオバンは」と言うつもりはない。だがどうにも気になるのだ。

学校の参観日、塾の説明会、お稽古ごとの教室……おばさんたちは、話者がしゃべっている間中、ホントにホントによくボタンで動きを止めてしまいたい衝動に駆られることがある。

これは、あなたの話をちゃんと聞いていますという話者に対するエチケットであると同時に、周囲に対する自分の静聴ぶりのアピールでもある。それ自体はいいのだが、センテンスの切れ目切れ目で首を上下するのは、音楽会で前の席の人が拍子をとりながら体を揺るのに似て、何かこう、うるさいんですね。

そういう人が居眠りをしてしまったときは傑作だ。気持ちよく

く舟をこいでいたのが、何かの物音でハッと我に返り、すぐ話に合せてうなずき始める。そしてやがてまた静かになっってしまう。

聴衆としての男の人や、学生たちの反応はおばさんたちに比べはるかに愛想がない。ただし社長の訓示を聞くときの部長たちは、急におばさん化するが……でもこれは意識的な自己顕示。対しておばさんのうなずきは、ほとんど無意識の条件反射である。

おばさんはみんなまじめに話を聞く。これは確かなのだが、多少しクールに聞きますか。そしてなるほどと思っただけで、ずきましよう。ラテン系っぽく、明るく、オーバーな反応をしながら人の話を聞くという手もあるが、わが国ではきつとないまじないから。大きなお世話かしら？

ともじゅうまの

—娘の発病そして臓器移植—

東京都世田谷区 本庄たよ子

最近になって脳死とか臓器移植という言葉を目にするのが多くなってきた。

これは遠いこと、他人事と思っておられる人が多いと思う。実際、私が「娘に腎臓を移植する」と言ったとき、周りの人々は一様に「身近な人が臓器移植手術を受けようとは」という反応を示した。

これは私自身にとっても、思いもかけぬ成り行きだったし、二年経った今でも「どうして私の娘が、こんなことに……」と、信じられない思いが残っているのである。

人には、いっどんなことが起きるか分からない。臓器移植について現在、色々と論じられてい

る。「他人事と知っているから言えるのだろうか」と感じる意見もある。私は当事者という立場からの声を聞いてほしいと願って、この一文を書いてみることにした。

発病

娘が慢性腎炎という診断を受けたのは二十歳になったばかりのころだった。

心理技術を学び障害児の水泳療法のインストラクターになりたいと張り切っていたところで、就職のための健康診断を受けたところ、尿蛋白たんぱくを指摘されたのである。

近所の開業医だったので「きつとコップの洗い



86年1月 成人式、家族とともに

方が悪かったのよ」などと私は何の心配もしなかった。しかし再検査でも蛋白が見つかり日赤医療センターを紹介された。

日赤医療センターには、その三年ほど前にも入院したことがある。高校二年だった娘の左目が突然、失明してしまったのである。階段を下りるときに何だかふらふらするので、目の上に手をのせてみたら左目が見えなくなっているという。

日赤ではまだ若い医師が診てくれたが、すぐ数人の医師が集まってきた。看護婦さんたちが、慌ただしく駆け巡り「高校生だから産婦人科の病棟じゃまずいわね」などと入院の手配をしている。そんな騒ぎを他人事として待合室にいた私に、婦長さんが、「お母さんびっくりなさったでしょう。でもすぐ入院できるよう病室が取れましたからね」と肩に手を回して言ってくれた。

それから若い医師に「脳に異常があるのか検査するために入院してもらいます。それが治るものかどうかは今のところは何も言えません」と言われた。「と、いうことは生命にかかわるものですか」と問うと「そのための検査です」という。

私はエレベーターで一階に下りると外へ飛び出し、だれもない病棟の裏で「ウワーッ」と声を上げて泣いた。それから顔を直し、入院室のベッ

ともに生きる

ドでキョトンとしている娘と会った。

そして一カ月後。副腎皮質ホルモンの投与で娘の目は、すっかり治ってしまったのである。原因は不明だったそうだ。

だから今度も、きつと何でもなかったと言われるだろうと私は樂觀していた。

しかし娘は蛋白尿のほかに血尿も出ていた。一日分の尿をためておくガラス瓶の中がオレンジジュースのように橙^{だんご}色になっているのに驚かされた。わが家ではトイレに、ブルーレットというのを使っていたので尿の色が分からなかったのだ。

三日後に腎生検をした。背中から細長い針を刺して腎臓の組織を取り出し腎臓の機能を調べるのである。

「麻酔をしているので痛くなかったけど、男の子のほうか怖^{おそ}がって騒ぐんだって」と娘は、ほっとした表情だったが、出血を抑えるためにおなかの上に乗せられた砂袋が重苦しくて、ちよつと吐いたりしていた。

検査の結果は慢性腎炎だった。これは治ることはないし、五年から二十年後に腎不全に移行することになるだろう。日常生活の摂生と定期的な通院が必要であるということだった。

この日から娘は、水泳やスキーなどの体を冷や

すスポーツはできなくなり、食生活も減塩に注意して過ごすことになった。

当然、水泳のインストラクターはあきらめるしかなかったが、志望していた幼児教育関係の仕事に就職できた。仕事は受付事務なので幼い子やお母さんと親しくできるし、上司や友人にも恵まれて、一カ月に一度の通院以外は病気を意識することなく、明るく楽しい毎日を送っていた。

娘の結婚

娘には高校二年のときから交際していた彼がいた。ちよつと、最初の眼科入院のころで、彼は放課後になると毎日のように見舞いに来てくれた。私が行くとベッドは空っぽで同室の人たちが「ほらほら」と窓の下を指差す先に、緑の木陰のベンチで楽しそうに話し合っている二人の姿があった。病気の不安に覆われていた私は「娘に彼がいてよかった」と、慰められる思いだった。二人の仲はそのまま続いて、今度は慢性腎炎である。

病気のときに受ける人の優しさは身にしみるものがある。娘は彼に支えられたことで、病気のつらさ乗り切れたと思う。二度の入院生活も彼のおかげで、楽しかったときさえ言えるような気がする。

出会いから七年経って二十五歳のとき、二人は



90年5月 結婚式

結婚した。赤ちゃんを望むなら腎炎の軽いうち、なるべく早いほうがよい、という医師の言葉もあって、友人の中では早いゴールインだった。

親としては、娘が七年間も交際して決めた人ということ、結婚を祝福したが、心の底には「二度の病気を知っていてくれる」という思いもあった。結婚の申し込みに訪れたときにも「いつか、あなたに負担をかけることになると思うが、それでよいのか」と尋ねたが、彼は、きっぱりと「そのときは千佳さんの力になります」と答えてくれた。夫も私も、万感の思いで頭を下げた。

結婚式は五月末だった。高校の友人たちの合唱、手づくりのウエディングケーキ、人形劇などなど、若い二人らしく、ちょっと型破りの楽しいものだった。

前日、美容院で気分が悪くなったりしたが当日は元氣一杯で、こぼれるような笑顔を見せていた。翌日、神戸を経て九州方面への新婚旅行に出かけた。一日だけ気分が悪くなり、ごちそうに手がつけられないことがあったが、行きたいところをすべて歩き回って元氣に帰宅した。

その夏は、四十度の日が続いたことさえある猛暑だった。新婚生活は、北千住の小さいマンションで始まった。共働きで通勤距離は遠くなった

ともに生きる

が、娘は頑張っていた。

そのころから、急激に腎臓は悪くなっていて体調も悲鳴を上げていたと思うのだが、新婚の喜びのほうか、それを上回っていたようだった。休日には双方の両親を招待して、精一杯の手料理で、もてなしてくれたりしたが、いつも笑顔を見せていた。

病気の進行

結婚して三カ月経った。体重が三キロも減っていた。腎臓機能の低下を知らせるクレアチニン値というのが、急に上昇してきた。

それにしても、親の私には「腎不全になるのは五年から二十年後」と言われたうちの二十年後という言葉だけが残っていて、それほど差し迫っているという緊迫感がなかった。

娘の診察日に、私も同行したところ「透析することになるかもしれない」と主治医に言われた。

たまたま待合室で、五年前の検査入院のとき隣のベッドにいたお嬢さんに会った。彼女も入社早々の検診でネフローゼと言われ、半年から一年の長期入院を繰り返しているのだった。久しぶりの再会を喜び、近況を話し合ったりしていたが、旧姓で呼びかける彼女に姓が変わったことを娘は

話せなかった。

そのときに、同室に入院していたAさんがお母さんの腎臓をもらって、すっかり元気になり赤ちゃんまで産んだ、という話を聞いた。私は即座に「ママのも上げるからね」と娘に言った。でも、まだまだ先のことと思っていた。

仕事を辞めて安静にしていれば、またよくなるだろうと考えて、病院の帰途、娘の勤務先に寄り職場のみなさんにお別れのあいさつをした。突然のことで非常に驚かれ、別れを惜しんでくださった。部長からも「余人をもって替え難い人です」と残念がっていた。

これで、まず一安心と思って私は娘と別れて家に帰った。

その翌朝である。娘の夫から電話が入った。

「昨夜から頭痛と吐き気が続いています。僕は今日大事な仕事で出勤しなければならぬので、お母さん来ていただけませんか」とのこと。

一時間余りの道のりを急いで駆けつけたが、娘は激しい頭痛のため上気した顔で寝ていた。「あとは私が見ますから」と彼を送り出したが、さて、どうしてよいやら。腎臓の薬をずっと服用しているので勝手に売薬を飲ませるわけにはいかない。病院へ電話をしてみると「すぐ連れてくるよう

に」という。

電車で行くのが一番早道だが、駅まで十五分くらい歩くと、電車を乗り換え、またバスにも乗らなければならぬ。それだけの力は、今の娘にはない。

タクシーだったら、渋滞の都心を越えて二時間はかかるだろう。狭い車内でどうなってしまうやら。とても無理だ。

頭を冷たいタオルで冷やしてやるしかない。そのうち少し落ち着いてきたようなので、また病院に電話をしてみる。看護婦さんが「先生が、すぐ連れてきなさい」と言っています。救急車でも何でもいから来てください」と早口で言うと言話を切った。

救急車にだけは乗りたくない、といつも思っていた。通勤途中、救急病院の前を通るので担架で運ばれる人をよく見かけた。付き添う家族の悲痛な表情も「ああ、お気の毒に」と思いつつ自分にはふりかかるものではないなどと思っていた。

しかし、今は救急車を呼ぶしかないのだ。一九を押すとすぐ返事があった。「広尾の日赤まで行ってほしい」と言うのと「受け入れを了解しているのか」と言われた。かかっている科と医師の名前を告げると「すぐそちらに伺います」と電話を切った。

急いでパジャマを着替えさせ、保険証や身の回りの品を持って外に出る。細い路地裏から大通りへ出ると間もなくサイレンが聞こえた。担架を出すこともなく娘が乗り込むと救急隊員の人は、ちょっと驚いたようだが、ベッドに寝るのを手伝ってくださった。

マイクでの交信が聞こえる。病院と連絡を取っているようだ。本来ならば、足立区管内の病院に連れていくのだが、医師との話し合いで渋谷区まで運んでくれることになった様子だ。

高速道路に入った。サイレンとマイクの呼びかけにより、前を走っている車が右と左に分かれてくれる。その真ん中を救急車はスピードを上げて進んでいく。

「ああ、よかった」と娘を見ると、娘もやっと安心したという表情で私を見てほえんだ。「救急車がこんなによいものか」とは考えもしなかったけれどまさに実感である。隊員の人に見守られ、清潔なベッドに寝て、病院まで最高の速さで運んでくれるのだ。有り難さで胸が一杯だった。

病院に着くと、車いすに乗せられて隊員の方が診察室まで連れていってくださる。待合室のたくさん視線に恥ずかしさなど感じるよりも、私は夢中で、急ぎ足でついでついで。

ともに生きる

以前に診ていただいていた医長先生が迎えてく
ださり、娘はカーテンの向こうに入ってしまった。
「緊急透析をしますか」などの声も聞こえる。よ
うやく医長先生が出てきて「緊急透析はしなくて
済んだが、こんなに急に悪くなるなんてとても残
念です。しかし早く来られてほんとうによかつ
た。尿毒症がもっと進んでいたら危ないところだ
った」と言われた。

暑い中を、また北千住へ行き、長引きそうな入
院のための準備をして病院に戻った。

人工透析療法

入院して翌日、透析のためにシャントをつくる
ことになった。左手首の動脈と静脈をつなぎ合わ
せる手術である(後日、この手首のシャントに手
を触れるとザーツと勢いよく血が流れていくのを
ビリビリッと感じて、だれもがびっくりして思わ
ず手を引っ込めてしまう。万一ぶつかり切った
りすると動脈からもろに出血して生命にかかわる
ことになる。包帯を巻いたり巾広のバンドで保護
することが必要なのだ)。

手術室に入って二時間後、娘は真っ赤な目をし
て戻ってきた。我慢強い娘が小さくしゃくり上げ
ている。私は廊下に出た看護婦さんを追いかけ

た。「一体、どうしたんですか」「すみません。途
中で麻酔が切れてしまったのです」ああ、何とい
うことだ。私は娘がかわいそうで、体も心も震え
る思いがした。

その日、帰宅すると娘の卒業した高校の同窓会
便りが届いていた。翌日病院へ持っていき開いて
みると、

「高校を卒業して十年。その間色々なことがあり
ました。腎不全となり父からの腎臓移植を受けて
結婚、出産もしました……」という一文があった。

出産という字が目飛び込んできて、希望がわ
いてくるようだった。今までも透析をしながら、
または腎臓移植をして出産した人の話を、本
で読んだことはある。でも当人の話を実際に耳に
したことはない。高校の先輩そして病気の先輩と
して、娘に励ましの言葉をいただけたら、こんな
に力強いことはないのだ。

娘は子供好きである。そして彼と自分の子を切
望している。きっとよい母親になれるだろう。

私は、若いころ幼稚園教諭をしていた。そして
三人の子供を産んで育てた。その後育児相談員と
して二十年間、若いお母さんたちとの話し合いを
仕事としていた。育児の悩みやつらさも理解でき
るけれど、若い子供が与えてくれる子育ての楽し

さを、娘にも味わわせてやりたかった。

これから透析という闘病生活に入るというのに子供のことで考えるなんて……。という気持ちももちろんあったけれど、私は希望をなくすことは、できなかった。

先輩のSさんから速達が届いた。「透析はつらいけれど生命が助かるのだから、前向きに受け止めて……。」と心から励ましてくださる思いのこもった手紙だった。

透析とは、週に二日か三日、一回に三時間から五時間かけて、体中の血液を浄化する療法である。先日の手術で浮き上がらせた静脈に太い針を二本差し込んで行なうという。

しかし私にはまだ、透析を受けるという覚悟ができていなかった。シャントはつくったけれど、何とか透析をしなくても済むようにならないものか……。など思っていた。

娘の夫が、医師に透析について説明を聞き電話をかけてきた。「透析は避けられないが、この療法で生きていくことができるのだから……。」と、私にしっかりと説明してくれた。娘も、透析を受けて早く退院したいという。

入院して三週間経って、いよいよ透析を受ける日が来た。



90年9月 人工透析に入る

ともに生きる

その日の朝、夢を見た。三歳ぐらいの娘の声が二階に聞こえる。転げ回っているような感じで「ママ助けてえ」と叫んでいる。私は階段を必死に上っていく——というところで夢から覚めた。

面会時間は三時からだが、十時ごろ病院に行った。透析室での面会はできないということだったが、初めての日なので、看護婦さんが「どうぞお入りください」とすすめてくださった。入ってきた私を見て、娘はびっくりした表情を見せたが、顔色がよくなっていた。

娘の腕にはチューブの付いた二本の針が固定されて、一方から血液が透明なチューブの中を通って体外へ流れ出ていく。まくら元の人工腎臓の動きをする透析器械の中で浄化されると、血液はもう一方のチューブを通して腕の中へ戻っていく。

この透析器械がなかった三十年前ごろまでは腎不全患者は死を迎えるしかなかったという。また、この器械ができて、費用が高額のために使うことができず、お金のために、助かる生命をみすみす落とした人が多かったそう。そのころの患者さんたちの地道な、そして命懸けの陳情と運動により、現在は保険も適用され無料でその恩恵に浴することができるのである。

娘の生命は、この人工透析療法によって救われ

たのだ。私は娘の幸運と医学の進歩に心から感謝した。

翌日、腕がはれて冷湿布をしていたので、その翌日の透析を心配したが何とか無事に済んだ。まだ痛さと緊張で食欲がなく、アイスクリームを食べさせたが元気がなかった。

娘が「ママ、この病気は、働きすぎとか食べたものが、それほど影響してるわけではないのよ。なっちゃったことを、ああだこうだと気にしないようにって本に書いてあるわ」と言った。医師にも「親の責任ということはないんですよ」とも言われた。

きっと元気のない顔を、医師や娘に見せてしまったのだらう。

小さいときからとても活発な子だった。駆けっことは速いし、ハードルでは優勝したこともある。早朝野球に、二キロほど遠くの公園まで通ってから登校したりした。中学ではバドミントンの選手、高校では野球部のマネージャーをして炎天下も走り回っていた。

そんな子が、どうしてこんな病気にいつの間になっちゃったのだらう。耐え難い思いが私にのしかかっていたのである。

一 つぶくー

(写真提供・筆者)

読・ん・で・み・ま・し・た

農文協健康双書

ヨガの気持ちで自然流育児

年齢別・症例別詳解

北山佐和子 著

千葉市美浜区 小山 益蒼



「子供は自然の中にならなくておけば、親の後ろ姿を見て育つ」……なんて今どき、悠長に構えているだけでは、トテモ子育てはやっていられない。

空気は汚れ、水も汚れ、環境全般が広く汚染されている。日本の家庭の構造自体も変わってきている。現在の環境問題は、そのまま「育児の環境問題」なのだ。

今こそ大人たちは意識的に、子供の中の自然性⇨生命力⇨自然治癒力を引き出していく方向を、真剣に考え探し求めていかななくてはならない。

また、社会は種々のストレス、運動不足……であふれ、その結果大人たちは、本来の自然心(カン)をマヒさせ、子に

対する推察、熟慮をも鈍らせるという悪循環もつくっている。このような環境下で、それぞれの持つ生命力を十二分に引き出す「誘い水」はないものか。

そこで登場するのが、「その人本来の琴線に触れ、もっとその生命力をパワーアップさせる」ヨガ……しかも、「親子でできるヨガ」なのだ。

ヨガと聞くと、奇妙なアクロバットのようないことをするのは、という不安感や先人親に走りがちだが、本書に紹介されているものは、いずれも詳しい解説と写真、図解で分かりやすく、しかもとても手軽に親子そろって楽しみながらできるものばかりなのがうれしい。

試しに「怒りが収まらないときに行なうポーズ」をやってみる。初めは半信半疑だったが、そのうちに「姿勢や呼吸がこんなにも気持ちを変えるものなのか」と、驚かされた。

さらに子供の年齢別、症例別(アトピー、ぜんそく、近視・乱視など)に豊富な事例が挙げられ、親子ともども、総合的な体と心の能力をレベルアップさせていくノウハウが満載されている。

少しの痛みや熱で即、病院⇨薬となる前に、一度手に取って家族そろって実行してみる価値ありの一冊だ。

農山漁村文化協会 一三〇〇円



「ライターへの道」 その後

東京都八王子市 ● 豊城智子

迷路に入って

今から一年ちょっと前の「わいふ」二三六号「働きたい」というコーナーに私の文章が載っている。ライターとしてヨチヨチ歩きを始めたばかりのころだ。仕事を始めてから二年近くの間とりあえず切れ目なく仕事に恵まれ、細々ながらもライターとい

う仕事を続けている。

ところが最近、出口のない迷路に迷い込んだらしく、私はオリの中の熊のようにウロウロしている。まだ駆け出しのくせに生意気な話がいわるスランプというやつかもしれない。書きたいという気も、一生働きたいという気持ちも変わらないのに、仕事を取るための働きかけができずウジウジしているのだ。

どうやら、他人から見える私は、声が大きくくずけずけと物を言い顔立ちも派手でナンドカ目立つ存在で、最も営業に向いている人間に見えるらしい。ところがこれが見かけ倒して意外に根性ナシなのである。自分を売り込むという才能が一切ないらしい。

フリーライターというちょっと聞こえのいいカタカナ職業は、実は「仕事は自分で取ってこない」といつでも仕事はなくなるよ」という意味だということが、身にしみて分かってくるようになった。はっきり言って文章力だけではだめで、営業力がかかるのウエイトを占める。もちろん自分の文章力が特に優れているとうぬぼれているわ

けではないけれど、この二年間、一度もボツになることなく「わいふ」に載せていただいたのだから、「多少は書けるのではないか」と思いたい。でも仕事がこなれば、そんな露ほどの自信はそよ風にだって吹き飛ばされてしまうような不確かなものだ。

そんなとき、前号で遠藤尚奈さんの転職を知った。あちらはそんなことはカケラも思っていないだろうが、私はいつも「わいふ」で見かけるたびに、そのパワフルな切れのいい文章に圧倒され「ムムツ。できるヤツ!」とひそかにマークしていた人の一人である。

「あの人でさえ文章に関係のない仕事に就いたのか。ならば私に仕事がないのは当たり前前……」と気持ちはさらにフェイドアウトしていく。

でも、「多分最初がつきすきていたのだ」と思い直す。共著とはいえ、初めから大手出版社の単行本の仕事だった。これに企画から加わりルポを担当し、一年近い歳月をかけこの本が出版された。それに並行し「わいふ」では一年間の連載を持たせてい

ただいたり、少し暇になると単発の仕事がどこからか降ってきたりしてここまでできたのである。

今が正念場なのだ。自分で仕事が取れるか取れないか、ここがライターとしての別れ道かもしれない。そう思って毎朝、赤鉛筆片手に新聞に向かい、求人欄とニラメッコして何とかかなりそうな会社をチェックする。

ところがここでまず引っ掛かるのが学歴である。私は高校を卒業してすぐ、芸能界という特殊な世界を選んだ。世間では「芸能人は頭が悪いもの」と相場が決まっているらしいが、別に大学に行ける学力がなかったから行かなかったわけではない。私よりずーっと成績の悪かった子だって、そこの大学には滑り込んでいる。彼女たちがおしゃれをし同好会でファッション程度にスポーツをし、片手間に勉強もしながら合コンに夢中になっているころ、私はわき目もふらず芸ごに精進していた。私のほうがはるかに有意義な青春をおくっていると信じていたのだ。だからただの一度も学歴コンプレックスなんて持ったことがなかった。

た。

だのに、新聞の求人欄には、どんな小さな編集部にも大抵大卒もしくは短大卒、と書いてある。「何なんだこれ。ずるいよなあ。遊んでいても大卒行ったりやあいいっていうの」と改めて憤慨しながらも「マツ、別にいいか」と気を取り直し、ある出版社に電話をした。

「高卒ですが、ライター経験があります」



と言うと、

「それでは作品をお持ちください」ということになり、面接に向かう。

と、まず履歴書を見るなり

「ああ、こういう方は芸能関係の記事でもお書きになれば……」とか言われ、作品なんかほとんど読んでもくれない。

ライター仲間には「じゃあ履歴書に宝塚って書かなきゃいいじゃない」と言われる。

でも、私の作品にはそれだけではないが宝塚物が多いのは事実で、これを持っていけなくなると随分と作品の数が減ってしまう。それに、この間ライターとしてクロワッサンに出たときも、どうしたって物珍しいから、元タカラジェンヌというプロフィールになる。それではあれも持っていない、これも持っていないというっていくものがほとんどなくなってしまう。

ライターとして仕事をするとき、こうした偏見にぶつかることは多々あるだろうけれど、在団していたことを誇りに思うことはあっても恥ずかしいとは思わないから、やはり隠すのは嫌だ。

売り込みが大事と悟る

それでは、逆にこれを武器にしようと、ある演劇情報誌に売り込みに行った。ここは宝塚や四季などのミュージカルにかなり力を入れている。この雑誌を見つけたときには「私が書かなくて一体だれが書くの」と思ったほど、私にはびつたりの雑誌だと思っただ。

ちょうど、宝塚では同期や一期上一期下といった人たちがトップになっている時期だし、ほかのミュージカルで活躍している人たちもとりあえず顔なじみだ。今売りに出している若手演出家たちもみんな同じ年ごろで昔から知っている。退団して十年経ってしまったが、いまだに楽屋や舞台稽古など普通の人では入れないところでもフリーパスで入っていけるという強みもある。これを武器にしようではないか。

面接に行くとき編集長はじめ編集部全員といていいほどの人が温かく迎えてくれた。向こうは全員演劇が好きなのだし、こちらは中にいた人間とあって話は弾み、「わいふ」の連載はとても面白いと気に入

っていただいたりして二時間近くいることになった。

帰り際、一応謙虚に、

「すぐに仕事になるとは思っていませんが、何かありましたらよろしくお願いします」と言うのと、

「いえ、いえ。もうすぐにもムック(雑誌と書籍の中間的な本)でもお願ひすることになると思いますよ。うちも中に詳しく演劇を見ることが好きで書ける人を探していたんですよ」と言う。

全員が玄関まで出て、

「また、いつでも気軽に遊びにいらしてくださいね」と見送ってくれた。

これは、私がうぬぼれているわけでもなんでもなく、だれが聞いたって好感触だ。私は雲の上を歩いているくらいの気分になり、あんまりうれしくて、最寄りの駅で「わいふ」編集部に電話をしちゃったくらいだ。

自分のキャリアが生かして大好きな書くという仕事ができるなんて、なんて幸せなんだろうと夢のようだった。しかし、あんまり浮かれて大事なことを忘れていたの

だ。実は私には一つのジंकラスがある。

「いいことがあったら、本決まりになるまで絶対に人に言っはいけない」

信じられないような話だが、実際、九割がた決まっていた話が流れたことがほんとうに何度かあったので、気をつけていたのに……。

その後、編集部からは何の音さたもなく一カ月経った。「幸せは待ってちゃだめだ。自分でつくるんだ」という歌があったじゃないかと意を決して、一度編集部に遊びに行った。しかし「気軽に遊びに来て」と言われていても、実際何の用もない人間が編集部に遊びに行くというのはいかんなりの勇気がいる。それでも近くまで来たので寄ってみたら(実際すぐ近くのホテルで和田誠さんの出版記念パーティーに出る用事があった)別に迷惑そうでもなくお茶を出してくれて、三十分くらい芝居の話などをした。またまた玄関まで見送ってくれて「また遊びに来てください」と言われる。きつねにつままれた気分だが、それ以降も何の連絡もないのだ。

もう一つ、ある健康雑誌でレギュラーを



持ってほしいと言われた。私が売り込みに行ったわけでもなく向こうからきた仕事だ。ところがこれも突然流れてしまった。こんなことは、先輩ライターの方は幾つも経験しているのかもしれない。でも三つも続くとけっこう落ち込む。

「私は運に左右されやすい人間なのかもしれない。ついているときは、徹夜しないと

間に合わないほど仕事がきていたのに、今は運気が落ち込んでいるのだろうか？」なんてばかげたことを考えまたまた落ち込む。

「やっぱり、私はネタの奇抜さで今までこれだけなんだ。文才力なんてカケラもないんだわ」と悩む。

この繰り返しで二カ月が過ぎた。まったく情けない話だ。しかし、パーティーであるのシエイクスピアの専門家小田島雄志先生に知り合ったので、ずうずうしくも「わいふ」の連載を送らせていただいた。すぐにとてもよかったというお褒めの葉書をいただいたので、お守り代わりにいつも持ち歩いている。落ち込んだときにはこれを見て大分元気になるようになってきた。

長かった梅雨もはつきりしなかつた夏もようやく終わるらしい。私もウジウジとはおさらばして売り込みに出かけるとするか。

「そうそう。アメリカの学校では秋が新学期の始まりだというじゃない!!」と自分を叱咤激励し、今日も赤鉛筆を持って新聞とニラメッコの日々が始まる。

お友達に“わいふ”をおすすめください

新しい読者をご紹介くださった方には、次のように購読期間を延長させていただきます。

- 定期購読者をお一人ご紹介くださるごとに誌代プラス送料とも一号延長。(六人ご紹介くだされば、翌年の誌代・送料とも無料になります)

“わいふ”年間分をプレゼントにお使いください

- 結婚、赤ちゃん誕生のお祝い、遠方のお友達とのコミュニケーションにどうぞ。お申し込みいただければ、まず新読者にきれいなプレゼント・カードをお送りしてお知らせし、以後毎回送本いたします。

- その場合も定期購読者のご紹介と同様に、お一人につき一冊分延長させていただきます。

お客様は二千人

東京都大田区●潮田京生子

売り上げ二百万

今、私は専業主婦だが、半年前まで仕事を持っていた。それはメガネ・ファッションディレクターという肩書きで、あるメガネメーカーと契約し、「メガネはファッション」ということを広くお客様に伝えるというものだった。

要請があれば日本全国どこへでも出かけ、お客様一人一人にメガネとメイクアップ、コスチュームなどのコーディネートを提供する。六年間で延べ訪店数は約百店舗、お会いしたお客様は約二千人に上った。振り返ってみると実に様々な思い出があるが、今回は印象深い人々との出会いを書いてみたい。

新人時代の最も心に残る場所は、奈良県だった。

宝石、メガネの兼業店で、生まれて初めて「やくざ」さんにメガネをすすめ、買っていたのだ。

若い女性を連れられた格幅のいい中年男性が、「あんたが先生か？」と、私の顔写真の載ったチラシを見ながら店に入ってきた。迫力のあるその声に、「怖い」と身が固くなったが、必死で笑顔をつくり「はい」と明るく答えた。

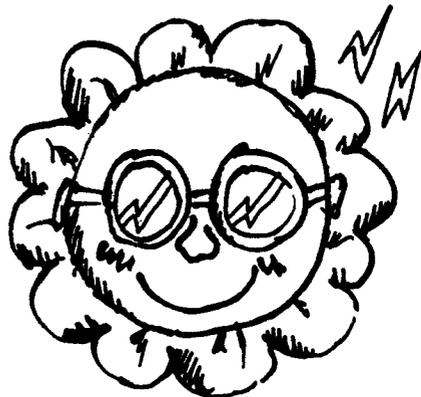
傍らにいた店の社長が、「今日は、東京から先生が来てはりますねん。似合うメガネを見てもろたらどうですか……」と、急に腰が低くなる。

「この人、普通の人じゃない。それに、こっちは奥さんじゃないだろうな」と思いながら、私は二人にいすをすすめる。

「お客様は体格が立派でいらっしやいますから、こちらなどよろしいと思います」と、十八金のメガネフレームを二人の前に置いた。

男性は無言でそれをガツシリとした顔にのせて、鏡を見詰めている。

「どうや？」と、女性のほうを向いたが、彼女は黙っている。一瞬、店内に緊張の空気が流れた。おくせす「いかがですか。よくお似合いですよ」と、二人の顔を交互に見て言ってみる。続けて、そのメガネの特長



やら、似合う理由など少し早口で説明する。背中に汗が流れるのを感じながら、笑顔をやささない。

「あんたがええと言っんなら、ええんやろ。これにするわ」短い沈黙の後、メガネを外しながら承諾してくれた。

「ああ、よかった」全身がほっとする。どうやら、私を気に入ってくれたようだ。

「こいつの目見てやってくれや」と、今度は女性のほうを頼まれた。もう大丈夫。にわ

かに自信がわいてきて、堂々と宝石付きのものですすめた。男性が、「それがええ」と即決してくれた。

安堵感に浸りながら二人を店から送るとき、ふと男性の手元が目に入った。太い指にゴールドのごつい指輪が光っている。

「ヒュー。嫌な趣味」と思った瞬間目はくぎ付けになってしまった。片方の小指がなかったのである。後で社長に聞くと、その男性は街全体を陰で牛耳っている、やくざのお偉いさん”ということだった。

なお、この二人の合計売り上げが約二百一十萬円で、店の月商の約三分の二を占めたため社長に大変喜んでいただいた。私も大きな売り上げがとまうれしかったし、この経験で接客に自信がついた。

ああ、刺激的

また、東京、新宿のあるデパートで仕事をしたときも、個性的なお客様に出会っている。

近くに歌舞伎町という歓楽街があるせいか水商売のお客様も多いのだが、私は”おさま”さんに出会ってしまったのだ。

最近テレビなどに登場する”ニューハーフ”と呼ばれる人たちはとびきり美人という感じだが、私が出会ったその人は、「絶対、男」と分かる気持ち悪い（ごめんなさい）人だった。厚いファンデーションを突き破って黒々としたひげが口の回りを囲み、太い首にのど仏がくっきり見える。短いつめに赤いマニキュアをし、たくましい体に派手なワンピースがはりついていて。「ねえ、わたし、どんなのが似合うのかしら」と、私に近寄ってこられた。一步、後



ろへ下がりたいのを我慢して、笑顔で誠意アドバイスをする。彼（いや、彼女）はそれを熱心に聞いて、縁なしの華やかで女らしいメガネを決めてくださった。

客観的に似合っているかどうかは別として、それをかけてウツトリしている姿を見て、「気に入ってもらえてよかった」と心地よい疲労感を味わった。

まだまだ、面白い人はたくさんいる。思いつく限りがない。機会があればまたその人たちのことも書いてみたい。

私はこの仕事を通して人と接することの面白さを発見した。これほど刺激的で興味深いことは、ほかには見当たらない。

現在幼い子供の世話と家事に専念している、少々退屈している。

あのころは私にとって、イキイキと輝いていたステキな時代だった。

いずれまたあの刺激に出会いたい。そこから多くのことを学びたい。自信を持たせてくれるそういう仕事に就きたい。と願っている。その実現を目標に私は毎日を過ごしている。

(え・山田京子)

痴呆性老人のためのホームを見て

川崎市宮前区 水落 時子



聖マリア・ナーシングヴィラ マリア館

告発されたホーム

台風が関東地方を直撃しそうだという少し雨模様の日、埼玉県熊谷市の聖マリア・ナーシングヴィラを訪れました。

私は一年前から老人ホーム情報センター準備会の担当員として、センター発足に向けてアンケート調査や老人ホームの見学をしています。

今回訪れた聖マリア・ナーシングヴィラは「週刊朝日」に五月十二日から連載で告発記事が載せられ、かなり話題になっていたので、ぜひ見ておきたいと思って見学の申し込みをしました。

このホームは介護型の有料老人ホームでアルツハイマーなど痴呆性老人が入居しています。

門を入ってよく手入れされた庭の中を少し歩いて行き、花一杯の玄関で職員の方の笑顔に迎えられました。

応接室で色々お話を伺った後、施設の中を案内していただきました。

軽度の人のフロア、重度の人のフロアと分かれていて、個室、二人部屋、四人部屋がありますが、プライベートシー保護のカーテンや間仕切りなど、さりげない配慮がされています。

軽度のフロアにエレベーターで上がりました。

とても明るい雰囲気です。

どの部屋もベッドルームとリビングルームに分かれており、みなさんそれぞれでリビングルームのいすに座りテレビを見たりマザー（介護をする人をこう呼んでいる）と話をしています。寝巻き姿の人はいません。

昼間は自分の家で生活しているのと同じように、普段着に着替え、髪をとかし、おしゃれに気を配ることがボケの進行を防ぎ、遅らせる効果があるそうです。

大きな窓と清潔なベッドメイク、何よりも住んでいる人々がこざっぱりと装っていて、施設の中全体が明るい。

きびきびと動くマザーたちが廊下を行き交い、病院などにあるような森閑

とした寂しさはどこにも見当たりません。

車いすに乗ってマザーに押ししてもらいながら散歩を楽しんでいる人、さりげなくマザーがついていますが、自分一人でエレベーターを使いゆっくりと庭に下りていく人、つえをついてマザーに介助されながら廊下を散歩している人など、様々な人の往来があります。



4人部屋寝室 となりがリビングルーム

お天気のいい日は庭のテーブルに昼食を運び、季節の風景を楽しみながら大勢の人と一緒に食事をするのもあるそうです。

エレベーターで別のフロアに行きました。いきなり、「よくいらっしやいました」と声をかけられました。

「わたくしは世田谷の〇〇でございます」

「ア、どうも、こんにちは」と思わず私は答えました。

とても丁寧にお辞儀をして迎え入れてくれたこの方は、完全な痴呆の女性で廊下のいすに座っていてエレベーターから人が下りてくると、「よくいらっしやいました」と声をかけています。

突然「キー」という声が聞こえました。マザーが色々言い聞かせているようですが、なかなか直りそうもありません。入居して間のない人でしょうか、環境の変化にまだなじみないでいるようです。しかし、精神的に落ち着いてくると、だんだん穏やかになりこのよ



うな声は小さくなると案内の男性が話してくれました。

「なぜああいう声を出すのかね、心にうっ積しているものがあるのだろうか」とカッターシャツをキリッと着こなした紳士が話しかけてきました。私たちを案内してくれている職員が「社長、すべてうまくいっております」と報告している。「ウンウン」とうなずいてから、「君のことはよく覚えているよ、君たちも何かうっ積したものが心にあつたらいつでも相談に来たまえ」とおうように構えています。とても痴呆の人とは思えない立派さで、思わず「よろしくお願いします」と答えてしまいました。

様々な工夫

各フロアごとに廊下の材質や絨毯じゅうたんの模様が違うことに気が付きました。

これはホームが苦心したことの一つで、医療行為があった後の血液や薬剤の染み、粗相をしたときの染み、においなどがいつまでも残るので、住んでいる人々の症状に合わせてフローリン

グにしたり、液体がしみ込まない材質のものにしたりと絨毯一つにも試行錯誤の日々があったといいます。

「におい」には随分頭を悩まし、汚物処理の方法には色々と知恵を出し合い床材を変えたり、レイアウトを変えたりついに建物の構造まで変えるに至った話を聞き、ほとほと感心してしまいました。

事前に十分検討して建てたはずの建物も、実際に運用し始めると次々に改良する場所が出てきて、新築三カ月目からもう建物に手を加え始めたそうです。

入居者の症状に合わせた方法でできるだけ快適な生活の場にしたい、という思いが伝わってきます。

食事にもその気持ちが反映されました。

大きな食堂で一度に食事をするのではなく、各部屋のリビングルームで食事をするそうです。

食事のメニューが見たくて、エレベーターから下りてきた食事運搬用のワゴ

ンの中をのぞいてみました。画一的なメニューではなく刻み食、パン食、おすしにお握りとバラエティに富んでいます。パンもホームで焼くそうです。現在一八二名の入居者がいて、こうした個人個人への細かい対応は大変な努力のいることだと思いました。

リハビリ室はかなり広く、色々な器具が置いてあります。

理学療法士の方に話を聞きました。「ここでは楽しみながらリハビリをしていただくということが大切なので、きついことや無理なことはやりません。気晴らしにブラッと寄って歩行訓練でもしようかと、気軽にやってみていただけるように心掛けています」と話されました。ちょうど食事が始まる時間になってしまっ、実際にリハビリをしている人を見かけられなかったのは残念でした。

次はベッドや車いすの「転落防止帯」を実際に着けてみることにしました。ベッドの転落防止帯は幅が二十センチくらいの二本の帯の組み合わせで

きており、一方をベッドにつけ、もう一方をウエストに巻きます。実際にベッドに寝て当ててみると寝返りは自由に打てるし、起き上がってベッドのへりに座ることもできました。しかし床に落ちようとするや落ちない仕掛けになっていて、あまりにうまくできているので、その仕掛けがどうなっているのかしげしげとながめたほどです。国産品ではなくドイツ製でした。



転落防止帯をつけて腹ばいになれる

車いすの転落防止帯は色々な形のものが何本もあり、それぞれ当ててみました。

かわいい生地にレースなどもあしらってつくってあり、おしりからずり落ちる人にはこの形、頭からつんのめる人にはこの形、〇〇さんにはこの形と一人一人の症状に合わせて車いすからずり落ちない工夫がしてあります。

これは聖マリア・ナーシンググヴィラ



転落防止帯をつけたままベッドに座る



車いすの転落防止帯
ずり落ちる人用



つんのめる人用

製。実際に介護した経験から工夫されて出来上がった、オリジナルのものです。

危険防止のための転落防止帯を工夫して、できるだけ外の空気を吸わせてあげたい、寝たきりにはさせないという気持ちで介護がなされていることを感じました。

次は隣に建っている病院を訪れました。

ホームの方針として、生活する居住部分と医療を行なう病院の部分を完全に分離し、入居者が病気になるたときは廊下でつながっている併設のこの

行事も回復訓練

病院に入院し、回復するとホームに戻っていくシステムをとっています。居住部分にもたくさんの看護婦さんが働いていますが、これは毎日の健康管理や回復後の経過管理のためで、ホームの入居者のカルテや看護婦さんの詰め所は病院の中になりました。

この病院は外来の患者さんも受け付けていますが、看護婦さんたちは外来の係とホームの係と分かれていて、仕事の分担はきっちりわけがつけられているそうです。診療時間をとくに過ぎた病院の中はとても静かで、時折看護婦さんを見かけるだけでした。

ホームの中を見せていただいた後また応接室に入り、お話を伺いながらビデオを拝見しました。

すてきな洋服を着た老人が、介護の人に付き添われて花道を晴れやかな笑顔を見せて歩いています。車いすに乗った人もいます。ホームの行事の一つファッションショーのビデオです。元気なところに身に着けていた一番好きな洋服を、家族の人に持ってきてもらっ



て着るのだそうです。

それぞれの人がなんと晴れやかなのでしよう。精一杯に姿勢を正し、笑顔をつくり、お辞儀をし、手を上げてこたえ、一生懸命歩く。私たち元気なものには何でもないしぐさが、このホームに入居している方たちにとっては毎日のリハビリの成果なのです。必ず一、二人のマザーの介助を受けながらの出演ですが、オートクチュールのショー顔負けの華やかさです。

一人一人ビデオを見ていくうちに男性職員が時々説明をしてくれます。

「この方はもう歩けなくなり、今は車いすです」

「あ！ この方は先日お亡くなりになりました」

「ホームのみなさんはこのファッションショーを楽しみにしておられます。それに家族の方も大勢見に来られます」と。出演している方一人一人をよく覚えていようです。

とても楽しい催し物でした。入居者自身、家族、何よりも介護をしてい

るマザーたちのうれしそうな顔が印象に残りました。

若い男性も女性も大勢働いていて、シルバー産業は若い年齢層の参入の少ない企業であると言われていますが、ここではあまり関係ないようです。

このホームは開所九年目になります。このホームは開所九年来ずっと入居している方が十三人もおられるそうです。平均滞在年数は三年六カ月とお聞きしました。

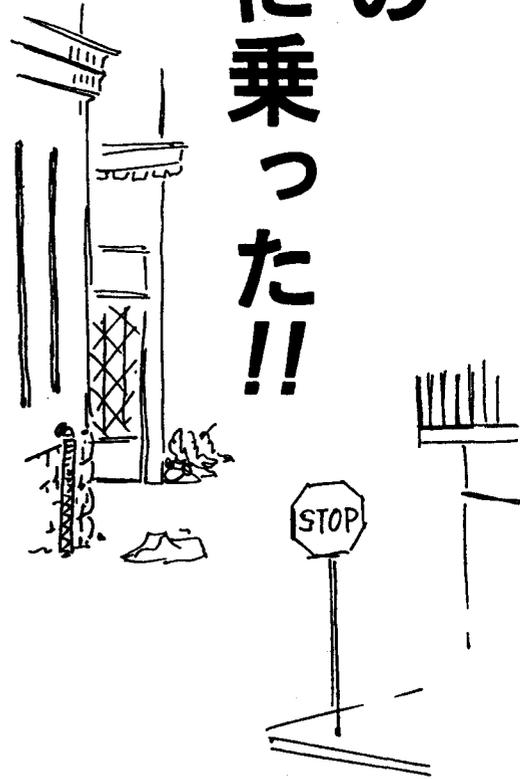
三年前くらいから重度の人の入居が多くなったそうです。

家庭で看ようと悪戦苦闘し、介護する人とお年寄り双方がヘトヘトになって入居される方や、トランキライザーで抑制されるので転入居してきたという人もあり、自立して生活のできないお年寄りを抱えて、大変な思いをしている家族のつらさが分かりました。

台風が近づいているから早く帰りましょうと言いながら訪れたのに、なんと五時間も長居をしてしまっって雨模様の夜道を大急ぎで家路につきました。

(写真提供・筆者)

アメリカの パトカーに乗った!!



アメリカリトルロック市 伊藤 琴子

アメリカの警察と聞いて日本人が思い浮かべるイメージは、多分ハリウッドの映画や、テレビ番組のマイアミパイイスなどに登場するカッコイイお巡り、クールな刑事とか、銃を自由に持てる社会ということで、コワイとか相場が決まっている。

日本でもアメリカでも一般の小市民は、できることなら警察の世話にだけはなりたくないと思っている。道を運

転しているときにパトカーが目に入ったりすると、サツと速度をチェックしたり、悪いことをしていないのに何となく緊張してしまうのは国とか文化に関係のない人間の心理らしい。

二月六日の土曜日から、七日日曜日未明まで、私はパトカーに同乗する経験をした。私の「相棒」はアンディ君。彼は私の教えている日本の文化と社会のコースを、アーカンソー大学リト

ルロック校で取っている犯罪学専攻の四年生である。

このパトカー経験のいきさつは、アンディが私の教室に制服で現われたところから始まった。

「アンディ!! びっくりさせないでよ!」私はお巡りが入ってきたかと思いい、一瞬何事かとほんとうにびっくりした。

「先生ゴメン。今、法廷からの帰りで、

着替えてる暇なかったんだ」

「そーう。(ホッ) あなたポリースだったの」

「うん、よかったら今度僕のバトカーに乗せてあげるよ」

「ワイー！」

と、私はまるで子供が遊園地に連れてってもらえるのでうれしい!!そんな答え方をした。が、バトカー同乗の日が近づくと、何となく心配になってきた。

確かにテレビや映画のお巡りはカッコイイ。しかし、それはバンバンとピストルの撃ち合いとか、車の炎上とか、ヘリコプターとか、いわゆるアクションものとして見ている者の心をとらえるからであり、実際自分がそこにいたら、表現悪いですけど、そのものズバリ、オシッコちびっちゃいそう(ちなみに英語でも「ズボンをぬらす」という表現をします)。ほんとうに弾が飛んできたら心臓止まっちゃいそう。

アンディは級友やほかの人たちに、今週はイトウ先生を連れてパトロールするんだ、と得意になって言うんで私と

しては、今更「あのう、やめる」とも言えず決行の日が来てしまった。

命あつての物種なのに

アンディの勤務時間はスイングシフトとあって、午後六時から翌朝一時半まで市内の決められた区内をパトロールするのである。

五時四十五分に署に着き、同乗者の心得を読み、仕事のじやまになるようなことはしません、警官が撃たれ倒れた場合には連絡を取ること、とかの約束事項を書いた紙の下のほうに、日付を入れ署名した。アンディは「証人」欄のところサインした。

ドアを開け別室に入る。アンディのボスの巡查部長はとても人懐っこい感じのオッサンという表現がぴったりの人である。マールボロを吸いながら「ようこそ」と笑顔で迎えてくれた。ほかにも待機している警察官が二人いたが、ほんとに若い感じ。何か物足りないというか、あんたらほんとうにお巡りやってんの?と言いたいくらい、えーと

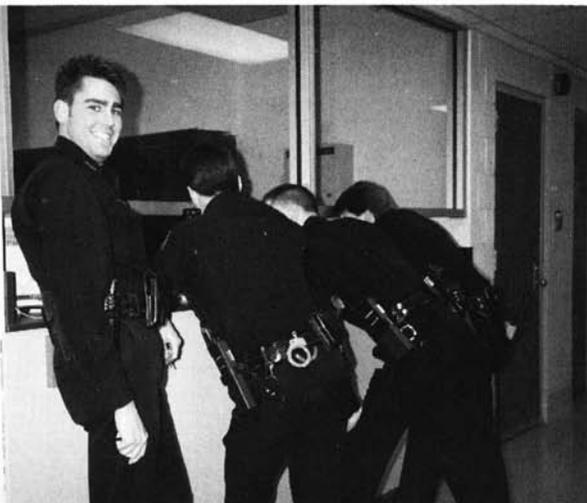
このぼんぼんのような人たちである。私はドン・ジョンソンとか、メル・ギブソンのような俳優のイメージしか持っていなかったたので、人は見かけによらぬものだアと思った。

アンディの受け持ち区は五十七番区に決まり、地図で示してくれた。

「先生見てよ。僕の受け持つところは白人の多く住むウエストリトルロックに比べるとうんと小さいでしょ。住んでいる人たちの数はこの地区とあの地区じゃ同じなだけどね」

アンディの言わんとするところは、やはり黒人の多く住むダウンタウン周辺に警察にやっかいになる人が多いということである。人種差別がどーのこーのと言う前に、事実として黒人のほうが犯罪率が高いということだ。ま、金持ちの白人も率が高いけど。

隣の本部の建物へ行き、アンディとほかのお巡り君三人は窓口で無線電話をもらい、紙に署名をしている。よく見ると四人とも背中の骨や肉が盛り上がって、おかしい格好なのである。前



背中が曲がって見えるのは6kgの防弾チョッキのせい

にいる男全員がそうだ。
「アンディ、こんなこと聞いたら失礼かと思うけど、あなたたちちよっと猫背気味なんじゃないの？」
「そうだよ。何てたって身を守るために六キログラムの防弾チョッキを着ているからだよ」
「防弾チョッキ？ えっ、そんなもの要るところへ私も行くの？」

「そうさ、危険が一杯」

アンディはニッと笑った。何よ、チョッキのない私は生身じゃないの。どーするのよ、当たったら？（人生皮肉にできていて、宝くじには絶対に当たらないくせに、こーゆうときに「当たる」のよね、きつと。お母さん、お父さん、ごめんなさい）

「心配ないよ！ 僕がついているから！」

そう言ってアンディは私の肩をたたいた。が、私は心配で胸が一杯。今更「家に帰る」とも言えないので、エイッと気持ちを引き締めて外に出た。でも、ドキドキ。

アンディと私の乗るパトカーはフォード製で、車体のラインが丸っこいので、卵と言われているものだった。車の真ん中に網があり、悪いことをした人は後ろに座る。アンディは車についているライト、無線設備をすべてチェックし、いざパトロールへと走りだした。

「僕ダンスミュージックが好きなんだ」

そう言ってアンディはラジオのボリュームを上げた。そんな、お巡りが勤務中にラジオ聞いてもいいのかしらん、ちゃんと無線で入る情報が分かるのかしら、私はじゃまにならないようにと思ひ黙っていたが、実は命を懸けてこのパトカーに乗っていると思ったら声が出なかったのよ。

「先生、今日静かだね」

アンディは音楽に合わせて首を振ったり、手でリズムをとったりしている。

「しゃべったらじゃまでしよう？」

「ううん、僕一ぺんに三つ聞けるから大丈夫。ラジオでしょ、無線でしょ、それから先生。しゃべってもいいよ」と、聖徳太子のようなことを言う。

時間の過ぎるのが遅い。さっきからまだ十分しか経ってない。私はこれから先、恐怖のとても「長い夜」になるなアと思った。おまけに今夜は超特大の満月である。

公営住宅に来た。アメリカのパブリックハウジングには、日本の公営住宅のイメージとはまったく違い、ほんと

うに生活に困るような人が住んでいる。ところどころ窓やドアは板がはりつけられており、荒廃している。ゴミもあちこち散らばっている。

「ここら辺はね、お巡りの僕たちでも怖いんだよ」

「ヒエーッ。そんな怖いところに私を連れてくるな、バカ。お前の成績はこれでDだぞ。D」とも言えず、私は怖さを押し殺して黙っていた。アンディの仕事に物好きにもついていくって言ったのは自分だもん。自業自得だ。先生のほうがバカなのよね。

若い黒人の青年、女子四人を乗せた車が公営住宅内の道で止まっており、「ウン、ニオうな」そう言っただけでアンディはサーチライトを照らし車から降りた。後部座席へ行き男の子を外へ出し、パンザイをさせ体を触った(専門用語では何て言うのかしら?)。何も持っていないということ、彼は座席に戻った。アンディは私のほうに向かって、おいでよと手で合図したが私は首を横に振った(絶対に降りるもんか)。

黒人のティーンエイジャー二人組が通りかかり、アンディは彼らの持っていた袋を取り上げた。

「未成年はビールを飲んだらいけないよ」

そう言って中身を全部あげた。

「彼女は何してんのよ、あそこで」
と、ハンドルを握っていた女の子がアンディに聞いた。彼女とはもちろん私のこと。

「DEA(麻薬取締官)さ」

「そうは見えないよ」

「彼女は新米で、今晚は見習いということとでリトルロックの通りとか、地区の勉強をしているんだ」

私は胸を張って座り直した。麻薬取締官ね。ハハハ、偉いだらう、怖いだろうと、急に態度がデカくなった。

アメリカでの緊急事態に対処する電話番号は九一一で、ナインワンワンと呼ばれている。殺人、レイプ、その他の場合に警察に直結している日本の一〇番と同じ役目をする。

「ここらナインワンワン。〇〇で家庭争

議発生です」

「了解」

アンディはメモを取り、現地に向かう。以外と近く数軒先の家だった。

「先生もおいでよ」

「えーっ」私はためらった。まだ、どこで何が起こるのか皆目見当がつかなかったから、バトカーの中で待たされた。 「へい、相棒の取締官、出ておいでよ!」

アンディはドアを開けてくれて、私は家の中に入ることになった。強引な男だ。

意外にも出てきたのは白人の女性だった。「旦那が酔っ払って、私に暴力をふるおうとしたの」

「中に入っているんですか」

アンディは聞いた。家の中のソファに酒臭い男が座っていた。顔は赤く、私には白人なのか、黒人なのか、ヒスパニックなのか分からなかったが、息子が出てきて、この夫婦は黒人と白人の夫婦と分かった。伝統の強く残る南部ではとても珍しいカップルである。暴力をふるう危険ありということで、ア

ンディは彼を逮捕、署のほうに連れていくことになった。

「足元に気をつけてね」

アンディは私の足を懐中電気で照らしてくれた。優しいのね。

すいにおいの人ばかり

デューク氏はかなり酔っていた。後ろの席にただ座っているというだけで、息が詰まるほどアルコールのにおいがして、私は窓を開けざるを得なかった。「なぜオレを逮捕したんだ。えー？ オレが何をしたっていうんだ」

と、ろれつの回らない舌で言っている。酔っ払って日本もアメリカも変わらないなアと思ったが、デューク氏は六時間留置され、酔いのさめたところで家に帰るといふことになった。お巡りって意外に地味なお仕事なのねと思っただ。これじゃ酔っ払い取締官よ。

「こちら本部。アッシャー通りと、メイブル通りで男女のけんか」

「了解」

アンディと私は、男と女がモメてい

るといふ酒屋に向かった。そこにはすでに二人の警察官がいた。アンディは私を僕の先生と言って、その二人に紹介してくれた。けんかの当事者の男は逮捕済みで、おとなしくパトカーの中に座っていた。名前はサマーランド氏白人。四十三歳。彼はいわゆるホームレスで、おながが減り、寝るところがないので、自分で警察を呼んだということと実際の年よりうんと老けて見える。先の二人の警察官が酒屋に着いたときには、入り口に立ち、

「警察を呼んだのはワシだ。早く連れてってほしい」

と、手を振っていたとのことである。アンディは彼を署まで連れていくことにした。が、このオッサンも酔っていて、そのうえおふろに入っていないので、何とも臭かった。人間ってにおうのよね。動物園のおいみたくで、私は悲しくなった。おいしい「食事」をしたり、美容院に行ったり、サマーランド氏よりいい生活をエンジョイしている犬や猫のペットもいるというのに。悲哀。

アンディは彼に色々質問をしている。意外と丁寧で、フレンドリーである。聞いていると、どうもサマーランド氏は頭が少しおかしいのである。事実、彼はアーカンソー州立の精神病院に入っていたことがあり、そこを出てからは仕事にも就かずホームレスになったということである。

署に向かう途中で、レストランの前に数人の人だかりができており、私たちの車にウエイトレスが手を振った。

「おっと」

アンディは車を止めた。

「よかったわ、さっき警察を呼んだところなの」

ウエイトレスの手にはコードレス電話があった。彼女はホッとした表情をした。

また酔っ払いである。今回は白人の若いニイちゃん。酔っ払って客にからんで、レストランを出てくれないとのこと、アンディはすぐ後に着いた警官に任せりゃいいのに、このニイちゃんも一緒に連れていくというのだ。職

務質問をする。

「あの人、ここに来るの?」

サマーランド氏はおじけて言った。

「そーみたいだね。でも大丈夫。手錠掛けられてるから」

「ほんとう?」

サマーランド氏はよっぽど気になるとみえる。

「大丈夫。何もできないから。お巡りの私が言うんだから、間違いないわよ」

「ふーん」

彼は私のことを信じたのか、黙って外を見ておとなしく座っていた。

「さあ、入って」

アンディは、ニイちゃんに後ろの席に座るように言った。

なんで後から来た人にニイちゃんを渡さなかったのよ。二人の酔っ払いを乗せて私たちの乗ったバトカーは、頭がフラフラするくらい臭かった。

署に着いて、私が一番最初に降りた。

「さあ、こちらに来て」

私は、サマーランドオッサンに指示した。一度デューク氏を連れてきてい



るので、どこかのドアに行ったらよいかわかっていたからである。オッサンと私はドアの前で立った。アンディとニイちゃんが来て、アンディがボタンを押しドアは開いた。

取り調べ室の係員は、「またアローム(芳香)か」と笑って言った。芳香とは、オッサンやニイちゃんのおいさを言っているのであり、つまり「酔っ払い」ということである。係員の人の話によると、満月の夜は酔っ払いが多いということだ。昔西洋では満月を見ると狂うとかいって、狂人のことを「ルーナティック」と呼ぶ。ルーナーとは、月の、とか月の作用による、という意味である。

意外に地味な仕事

何人か逮捕していくうちに、アンディがお巡りというよりは、ソーシャルワーカー、社会事業をやっているような感じがしてきた。扱うのが酔っ払いとか夫婦げんかとか、意外に派手じゃない。私のほうもだんだん慣れてきて、緊張が解けてきた。

アンディの担当区にちょうど私の友達ドイツ人のフランクが住んでいるので、いたずらを企てた(心に「ゆとり」ができた証拠)。

私たちはバトカーをフランクの家の前に駐車し、私は車の中に隠れていた。アンディは玄関に行きチャイムを鳴らした。びっくりして出てきたのは、フランク(四十六)と妻のターニヤ(二十一)である。

「夫婦げんかをしているとの連絡があったんで、来ましたが」

アンディはクソまじめな顔で言った。いかにも彼は警察の制服を着ている。

「うちじゃ、けんかなどしていないが」「じゃ、お宅は夫婦仲がいいと言うんですね」

「ええ、まア……」

そのとき、私はドアを開けて外に出た。私の姿を見たフランクとターニヤは大笑いした。

「何かおかしいと思ったわよ。あなただっただのねえ」

アンディの演技力も大したものだ、と私は思った。笑わずにちゃんとセリフを言った。「お茶飲んでいきなよ」とフランクは誘ってくれたが、何と違ってアンディは勤務中、断わらざるを得

なかった。

フランクの家を後にして、付近をパトロール。小高い丘の頂上まで来ると、木陰に二台の車が駐車してあった。この丘からは、街が下に見え、ライトが百万ドルとまではとても言えないが、きれいな夜景をつくり出している。

近くには家もなく、木々が茂るのみである。アンディは強烈なサーチライトをつけた。

「中でやってるやつらは動けないよ」

彼は笑って言った。サーチライトはこうこうと車を照らしている。人影は見当らない。

「もうヤメにしたら。中の人、全然動けないと首が痛くなるんじゃない?」

「ま、このくらいでいいか」

アンディはライトを切った。

「先生も、あーゆうことやりたかったら言っただけ。僕お巡りが来ない場所知ってる」

そんなもんだれがするもんかい。教授がやってたなんていったらスキャンダル。しかし、マンネリ化の進んだ夫

婦とか、冒険の好きなカップルには、意外と刺激になるらしい(日本でも岐阜の長良川とかすこいらしいとは話に聞いたけどね)。

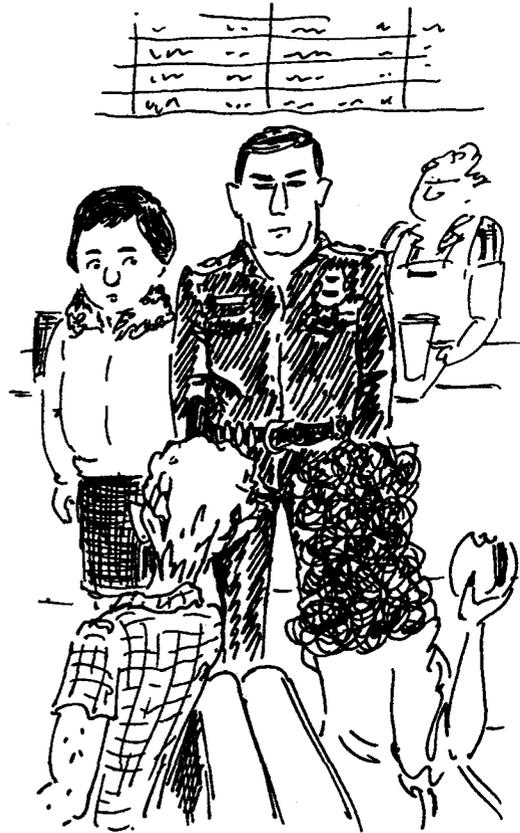
この後、食事をしにケトルズというファミリーレストランに行く。アンディの車が止まるなり、お客の視線はこちらに集まった。アンディは私のドアを開けてくれた。お客は一体何が起きたのか、そんな表情をしている。

タラッ。お姫様のお出ましよ。そんな感じで、私は外に出て、アンディと並んで歩いた。レストランのドアを開けると、また視線。私はスターと一緒にいるような気になった。こんなに知らない人から視線を浴びるなんて。だから芸能人はヤメられないんだろうなアと、察しがついた。自分が何か特別な人になったような気がするのである。

「僕、こっちに座る」

そう言うって、アンディは入り口の見えるところに座った。私はなぜ彼がそうしたのかよく分からなかったけれど、

後で聞くと、そうすることによって、彼の食事は半額になるということだった。つまり、警察官立ち寄りレストランということで、強盗などを防ぐ意味でレストランとしても利益があるのでそうなるらしい。で、アメリカのお巡りは、レストランのほかにもアイスクリームパーラーとか、マッサージとか、ほ



かにも色々な「福利厚生」をエンジョイしているようだ（映画などではよく警察と売春宿のマダムとか出てくるのもなるほどなアと納得）。このレストランの帰りダウンタウンで警官が撃ち合いに巻き込まれたとかで、緊急指令が出る。アンディは、パトカーの上のまばゆ

いばかりの青いライトをヒカヒカさせ、普通の路上をなんと時速百五十二キロのスピードで走っている。信号は途中全部無視、サイレンの音もけたたましく、ジェットコースター並みのスリルで現地に向かう。

私は、極度の興奮で、アドレナリンのレベルは上がりっぱなし、ハーハッハと、笑い続けていたが、同僚の命の危険を感じたアンディは真剣な顔をしている。失礼とは思ったが、私の笑いは収まらなかった。街全体がジェットコースターのレールの上にあるようで、昔歌った「畑も飛ぶ飛ぶ、家も飛ぶ」の感じで、建物も信号も、路上の車も、飛びまくっていたんだもの。

ダウンタウンに着いたとき、すでに八台のパトカーが駆けつけていた。幸い警官は軽い傷程度で済んだようだったが、アンディはほっと胸をなでおろし、

「これだから、僕たちいい給料取ってるんだよ。命懸けの仕事だもの」と言った。



リトルロック市警察パトロールカーとアンディ

「守られる」ことのときめき

この後、自殺未遂事件、家の中への発砲事件、強盗事件などと続き、逮捕、解決をするたびにアンディがよりハン

サムに、よりたくましく私の目に映ってきたから不思議である。私を守ってくれる人がいる。アンディがとっても頼もしい男に見えてきた。最初のころの極度の緊張、途中から出た余裕、そして時速百五十キロのスリル。色んな感情や思いが交錯した。もうこれは、初恋の感じに近かった。

「僕が守ってあげる」か。私はフェミニストだから、そんなことは男のエゴだなんて思っていたけど、今まで独身を通じたけど、素直な自分、フェミニストというよろいをつけない自分を「守ってくれる」男というのも、また、「守ってもらう」ということも悪くないなアと思った。命懸けで彼についていて、ドッと疲れが出たのよね。そんなふうに思えるなんて。

一時半にアンディの仕事は終わり、私をアパートまで送ってくれた。

「ありがと。とっても楽しかった」
「僕も。じゃ先生、おやすみなさい」
「おやすみ」

そう言って別れた。

アパートのドアを開けて私は叫んだ。
「命一個、もうかった!!」

アンディと防弾チョッキの話をしてから、私は命あって家に帰れたらもうけ物と思っていたから、息をしいられるのがうれしくなってきた。だれかにこの経験のことを言いたくて日本に電話した。「まったく、そんなバカなことするもんじゃないよ。飛んで火に入る夏の虫じゃないの」と、母にしかられた。ちょっと、待ってよ。虎穴に入らずんば虎児を得ず。

私はこの経験で色々な人やものを見たし、色々考えた。本からの知識もいけど、実際自分の目で見、耳で聞き、体で体験するという知識のパワーを知った。アメリカの社会の隠れた、というか、私の人生からは見ることでできなかった社会の一面を見た気がした。ホームレス、精神病院落ちこぼれ、家庭内争議に家庭内暴力。社会学を教えるうえでも、人生を生きていく人間として、とてもいい体験をしたと思った。

(写真提供・筆者)
(え・西田淑子)

女たちの情報紙

ふえみん

f e m i n

婦 人 民 主 新 聞

WOMEN'S DEMOCRATIC JOURNAL

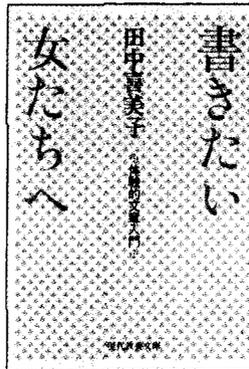
ご希望があれば見本紙を送ります。

申し込み先 婦人民主クラブ 週刊1ヵ月 650円(送料込)。

東京都渋谷区神宮前3-31-18 電話03(3402)3244.3238

大阪市北区中崎西3-1-5 電話06(371)2429

アジア・たべもの・せつけん・げんぱつ
おんな・はたらく・がつこら



「わいふ編集長」田中喜美子の「書きたい女たちへ——体験的文章入門」が社会思想社の「現代教養文庫」の一冊に入りました。

これまで径書房からハードカバー、一六〇〇円で発売されていましたが、文庫本で六四〇円(消費税込み)とぐっとお求めになりました。すくなりました。(「わいふ」でも扱っていただきますのでご希望の方は電話ください)

よい文章とは分かりやすい文章、簡にして

要を得た文章です。

この原則は古今東西変わりませんが、私たち女が「ものを書く」とき、生活者としての感性と知性を生かす道があります。

ありのままに、

実感に即して素直に書くこと、具体的に物事を描写しながら生き生きと書くこと、その中に自ら女性のものを見る目がキラリと生かされていくこと、そうした書き方のコツをみなさまにお伝えするうえで、「書きたい女たちへ」に勝る入門書はありません。

読者のお一人お一人にお薦めしたい本なのです。

☎〇三—三二六〇—四七七—



●各種講座は花盛り

司会 ッわいふの二四三号に「シニアライフ・アドバイザー養成講座受講体験」という千葉県松戸市の鈴木のみさんのご投稿がありました。鈴木さんは将来の仕事につなげたいという気持ちで講座をお受けに当たってすけれども、実はこれと同じ講座の勧誘状が私のところにも送られてきたんです。とても心を引かれて、忙しいけれども行こうかなと思ったくらい、非常に上手な手紙でした。

ところが内容がそれほど充実していません。PRがよくてたくさんの方が押しかけたけれども、仕事につながる講座ではなかった。それが講座が終わるころに分かって非常に落胆なされた。

最近この手の、つまり高齢化社会に役に立つような人間を養成するという講座が花盛りなんですよね。自治体でもしょっちゅう講座を開いていますし、色んな形でヘルパーさんとか、アドバイザーを養成するという動きが目立っている。

受講者の中にはボランティア志向の方

と、それを仕事にしたいという方があって期待の食い違いが大分出てきていると思います。今回の座談会は、その辺を掘り下げてみたいと思って企画しました。

今日は、そういう講座の受講体験のある三人の方々に来ていただきました。まず、ご自分の体験から話していただきたいと思っています。

福田 私は老人関係ではなくて、子供の保育ボランティア養成講座を区の女性センターで一年間受けました。区が主催するお母さん方対象の講座で、子供たちを保育するためのボランティアを養成する講座なんです。

ただ、保育者会議でボランティアが行政の肩代わりをしているんじゃないかという話が出たんですね。ボランティアに対してみなさんがどう考えていらっしゃるのかわかりたくて、今回出席しました。

風間 私は自発的に、国立の山梨大学で聴講生として一週間に三回ぐらい出席して勉強しました。三、四年かかりましたけど、幼児心理から教育学、青年心理、障害児の教育と心理と生理、学生と同じに全部受け

●出席者

風間ゆり 鈴木のぞみ

福田幸子

●編集部 和田好子

●司会 田中喜美子

女の時事放談

女のボランティアは 福祉の肩代わり？



風間ゆりさん

たんです。

司会 風間さんは何か目的がおありになつたわけですか？

風間 最初は目的はなかったんです。

子供が幼稚園か一年生になりかけたころに女の人たちの間で民謡踊りが大流行して、みんな月謝をかけて習っていたんですよ。そのときは私も専業主婦だったからよく誘われたのね。でも同じお金をかけるんだったら、自分の好きなことにかけたいと思つて。

私は幼稚園の教師になる教育を受けているもんだから、幼児教育をもう一べんやってみたいと思つたのがきっかけです。

司会 鈴木さんは色々勉強して資格をお

取りになった方だけど、何を勉強したかというのを少し話していただけますか。

鈴木 今回のシニアライフ・アドバイザーの養成講座を受ける前に、消費生活アドバイザーの資格を取って仕事をしていました。

司会 消費生活アドバイザーの養成講座というのは仕事に結びつきます？

鈴木 ええ。通信教育だったんですけれども、「八五パーセント就職できます」というのが堂々と書いてありました。でも私はそれでも信用できなくて、わざわざ実施団体である日本産業協会というところまで押しかけて、「四十五歳の私が資格を取ってもほんとうに就職できますか」と念を押して、「大丈夫です」という返事を得て受講したんです。

その関連で消費生活専門者会議というのが二年前にありましたので、その資格も取って、今度のシニアライフ・アドバイザーで公的機関の資格は三つになります。

今回のシニアライフ・アドバイザー養成講座は、一応ボランティアだということはどうだってある。でも書き方がかなり微妙

で、幾分収入にもつながるといようなことが書いてありました。

●ボランティアと仕事の違い

司会 内容についてちょっと詳しく教えていただきたいんですけど、これで実力がついたという感じを相当お持ちになりました？

福田 全部で二十四回で、前半が講義で後半が実技でした。前半の十二回は大学の講師の先生がいらして、女性がどういふふうに虐げられてきたか、女性史や女性が学ぶ意味などを勉強しました。後半の実技は、子供がつくれる簡単な工作とかリズム体操、緊急の場合の応急処置などです。

最初は二十名近くいましたけど、最後に残ったのは八名だったんですね。でも、二十四回の講座を受けただけで、ほんとうに私たちは他人の子供を預かっていいんだろっかという思いが全員にありました。

福田 募集は、ボランティアとしての募集だったわけですか？

司会 その後、お仕事として子供を見るようになったのはいつからなの？

福田 二十四回の講座が終わってすぐです。

司会 そうすると、保育付きの講座を開くのに手が足りないから、区がお手盛りで養成したわけね。

風間さんは勉強なさったことが、後のお仕事とか塾を開くのに役に立ったと思えますけども、ボランティア的な活動も色々なさっただろうし、収入につながるお仕事もなさったと思うんですね。

その体験から、ボランティアと収入のある仕事との違いをちょっと話していただけますか？

風間 私、お金をいただく仕事をしていてもね、そのうちの何十パーセントかはボランティアになっちゃうんですよ。

今も月謝をいただいて知恵遅れの子供さんというか、普通学校へ行ってもだれも顧みてくれないような、三人兄弟の一番上のお子さんの勉強を見てあげているんです。



福田幸子さん

夏休みになると、月謝は全然変わらぬにいつもの倍ぐらい見てあげる。お母さんが働いているから、夏休みの間二番目の子供は一日中家にいる。一人置いとくわけにはいかなから、割り増しをもらうわけではないけど、ついでに二番目の子も見ちゃう。おやつ代ももらわない。そんなことをしているから、はて、どこまでが収入のある仕事で、どこまでがボランティアか自分でも分かんなくなっちゃうんですよ。

でもね、有料にすると確かに違うところがあるんですよ。お金をもらうことによつて私がどれだけのことをやるか。両方が無責任にならないようなケジメをそこでつけなきゃならない。気持ちのうえで違うとし

たからそこですわね。

司会 伺ってみると、やはりまったくのボランティアとは違いますね。だけとお金のためにやってらっしゃるわけでもない。これは微妙なところですね。

● 失望した講座内容

司会 鈴木さんは仕事につながることを、自分がステップアップしていくために一つ一つ学ぼうという気持ちでこの講座をお受けになって、どういう感じでした？

鈴木 今私は消費生活アドバイザーの資格で電話相談という仕事をやっていますので、色んな方の相談を受けます。高輪化に伴う問題の相談もあります。仕事としてやるからにはプロとしてきちんとした対応をしたいということで、このシニアライフ・アドバイザーも仕事の資質向上が第一義の目的で受けました。

けれども、非常に失望しました。資質の向上にはあまり役に立たなかった。

シニアライフ・アドバイザーを本気でやるうと思ったら、これはかなり大変だと思います。それにしても、「元宝塚女優とかデ

ザイナーの小篠綾子さんなどが、大物講師として鳴り物入りで見えたのが不可解でした。後でコシノジュンコさん姉妹のお母さんだということは分かったんですけど。

コシノジュンコさんとかヒロコさんは名前だけは存じあげてますけれど、私は綾子さんという方はまったく存じあげなかった。だのに、なぜお母さんが大物で有名人のかまったく理解できない。

司会 どんなお話だったの？

鈴木 三人の子供のころの話と自分史。自分はどうやって三人の子供を育てたかという話です。

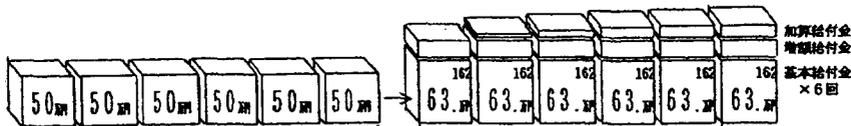
司会 つまり有名人の裏話は面白いだろうと、聞けばみんなが喜ぶだろうと。それでしようね、きつと。

鈴木 でもタダじゃないわけですからね、こっちは。貴重な時間を、仕事を持っている方はかなり犠牲を払って出席しているわけですから。

和田 それはシニアライフ・アドバイザーとして何か役に立つような話だったんですか？

鈴木 講義は「美しく老いるために」とい

49歳～64歳までの方用の年金プランです



年払い保険料 50万円を6年間積立てます。年金は6年後から631,620円づつ6年間給付になります。これに加算給付金、増額給付金がプラスされます。くわしくはお電話で！



くわしくは「わいふ」あて
電話で資料請求して下さい

杉本 指定代理店
東京海上火災保険株式会社

杉本保険事務所 杉本侑子 ☎03-3260-4771

う名前が付いていたんですけど、私にはまったく雑談としか思えませんでしたね。

高齢者の食生活にも私はものすごく関心があったんですよ。栄養の問題だけじゃなくて食生活は生きがいにつながる。ボケ防止に役立つとか火を扱う危険性などが食生活には集約されている。ところが講義は何のことはない、「ニチレイ食品」の社員が来て、いわゆるパッケージになってる糖尿病の食事とか高血圧の食事の話なの。それがいかに便利かという話でした。

和田 つまりアドバイザーとして、ニチレイの食品を勧めろってことなのかしら？

鈴木 あと、シニアライフの相談を受けるときに、相続とか離婚、人間関係を含めた問題はすごく大きいと思うのに、これは三時間しかないんです。一つのテーマに一時間半。

弁護士の方が見えて、相続の計算の仕方とか、離婚の仕方とか、どんなときに慰謝料が取れるとか、そんな基本的なことをやったら、一時間半なんてアツという間ですよ。このテーマについてはもっと何倍もの時間が欲しかった。



鈴木のみみさん

ハッキリ言って、これだけの講義で、人生経験豊かなシニアの方たちの相談にどうやって答えるのか、非常に疑問に思いましたねえ。

●老人の夢をターゲットにする

司会 この講座で一番基本的な疑問というの、うんと善意に解釈して、これで少し力がついたとしますね、でもアドバイザーというのは、ポランティアをするにしてもどういうところに配属されるんでしょうか？

鈴木 シニアルネッサンス財団が自分のところに事務所を持っていますね、そこ

で相談所を開いているわけ。九時から五時まで何人か詰めていて、電話で相談を受けている。希望者を募って、シフト制で週に一回とか二回とかやってるそうなんです。報酬は交通費込みで、一日五千円。

司会 べらぼうに安いわね。時給五百円というところですね。

鈴木 そうです。今のところ収入につながる活躍の場というのはそこだけ。ですから、そう何人も要らないわけです。

講座が終わりに近づいたところに将来どういうところに我々の資格が生かせるか、財団の人を囲んでフリーターキングが行なわれたんです。二時間の予定が三時間に延びて、かなり突っ込んで熱心に話し合われました。割合男性が多くて、大体三割が男性でしたね。

定年後の生き方としてポランティアを、という方の中にはいらしたかもしれませんが、私の回りでは収入につながらなくても持ち出しでないぐらゐの保証は欲しい、という方がかなりいらっしました。

第一回目の講座ですから、相当意欲を持った人が多かったと思うんですけども、

就職のおぜん立てはあなたたち自分でやりなさい、と。やっぱり話がかみ合わないんですよ、堂々巡りで。

司会 私のところに来たダイレクトメールには立派な人の名前が並んでいて、きれいだし、ものすごくお金をかけたものだった。受講した後にボランティアをやるのが本命だなんて印象はまったく受けなかったです。何かいいことがあるんだろうなと思って。そこに確か問題があるとは思いませんね。

ヘルパーの養成だったら、褥瘡^{じくそう}のできないような介護の仕方とか、そういうのは実際に立つし需要もあるから、どこかへ就職しようと思ってもできませんよ。で



和田副編集長

もアドバイザーってのはね、どう位置付けられるんでしょうか。カウンセラーになるわけですかねえ。

和田 今企業で定年後の生活設計とか、そういうことの相談に応じたりはしているようです。

鈴木 それは別に専門の資格があるんです。労働省の「退職準備生涯生活設計教育プログラム」というのがあって、資格を持った方が企業にいるわけです。これはボランティアというより企業の一つの仕事で、私たちシニアライフ・アドバイザーがそこへ入り込むことはまず考えられない。

公的施設での余暇開発という相談業務にも、私たちの先輩格である余暇生活相談員が入っていたりするので、私たちが働くときには独自に職場を開拓しなきゃいけないわけです。

そういうものをつくります、という話はシニアルネッサンス財団でもあるんです。例えば「シニアいきいき教室」をつくって、その教室の講師としてみなさんを派遣します、と。でも、いつ、どこにできるかという青写真がない。まったくの白紙状態。

風間 私、地方（山梨県）に住んでいるでしょ。年寄り向けの催しに行ってみるとがっかりすることのほうがいいです。

例えば、一緒にやっているグループの奥さんのご主人が脳梗塞^{脳梗塞}が何かで倒れた。リハビリでやっと動けるようになって、何にもしないで家にいるのはよくないからって、デイ・センターみたいなところへ町内の人が連れていってくれた。帰ってきたら、ものすごく不機嫌になって、一言もしゃべらない。それから町内の催し物に絶対行かないんだそうですよ。どうしておれがあんな下らないところへ行かなきゃならないんだ、っていうわけ。私、分かるような気がした。

年を取っても元気な人なら、もっと高級な何かを得たい、そして得られたらそれを地域に活力をもたらすために役立てたい。そういう夢を持っている老人がたくさんいると思いますね。そういう老人の気持ちを買ってターゲットにした商売だったら、私、許せないうって思います。

鈴木 これは完全に商売ですよ。
司会 いえこれはね、財団だからお金はも

うけちゃいけないんだけど、ともかく厚生省の外郭団体でしょ。こんな仕事をするためにお金を使っているのかと思うと釈然としませんよね。

●アメリカは猫もしやくしもボランティア

司会 ボランティアをすることについて、どう思っていますか？

福田 私はただ、自分にできることで助けをしてあげられたらという感じです。

一番最初にしたのは保育ではなくて、身体障害者の作業所の人たちのバザーの手伝いだったんです。障害者の方たちがほんとうに喜んでくれるんですよね。体全体で喜んでくれて感激しました。あ、ボランティアアってとても自分のためになるな、と。司会 日本ではボランティアというところや奉仕を思い浮かべる人が多いと思うけど、お金につながる活動には社会運動も入るわよね。それもボランティアと言っているのかしら。

和田 むしろ日本人の考え方がへんなんじゃないの。日本で福祉につながるもの



田中編集長

けをボランティアというのは、本来の意味ではないんじゃない？

鈴木 福祉につながる活動は尊敬されるし、社会的にも要求される活動だと思うけど、行政のほうがお金を使わなくて済むでしょ。いつもタダで活動して、それが行政の下請けみたいにきっちり組み込まれているという在り方は、私は考えたほうがいいんじゃないかと思う。

司会 この間スウェーデンについての投稿があったんだけど、スウェーデンはヘルパーさんが非常に高給取りなの。

やっぱり福祉を増進するとしたらヘルパーにせよアドバイザーにせよ、きちっと給料を取っている人が現場に相当数いて、

その人たちが支えていくというシステムを取らないとだめよ。ボランティア頼みじゃなくて。

和田 栄養学の東畑朝子を書いた「アサコ ニューヨークへ飛ぶ」という面白い本があるんですよ。その本を読んで、私、つくづく思った。ボランティアって必ずしも福祉と結びついてないのよ、アメリカでは。

彼女がアメリカへ行くと、まず出てくるのが英語を教えるボランティアなの。何しろ、猫もしやくしもボランティアをやっているのね。

例えば演奏会でボランティアの時間というのがあるわけ。初めの四十分間がボランティアの時間。無料で人を入れるんだって。その後で本物の演奏会が始まる。とにかく、ありとあらゆる分野にタダの時間をみんなが少しずつ持つというやり方なのね。アメリカのボランティアは、日本社会のボランティアともものすごく違っている。

日本の場合は、職業のない主婦、あるいは職業に就きたくない主婦が生きがいをもってやる、という感じが非常に強い。アメ

リカでは一人一カ月に一回とか、ボランティアに費やす時間がごくわずかなの。しかし、猫もしゃくしもやっているから全体としてはものすごい量になる。

●家庭で介護する人間に給料を

鈴木 確かデンマークだったと思うんですが、ヘルパーにすごい高給を払っている。それは娘や奥さんが介護しても他人と同じ給料をくれる。

そしたら、すごく経済効果があったんですね。今までタダで介護をやった人がお給料をもらおう。彼女はそのお金で色んなものを買うわけです。留守のときにヘルパーを頼むお金もそこから支払える。いわゆる

経済効果というのは、大体五倍になるんですね。

司会 だから内需拡大のために減税だなんてバカなこと言わないで、家で介護をしている人たちに給料を払った方がいいのよ。

鈴木 もう一ついいことは、家族が見るようになってから、入院などで環境に適應できなくてボケる老人がほとんどなくなりました。専用の施設を増設しなくて済む。痴呆専用の施設というのは、ものすごくお金がかかるでしょ。介護なんかに。

ボケ老人は少なくなるわ、経済効果はあるわ。私はそういう意味で老人の介護についてはボランティアでタダでやるということについては大反対。

風間 私は「ボケ老人を支える会」の会員

になっているんですけどね、あれ、悲惨です。ボケ老人を抱えている家族は。それでもメゲずに、励まし合ってやっているわけ

でしょ。あの人たちを休養させてあげる時間と、ヘルパーを雇うためのお金を出す制度をつくらないと、若い人たちがだめになっちゃいます。これは何とかしないとイケない。もっと大きな目で見たらね、生産力の問題になってくる。

司会 実は、私の姉がこの間聖路加病院でいとこにバツタリ会ったって言うんですよ。週に一度ボランティアに来ているのよ、って。姉がいたく感心してね、「エライわねえ」って言うの。私は同感でできなかった。

ほかの日の彼女の生活はすごく優雅な

加藤秀一・坂本佳鶴恵
瀬地山 角編

フェミニズム・コレクション

—全3巻—

I 制度と達成 II 性・身体・母性 III 理論

リブ以降の基本文献を
集成。 内容見本呈
各3296円 千380

吉澤夏子

フェミニズムの困難

どうい社会が平等な
社会か イメージ作り
をめざす。 2369円 千310

杉本貴代栄

社会福祉とフェミニズム

アメリカの社会福祉を
フェミニズムの視点か
ら再検討。 2884円 千310

J.L. フランドラン

森田伸子・小林亜子 訳

フランスの家族

アンシャン・レジーム
下の親族・家・性 16〜
19世紀。 3811円 千380

姫岡とし子

近代ドイツの

母性主義フェミニズム

母性を軸にブルジョア
女性運動 健派の軌跡
を追う。 3605円 千380

女性学研究会編

女性学と政治実践

女性学研究 第2号 運
動の理論枠をあげ政策
提言へ。 2575円 千310

* 定価は消費税込みです。



勁草書房

東京都文京区後楽2-23-15
☎3814-6861 (働) 東京5-175253

の。今日は書道、明日はクラフト、明後日は何々とか、まあ大変優雅に暮らしている。

自分は恵まれているから、そのうちの一日をだれかのために、という気持ちは尊いものだろうし、それを全部否定してはいけないだろうと思う。だけど何か割り切れないのよね。

鈴木 やっぱボランティアは負担になったら長続きしない。日本人は、特に女人は義理堅いから、やりたいことも我慢してボランティアをする。そうなると不満になりますよね。やっぱ不満を抱えながらのボランティアは絶対によくはない。

和田 不満を抱えなくてもですね、それが生きがい、自分の一つの仕事みたいになつて、しかも無給であるというのね、やはりマズイって感じが私はするわね。一生それにささげちゃうというのね。やっぱそのボランティアを、利用している連中がいるわけなのよ。

風間 最近、学校のクラブ活動にボランティア部というのができているでしょ。ボランティアとは何かという定義付けさえない

のに、それで個人の考え方を評価されるような動きは嫌ですねえ。

和田 この間の国連ボランティアなんかそうですよ。

鈴木 それは昔の滅私奉公につながっていく危険性がありますよね。

こういう言い方は誤解を生むかもしれないけど、私はボランティアを生きがいにしてほしくないと思うんですよ。あくまで余力で楽しんでやってほしい。月に一回とか二回で、職業を持っていても負担にならないように。

ボランティアを生きがいにする、無償であるためにのめりこみやすいと、他人に対して批判的になってくる。私はこれだけ自分の生活を犠牲にしているのに、あなたのそのやり方は何よって、逆に人間関係がギクシャクしてくるんですね。

司会 それと暇な主婦だけがやっている、ということではなくて、職業を持っている男性もやる、というふうにならないとね。

(まとめ・宮前 和)

(次回の座談会のお知らせは、一四一ページをこらんください)

各地で文章講座を

東京とその周辺で、これまでしばしば「わいふ」文章講座が開かれました。編集長田中、副編集長和田が講師で、公民館の主催です。

東京以外の各地でも、おそらく要望があるのではないかと思いますので、読者がお住まいの地域の公民館に申し入れてくださるよう、お願いいたします。

一回の講義ですが、どうすれば素人の文章の持つ力を引き出せるかを中心に、初心者のためにわかりやすい添削の実例も取り上げて指導いたします。くわしくはハガキまたは電話で編集部にお問い合わせください。要旨を書いたものをお送りしますので、それを見せて公民館にお申し入れいただくと思います。



平成
おたまたげーション

⑩

「マイティン郡の橋」

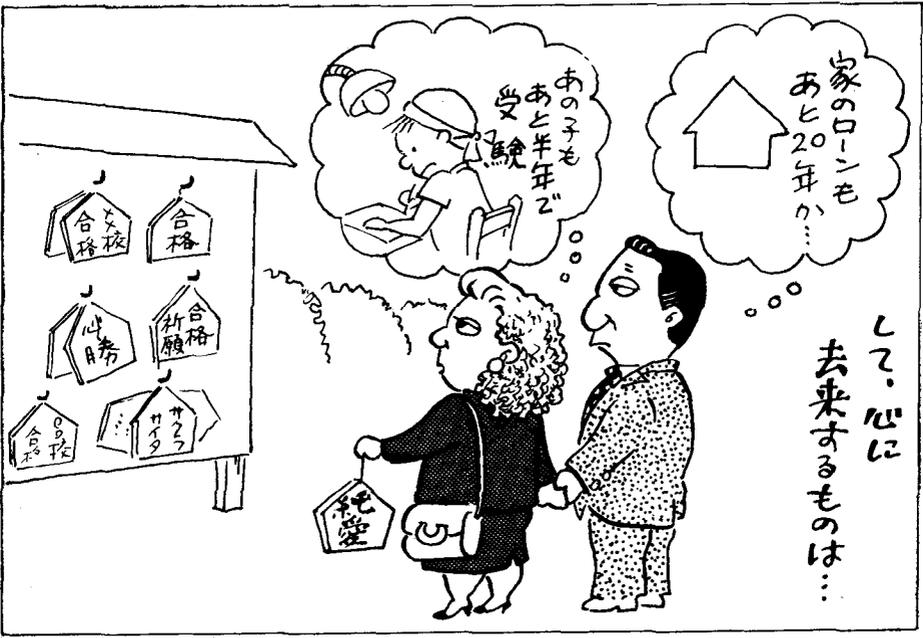
中年の純愛

日本上陸

西田淑子



愛の重さ



して、心に
去来するものは...

私の愛する

外国人

ジヨリベ・ミュリエル

故郷に帰ってしばらくの間家族と過ごした後、日本に戻ってきて夫と暮らし始めるたびに、心からほっとする。家族は私にとってしんどい。夫といるとくつろぐ……。

私と実家の家族とは、色んな意味で次元が違いすぎる。私が特殊すぎるのか、それとも実家の人々が特殊なのか、夫が特殊なのか分からないけれど。

それは運命だった

日本人と結婚しようなどは、夢にも思っていないかった。しかしそれは、多分私の

「運命」だったのだ。

エチオピアにいたとき、最初にそのことを予言された。私は十九歳だったが、ある日アメリカで一時すくくはやっていた「ウイジャ」（日本のこっくりさんのようなもの——訳者注）の遊びをやったのである。

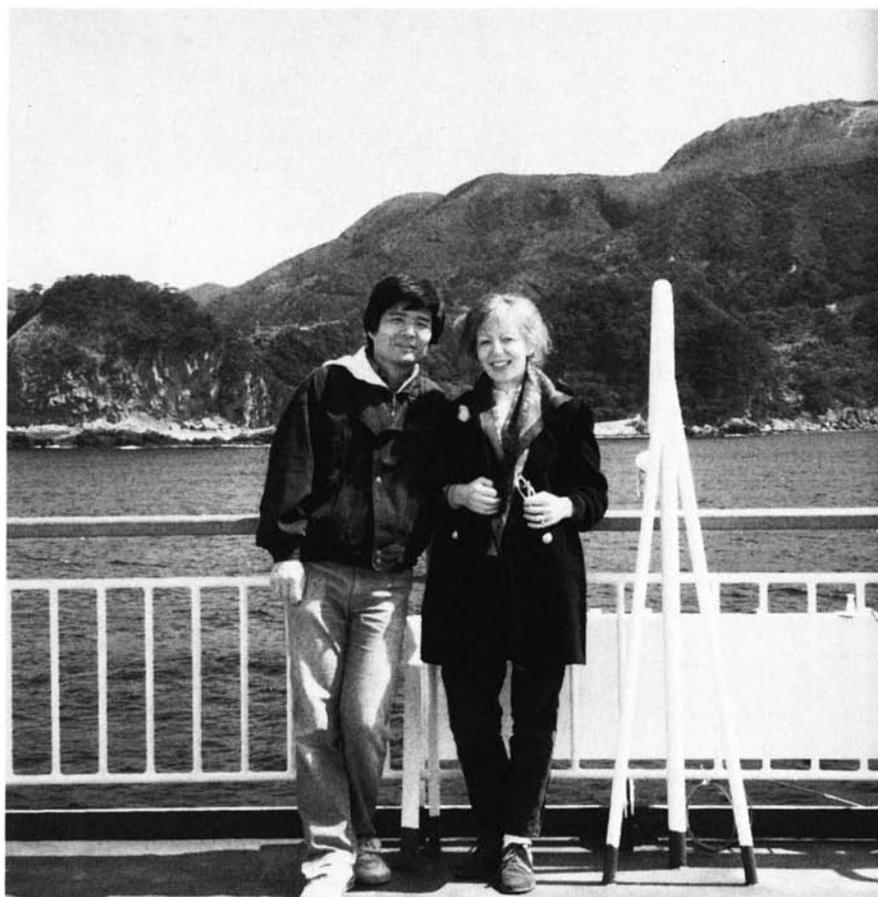
今でもはっきり覚えているが、その「ウイジャ」の「霊」がなんと、「あなたは二十五、六歳で日本の男と結婚する」と予言したのだ。

もっと奇妙なことがある。一九七七年のある日、パリの地下鉄から降りようとした

とき、一人の日本女性がいきなり私の腕をつかまえて——私はとっさには彼女の名前を思い出せなかった——「ほら言ったでしょ、思い出してよ。私の言ったとおりになったでしょ」と言ったのである。

私は乗り物に乗っているときは、いつもぼうっとしていたのだが、地下鉄が行ってしまうと急に、眠りから覚めたように彼女のことを思い出した。

それは七、八年前パリの東部のサン・マンドの女子学生の寮で知り合って、その後音信不通になっていたしな子という娘だっ



た。しな子は手の筋でなくて、顔の筋（しわと言うべきか）で運命判断をするのだ。た（こんな占いの方法は、その後どこでも聞いたことはない）。

当時私は、バカロレアが受かるかどうか、すごく気になっていたもので、彼女に自分の運命を占ってもらった。そうしたらなんと、彼女は私のことを「日本人の男と結婚して故郷を離れ、そこで仕事を持って永住する」と予言したのである。

しな子が地下鉄で私に声をかけたのは、私が三年間の東京での勉学の後、修士論文を書き上げ、単位の残りを取るために、半年の予定でパリに戻っていた時期だった。私の指には、日本の男性からもらった婚約指輪がはまっていた……。

そのときまで私は、不思議なことに、彼女の予言をきれいさっぱり忘れていたのである。

運命。ほんとに何という運命だろう！

日本で夫と知り合う前、ラッシュアワーの気が遠くなるほどのサラリーマンの波をながめながら、この黒い頭の一つが、私にとってかけがえのないものになるなんてこ



とがあるのかしら?と考えることもあった。しかし私は、まさかそんなことが、とその考えを振り捨ててしまおうのだった。

出会い

私が自分の伴侶たるべき「彼」に出会ったのは、パリにもどる数カ月前、私の作成した意識調査を東大で学生に配るとき、彼が手伝ってくれたからである。

初対面の印象があまり強烈だったので、

この人から逃げられそうもない、と私は本能的に感じた。

しかし時期が悪かった。東京での三年間で、勉強の区切りが付き、私はパリにたうとしていた。恋愛どころではなかった。

私の心は千々に乱れた。

しかし彼が私に与えた印象はあまりにも強かったので、彼を忘れることは到底できないだろう、と思わずにはいられなかった。

出発の前日、私の指にダイヤの指輪をはめてくれながら、彼は「これは君を束縛するものではないんだよ。もし僕たちの仲が実らなくても、二人が愛し合った日の思い出としてくれればいいからね」と優しく言った。しかしそれまでの二人の愛を、互いの腕の中に過ごした時間を封じ込めているかのようなこの指輪は、やはり私の心には重かった。

日本で暮らすといふこと

帰国してから私は、頭のくらくらするような気持ちで過ごした。日本で暮らすのはつらい、ということがよく分かっていたからである。これがフランスだったら……あるいはどこか、ほかの国だったら……もつとずっと楽だったろうに。

決断を下すのはほんとうに難しかった。私の生活はめちゃくちゃになるだろう。実際、怖くてたまらなかった。

自分の行きたいとき、日本に行くのならいい。でも何が何でも日本に住み続けなければならぬ、となると……。勉強しに行くのならいい、しかし故国から離れてそこ

に「住む」となると……。

自分の国に在るのではなく、ほかの国の習慣に適應しなければならぬとなれば、私の人格の一部は完全に押しつぶされてしまおう。

突然日本の、あらゆる悪い面ばかりが目につくようになってきた。公害のひどさ、人間の大量（私は広場恐怖症なのだ）、人種差別のひどさ（日本人はなんとジロジロ「ガイジン」——この言葉もひどいものだ——を見詰めることか！）。

行くべき道を指し示してくれる守護の天使が天から下ってほしい、と求めるような気持ちだった。

どんなつらいことが待ち構えているかも、よく分かっていて。日本から帰ってきたイラン人の学生が言ったことも忘れられない。

「女が日本語を勉強するなんて、バカだよ！ 日本は完全に、男社会なんだ。女は関係ないよ」

私はまた、どこかで「日本の女のランクは世界で二番目だが（一番目はフランス人らしい）、男性のそれは三十番目、ほとんど

最下位に近いランクだ」と言われていたことも思い出した。

そのうえ国際結婚がフランスでも、日本でも受ける差別的な扱いときたら！ 日本の女がフランスの男と結婚するならまだいいのだ。しかしその逆だと、その女性は、「売れ残り」とか、「ブス」だとか、「太りすぎ」などで、ほかに結婚する相手がいないような目で見られるのである。

日本の男と結婚した知人のフランス女性は、同僚から徹底的に、ほかの男と結婚する可能性がなかったのかどうかと問い詰められた、と言っていた。

こんな状況が一般的だったのである。あるフランス人の男性が、日本人の妻であるフランス女性にこう言ったという話もあった。

「君が日本人と結婚しているなんて、信じられないよ。だって日本人の妻になった女はみんな、すごいブスなんだから」

そのうまいわゆるコロニー・フランセーズ——日本に在る大使館や企業のフランス人たちが、日本人のフランス人妻に背を向けていることも確かなのだ。軽べつし

ているのか、しゃくにさわっているのか分からないが、ともかく差別は厳然としてある。

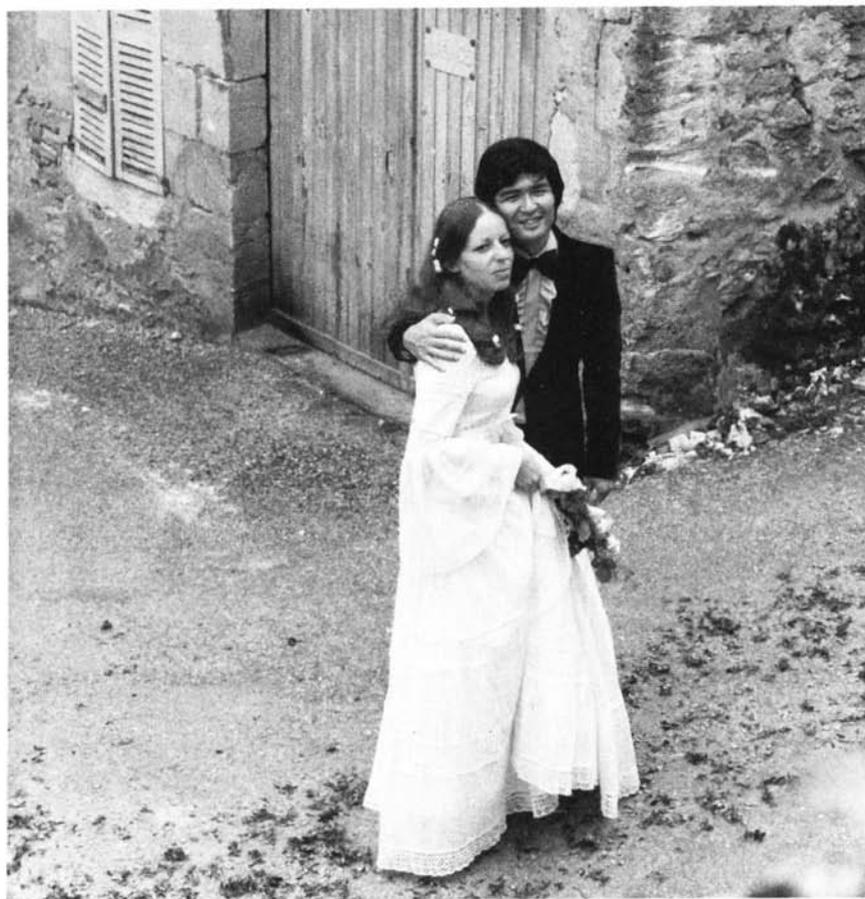
彼らが抱いている日本人サラリーマンのイメージといったらひどいものだ。そして実際、夜九時ごろに電車に乗ったら、そのイメージどおり、酒臭い男たちばかり。

毎晩酔っ払って帰ってくる日本のサラリーマンとの結婚なんて、あり得ない。

しかし、フランス人男性が理想的な夫かというところではない。彼らは女を追いかけたり、口説いたりするのはうまい。しかし愛人としてはいいかもしれない。が、家庭を築く相手としては、考えものだ。

日本にやってくるフランス人のカップルは、大抵夫のほうが若い日本女性と恋仲になって、夫婦仲がうまくいなくなってしまう（ほかの国では、若い女が中年のフランス人を相手にするなどということはほとんどない。日本にはまだフランス崇拜があるのだろうか？）。結婚というものが、これほど「RISKY BUSINESS」になってしまった時代はないだろう。

奇妙なことだが、二十二歳で日本語の勉



強の仕上げに日本にやってくる前に、私はドミニックという医学部の学生と猛烈な恋に落ちていた。しかしその恋も、日本に行く気持ちにブレイキをかけはしなかった。結婚の約束をしたわけでもなく、ドミニックが私の日本行きをあきらめさせようとしたこともなかった。

しかし二年経って、彼の結婚通知を受け取ったとき―それを喜ぶ気持ちには到底なれなかった。

再び彼に会おうとは思わない。彼は成功して、三人の子供がいる。それが分かっていたら十分だ。

しかしル・モンドに私の書いたものが出るたびに、カルティエ・ラタンでのデートにいつもこの新聞を小わきに抱えてやってくる彼が、下のほうにある「日本通信」の欄に出ている私の名前に気が付いてくれるかしら、と考えてしまう。

まあ、そんなことはどうでもいい。なぜなら私は、心の底で、私が日本に向けて旅立ったのは、「医者妻」になるという、自分にとっては息の詰まりそうな運命から逃げ出したのだということを知っているから

である。

私の同級生の一人は、十六のときから中国語を習っているのに、恋人と一緒にいるために中国にも行かず、ろくろく中国語の会話もできず、中国人の友人もない。

私はかれこれ二十年前から彼女を知っていて、毎年メゾン・ラフィットの彼女の小さいいなアパートで会うけれど、ちっともうらやましいと感じない。彼女は彼女で私を「異常な人」「冒険家」と考えている。アジア人となんか結婚したからだ。

私のほうでは彼女の「きちんとした生活」が我慢できない。芝居の書き割りのようなあんな生活はまっぴら。

結局私は多分、フランス人と結婚するようには生まれていなかったのだろう。平凡すぎる生活には向いていないのだ。きつと死ぬほど退屈してしまったことだろう。

夫に出会うまで、私が結婚にあこがれることは一度もなかった。結婚でなく、同棲のほうがいい、というのとも違う。私の両親の離婚のごたごたが、結婚なんかうんざり、という気持ちを私に植え付けてしまったのである。それに彼らの再婚騒ぎにはま

すますうんざりだった。「結婚なんか、問題にならないわ!」と私は考えていたのである。

愛と暮らして

夫との恋愛は紛れもなく、私にとってこの世で最高のものである。

私たちは互いに、直接に、強く引き付けられた。肉体も、心も、精神も。

彼が最初に私の手を取った日、私は文字どおりしびれるような力がその手から伝わってくるのを感じ、身動き一つできなかった。

二人とも、経験のない人には到底理解し難い家族のしがらみを引きずっていたし、二人とも、研究が生きがいだった(一九八五年に、私たちはそれぞれ最初の業績を出版した)。

しかし結婚生活のスタートは容易ではなかった。奇妙なことだが、このとき私は、自分自身の家族からの分離と独立という心理的に困難な時期を通り抜けていたのである。

結婚について、私の家族は反対はしな

った。私も家族の意見など、求めようとはしなかったけれど。

私はアメリカ人のいう「いい子ちゃん症候群」の女の子だった。いつも素直で、優しく、丁寧でお行儀がいい、いい子。それが私だったのである。

結婚後、そのストレスが噴き出してきて、圧力釜の蒸気が安全弁を持ち上げて、今にも爆発しそうになる自分を感じていた。

当時よく見ていた悪夢を今でも思い出す。汗びっしょりで、泣きながら目が覚める。母と姉の顔が浮かんでいる。母は姉ばかりかわいがっていた。その不公平と、彼女たちと気持ちを通じさせることができない、という絶望的な、胸の張り裂けるような苦しみ……夢に出てくるのはそればかり。結婚後間もなく母がやってきたことも、事態に拍車をかけた。「結婚当初に、あんなたちのじゃまをしたりはしないよ」と意気揚々と宣言していたのに、母はやってきた。

一人暮らしだったら、母の来訪もうれしかっただろう。しかし結婚したばかりで、

ようやく日々の暮らしの安定を保っている
というのに……。

カルチユア・ギャツプを 乗り越えて

結婚生活の最初の困難は、二人の生活から他人を追い出すことにあった。

結婚前の私のアパートは、いつも友達で一杯だった。さもないければ、電話でのおしゃべり。ところが夫は、私が「自閉症」とあだ名を付けたとおり、お客や電話が大嫌いなのだ。フランス人との長電話には特に、アレルギー反応を示す。内容のない無駄話に、なんでそんなに時間を割けるのか分からない、というわけだ。

口に出しては何にも言わないが、友達を呼ぶと不機嫌になり、いらいらしてだんだん暗くなってくる。私は友達を呼ぶのをやめにし、長電話も追放することにした。幸いなことに、研究のためにはそのほうが確かにいいのである。

そのうえ新婚の蜜月の間、二人で外出することは、最大の喜びの一つと思っていたのに、その当では完全に外れた。

日本人は互いに招き合わないだけでなく、招くときは別々なのだ。これにはほんとうにがっかりきた。

日本人の友達も、私が「奥様」になってからは一人また一人と身を引いていき、家の中が上がってこない。いつも玄関での立



ち話。同じマンションに住んでいる人の部屋の中に入ったこともない。

夫婦のうち、文化的土壌の違う国に住む側が、カルチャー・ギャップの苦しみをより多く味わうのは当然である。しかしそれは、一方向的なものでなく、双方向のものでもある。

私が苦しんだように、夫も苦しんだに違いない。そして夫の苦しみは、私の苦しみとは反対方向だった。

彼の苦情は、私が常に自分の考えや行動を言葉化し、分析し、分類し説明しなければならぬということだった。

彼はとうとう、「タンマ」の時間をこしらえようと言い出した。彼がしゃべりたくないときは、何も言わないで済むように、自

分が話したい、と思うまでは黙っている時間を認めてほしい、というわけである。

私は私の家族の中では無口だし、静かな人間だった。いつもしゃべっていて、うるさかった私の家族。その私が今度は彼にはうるさいと思われている。

静かな日本人と、おしゃべりであるさく、情熱的なラテン系の民族の差は実に大きい。

私はまだ、「沈黙のながれ」の信者に改宗するほどにはなっていないけれど、夕食の後、家族でしゃべり続けていなければならぬ、無駄で上滑りな時間から解放されたことはよかったと思う。

結婚して十六年が経った。夫よりも私の心を和ませてくれる人、心の結ばれている

人はほかにはいない。フェミニストと結婚するつもりがなかった彼ではあるが、いつも私が仕事をし、ものを書くことを勧めてくれ、その環境をつくるように気を配ってくれている。こんな男は日本人にだけなく、フランスにもそうはいない。

彼は君の考えはよく分かっているから、と言って私の書いたものを読んでくれようとはしない。新しい考えを知ろうとしないこともあるけれど、私のしたがることをじやましたことはない。

互いの尊敬が私たち二人を結びつけており、それこそが二人を結ぶ最良のきずなだ、と私は信じている。

(訳・田中喜美子)
(写真提供・筆者)

考え学びあう母親たちの情報ネットワーク



午後の紅茶

A 5判58頁 / 580円
年6回隔月20日刊行

8月号内容

特集 ● 「私」のからだ

十月号予定

- 「私」のからだは「私」そのもの……芦野由利子
- どう付きあえばいいの「私」のからだ……大沢辰治
- 私のヨーガ健康法……友永淳子
- 「性」だけあなたは知っていますか
- 「私」のこと・夫のこと・夫婦のセクシュアリティ
- 一緒に考えてみませんか?

※本誌の定期購読中。年間購読料三、四八〇円を下記編集部まで現金書留か郵便振替で送付下さい。送料無料でお届けします。

(有) オアシスハウス
〒167 杉並区上井草3-17-3
TEL 3396-8589 FAX 3396-8459
振替：東京 3-713664



高崎線沿線の方、 ご連絡を!

前々から高崎線沿線にお住まいの方々と、定期的な話し合える機会があったらと考えていました。

私、三十歳から七年近く勤めた会社を八月で辞めました。これから先も働くつもりですが、一年間くらい充電してもいいかなと思っています。

自分の考えに凝り固まってカチン、カチンになっているのではないかと。もっと違う見方や考え方があっていいか。刺激し合えればいいなと思っています。

ます。ご連絡をお待ちしています。

〒363 埼玉県桶川市上日出谷一
九四一四四 梶原初枝

☎〇四八七七八六―四四五六

お手紙ください

四月に三十八歳になった専業主婦です。子供は小六、小三の女児、八月に二歳になった男児の三人。

身軽ではないので、主に手紙による友達を探しています。必ず返事を書きますので、お手紙ください。待っています。

〒660 兵庫県尼崎市西難波町二

三一―八 柴田久美子

主婦のためのビジネススクール アイムパーソナルカレッジ モニター生募集

仕事をしたい主婦の学校アイムパーソナルカレッジが、四カ月の間のプレコース(自分発見講

座)に無料で参加できるモニター受講生を募集します。

▼場所 目白または乃木坂教室

▼期間 平成五年一月初めから平成六年三月初めまで

▼日時 毎週月曜か木曜の一回
一〇時―一三時

▼応募方法へ二次審査へ
モニターに応募したかをテーマにレポートを提出。様式、枚数は自由。一〇月一五日消印有効。

△二次審査 一次合格通知後、簡単な面接を行います。

▼問い合わせ・応募先 〒107 東京都港区赤坂九一六―三〇―一

〇五 アイムパーソナルカレッジ
☎〇三―一五四二―一五四六四

同じタイプの母娘関係 の方お便りください

前号まで連載していた「翔んでる娘・追いつがる親」を書いた伊藤琴子です。私は社会学の研究者ですが、研究のために私

の母と同じようなタイプの母親を持った方の、母娘関係を知りたいのです。ご体験をぜひお知らせください。

航空便でお願いします。いただいた方には心ばかりですが、粗品を差し上げたいと思います。

Ms. Kinoko Ito

1400 Old Forge # 2301

Little Rock AR 72207

U.S.A.

ベビーシッター求めます

週二回(水、金)の三時半、飯田橋に近いリセ(フランス学校)から埼京線浮間舟渡の自宅まで、一年生の子を連れて帰ってくれる方を求めています。

月二回は夜までいて簡単な家事をしてくださると助かります。時給千円プラス交通費。

お気持ちのある方は「わいふまで」ご連絡を。 ジョリベ・M

シニアメイト・ファ
ッションショーのお
誘い一六〇代から生き生
きと美しく！

お茶とお菓子と「ファッショ
ンショー」で、おしゃれな午後を楽
しみませんか。

「こんな服が欲しい」というシ
ニアの声から生まれた、シニア
と主婦スタッフの共同企画によ
る手づくりのショーです。

作品は、シニアが着やすく、
気持ちが悪くならないような機
能的で、随所に工夫を凝らした
人に優しいものばかりです。

▼日時 一〇月一六日(土) 午
後一時三〇分～四時三〇分

▼場所 池袋サンシャイン60、
プリンスホテル五九階桜の間

▼入場料 二千円(飲み物付き)

▼後援 サンケイリビング新聞

▼定員制につき、あらかじめチ
ケットをお求めください。

▼申し込み・問い合わせ先 〒114
北区浮間四一二六二二一〇三
☎&FAX〇三―三九六五―五四一
四 林不二子

グループ「きもの」の 出張着付け教室

個人指導(生徒二名に対し、
講師一名)なので短時間で、し
かも安い費用で着付けの実力が
つきます。指導員は元着物学校
講師三名、着付けプロ資格者二
名(英語での指導も可)。

目的、実力に応じてプログラ
ムを作成します。

初級Ⅰ自分で小紋に名古屋帯を
締める(器用な人なら留袖に二
重太鼓も)。

中級Ⅰ他人に着せる(成人式に
母親が振袖を着せることを目標)。

場所をご用意ください。二名以
上でお申し込みください。

☎〇四五―三八一―一五一四
夜八時～九時まで 秦 節子

時間 レッスン三時間を五回
費用 一人につき三万円(交通
費別)

主婦の英語学校 ルナ・カレッジ 十月生募集

通訳・翻訳者青山静子編著

「主婦達の英語奮戦記」のメン
バーが実践した勉強法で一緒に
勉強しませんか。

▼ルナ・カレッジ東京校(千代
田区神田岩本町岩本町会議室)

初級(水) 中級(月)

上級(月) 通訳(土)

▼横浜校(横浜市緑区荏田北コ
ミュニティホールアクト)

中級Ⅰ(金) 中級Ⅱ(水)
上級(火)

▼問い合わせ 本部(名古屋)
☎〇五二―七六二―一六〇三五、

東京校☎〇三―三七二―七七八〇
一三(木曜日一〇時～一六時)

加藤まで。

「おっぱいとアトピー が教えてくれた」

昨年「わいふ」から自費出版
した「おっぱい子育て、アト
ピーの子とともに」を読んでき
だされた方々、ありがとうございます
でした。長いお手紙やお電話
でご感想をいただいたり、色々
な方の経験や考えを知ることが
できました。

その「おっぱい子育て……」
の基になった日記とその後の自
分なりの考えを書きまとめ、八
月やき出版からブックレット
を出していただきました。読ん
でください。 上谷亜育

「おっぱいとアトピーが教えて
くれた」けやき出版 五〇〇円
☎〇四二―五二―五九九〇九





著者 エルクェン・ヴォルト・グエルト・オル
子 小原いせ

現代の「女性の自立」や「男女共生」という言葉がヤワな響きに聞こえ、ブツ飛んでしまいそうなマリイ・キュリーの一生だった。

早くから自活し、勉学に励み、高等教育機関の指導者、二度の

ノーベル賞と数々の叙勲、二人の娘の母親（娘夫妻もノーベル賞！）でもあり、多くの優秀な弟子たちを育てた。

キュリー夫妻は常に共同研究者であり（一方が助手ではない）全き信頼関係にあり、価値観を

共有し、榮譽も二人のものである。百年前という時代を考えると、ピエール・キュリーという男性にも感嘆する。少女時代にだれもが読んだ伝記、今読むと、また違うものが見えてくる。

恒文社 二二〇〇円（安）



著者 保世太田

お医者さんの書いたエッセイ集である。テーマは生・死・老い。ぼけ、その周辺の人間模様さまざま。

お医者さんのエッセイは大抵面白い。職業がら人生の機微に触れる場合が多いからだろう。医学的な視点から見た人間像も、

素人には新鮮である。

著者は東海大の医学部教授で呼吸器病が専門のようだ。しかし老いに関して強い関心を持ち、老いとは何か、ぼけとは何かについて、ユニークな診断をしている。

アルツハイマーなどの病気で

なくとも、思考が柔軟性を失ったとき人はぼける。長寿社会を医学の進歩が作り出した今、六十代で引退したら危ない。のんきに送る余生など十年くらいが限度で、二、三十年もやったらぼけるだけ、とは説得力がある。東海大学出版会 二二六六円（和）



著者 こそつえのい

人々の心のすきまをねらって、金もうけに走っている新興宗教。それに引っ掛かる（信者として支える）のが女性と若者である。特に全体の七七八割を主婦が占めている。なぜ、主婦がこれほどまでに新興宗教に引かれ、

簡単に信者になるのだろうか？ 核家族化などで人間関係が結びにくく、孤独で「何かにすがりたい」と思いに走る現代。女性の生き方が多様化し、自立が叫ばれながら、どう生きたらいいのか思い悩む人も多い現実が

見えてくる。

霊視商法の「本覚寺」や「統一協会」「幸福の科学」などの実態が紹介されており、一気に最後まで読ませてしまう内容を持っている。

新評論 二〇六〇円（花）

半分のふるさと

私が日本にいたときのこと



イ サンクム 著

現代日本人が目を背けてはならない問題のうちの一つは、戦前日本が朝鮮半島を植民地としたことだろう。

筆者は在日朝鮮人二世として広島に生まれ、十五歳で終戦を迎えるまで日本で過ごした。決

して幸せとも、裕福とも言えない生活ながら、子供時代の様々な思い出が生き生きと描かれている。

特に、数奇な運命を背負いながらどんなときにも民族の自尊心を失わず、常に朝鮮人としての誇りを持っていたという筆者

の母が印象的だった。

大人だけでなく、本の中の筆者と同年代の小学生や中学生にもぜひ読んでもらいたい、韓国と日本の間で起こったことを、素直に受け止めてもらえればと思う。

福音館書店 一七〇〇円(三)

看護婦の現場から

講談社現代新書



向井承子 著

看護婦不足が社会問題化したのは二十年前。その後何の対策も講じられず、3Kはおろか8Kと言われる看護婦は今ではキツイ仕事の代名詞のようだ。

著者は体験を通して感じた医療や看護婦への疑問から、患者にとって、看護婦にとってよい

看護とは何かを探っている。

その答えを導きだすために、患者が人間の尊厳を失うことなく治療を受けられる医療を目指し、孤軍奮闘している看護婦たちを紹介している。しかし彼女たちが患者のためにどれだけ手をかけても、薬を出さなければ病

院の収入にはならないのが現状。

このような日本の医療制度の抱える矛盾が本書では次々に明らかにされている。

九十歳の母親を介護しながら、執筆活動を続けてきた著者の洞察は鋭く、かつ説得力がある。

講談社 六〇〇円(歌)

間違いだらけのリサイクル



伊藤吉徳 著

リサイクルがブームになっていく今日。牛乳パックは買った時点で、森林破壊になっているという私たちが見過ごしている事実や問題点を、優しく軟らかな口調で述べています。

ゴミ焼却場からダイオキシン

がつくられることなどを挙げながら、ゴミ問題は大気汚染の問題であり、私たちの健康に直結していることを訴え、「健康」で「幸せ」に生きるために、リサイクルの重要性を訴えています。

読み進むにつれて、社会の仕

組みそのものに疑問がわき、問題の大きさにため息が出ますが、最後に、リサイクルに成功した例としてスウェーデンを取り上げ、「いい環境」への方向を指し示してくれます。

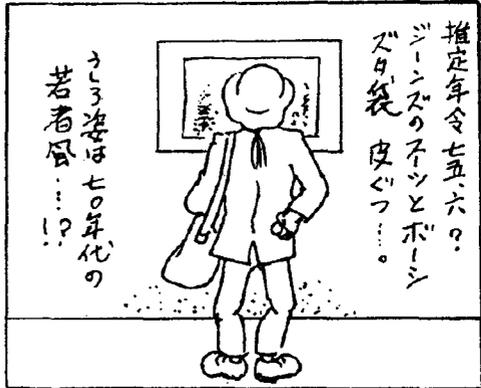
日本経済通信社 一四〇〇円

痛快！ 敵

栗田 ^{いんた} ^み ^た

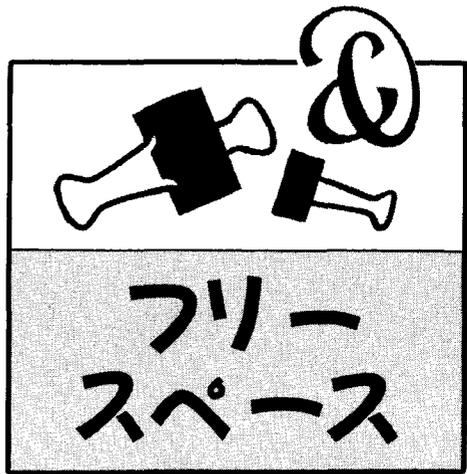
第17号











当たり前前の幸せが ほしい

匿名

世の中の幸福の絶対量は決まっています、神様の気まぐれで配分されていてしまっているのではないかと思う。

よく、物事を不幸な方向に考えすぎるから不幸になってゆくのだ、と、言い切る人

がいるが、その人はよほど幸運に恵まれているか、人並み外れたたくましい心の持ち主に違いない。

控え目に見ても、私のこれまでの人生は、不幸の重なりと言えような気がする。

私は乳幼児のころ、病気で生死の境を何度かさまた。一度などは、医者が「臨床です」と言った直後に、かすかに息を吹き返したほど、私はこの世に執着したらしい。どうしてこのとき、死の痛みも苦しみもよく分らないうちに、死んでしまわなかったのかと、思い続けることになるの……。

一昔前の三文ドラマのような家庭で育った。飲んだくれで、働かない父親。お決まりの暴力。母や姉と雪の中をはだして逃げ回ったこともあった。生計は和裁ができる母の収入によって立てられた。が、小学生のころから学用品の購入は、自分で封筒張りの内職で得たお金で賄った。当時大流行したリカちゃん人形もジェニーちゃんも、私には無縁のものだった。

「まじめに生きていれば、必ずいいことがあるよ」それが母の口癖だった。貧しいか

らこそ、人に後ろ指さされるようなことは絶対しない。人にばかにされることのないように、正直に生きていくことを考えていた。

高校三年生の夏、父が家中のお金を持ってままた失踪してしまった。アルバイトをしながら大学へ通うつもりでいた私は、就職をして姉とともに、家計を助けていかねばならなくなったのだ。

私よりはるかに成績が下位の人たちが受験勉強に没頭するのを、苦々しい思いで見詰めていた。

一応名のある企業に就職し、弟が社会人になるまでの数年間、給与の大半を家に入れていた私のささやかな望みは、「サザエさん」のような家庭を持つことだった。縁あって（今思えばないほうがよかったが）同じ職場の人と結婚し、「ああ、これで人を支える生活ではなく、支えられる暮らしができる」と思った。しかし、今度は夫と違った男の浪費癖に苦しむことになった。

「当家の嫁は、本来ならきちんとした家庭の娘さんでなければならぬのに」と、姑、義姉たちから言われ続けた私は、自分の存



在が夫の立場を悪くしてしまっているのではないかと考え、夫の素行にあまり強く言うことができない人間になってしまった。

ブランドの洋服、A V機器、コンサートチケットなどなど、カードで次々に購入する夫の付けを、泣きつかれるたびに独身時代の預金を解約して払い続けた。「別れよう」とも思ったが、「私は苦勞したけれど、娘は幸せな結婚をしてる」と信じて疑わぬい母を、裏切ることができないような気がした。

二人目の子供が生まれてから、夫は浪費に文句をつけるようになった私が気に入らないらしく、知らないうちに、カード会社からの明細を自分の実家に郵送してもらおうようにしてしまった。請求書は来ないし、

派手な買物をしなくなった夫に安心していた私の心は、一本の督促の電話で見事破られた。

「もうキャッシングやカードローンは使用していないと言ったじゃない」と問い詰めると、大声で泣きながら当たり散らし、子供を泣かせるばかな男。夫の書類かばんをこっそりのぞけば、出てくる出てくるクレジットカードの明細書、家族名義で限度一杯借りているカードローンの明細書まで……その総額は五百万円以上。結局、その借金もとで、会社を辞めざるを得なくなってしまったのだ。

「お前が悪い。もっとおれを強くしかってくれないからだ」と泣くばかりの夫。「あんたがしっかりしていないから」と怒る義父母。

一からやり直すという夫の言葉と、「お父さんと離れたくない」という娘の願いで、悩んだ末、夫の地元で暮らすことを決心した私だが、こちらでまた脳天をぶち抜かれるような話を親族の人から聞かされた。

夫は独身時代から、何度も金銭問題を起

こし、そのたびに義父母が内密に処理していたというのだ。また、結婚するときに借金の返済用に親からもらったお金をさっさとほかのことに使ってしまった、残った借金はそのまま結婚後の生活費を圧迫していたのだと。

根っからお金にだらしがない人間であったのだーそう思うと怒りで頭が痛くなった。自分の父親が幾つになっても全然変わらなかったことから、人間がそうそう改心できるものではないことを知っている。

離婚を真剣に考え始めた今は、夫と同じ部屋で眠ることにすら、嫌悪を通り越して、吐き気を感じる。

五体満足であるだけで十分幸せではないかーそういう人もいる。けれど、散々男遊びをして、高給取りの男と親掛かりの盛大な式をあげ、都内のマンションで優雅に暮らす友人もいる。私には当たり前の幸せもない。他人に嫉妬してしまふのは醜いことだと分かっているが、前向きに生きる強さを、必死に自分の中に探している私には、ついついほかの人がうらやましく思えてならない。

言葉とは

高知県高知市 ● 山中宮枝

診療所の待合室で数人のお年寄りがにぎやかに話し込んでいた。彼女らはいずれも七十歳以上と思われるおばあさんたちである。この人らは命にかかわるような病気でないことを承知しているので、だれも深刻な顔などはしていない。やれ足が痛い、腰が痛い、血圧がどうのこうのといった具合だから、ここを年寄りのサロンとでも考えているらしい。

私は隅っこのにすに腰掛けて聞くとともに耳を傾けていた。

「わたしやあね、赤の他人からおばあさんと呼ばれると腹が立つがよね」

「そうそう、わたしもよね、何ちゃあ知らん人におばあさんと呼ばれるわけはないぞね」

「ほんと、ほんと」

じっと聞いていると面白いが、そればかりでは済まされない真剣さが潜んでいるこ

とに気が付いて、私はなおも耳を澄ます。話は続く。

「孫におばあちゃんと呼ばれるがは当たり前ぞね、じゃが子供じゃちよその子におばあちゃんと言われたらうれしくないぞね」

「孫からはおばあちゃんよね、そりゃあ順当じゃ」

「それなのに、わたしらとそう年の違わん人におばあさんと声かけられたら実際ぞっとするぞね、「わたしやあ、あんたのような孫は持つちゃあおらんがね」と言いたいところよ」

「いちいちおばあさんと呼ばいでもの、わたしらにもちゃんと名字も名前もあるがぞね」



「じゃあ、知り合いいいがか、名前も知らん他人じゃったらどう呼ばあいいかね」

ハハハ……一声高く笑いが跳ね上がった、

「そんなときにゃ、おばさんよ、おばあさんと言わずにおばさんよ」

「おばあさんとおばさんとじゃあ大分感じが違うわよ。十ばあ若う聞けるけん」

「まっことじゃあ、五十代の人じゃちおばさんで通るけん」

聞いていて私はなるほどと思った。おばあさんとおばさんとはこうも受け取り方が違うものかと思った。たった一文字あという字を抜けばよいのである。

私はいいことを知ったと喜んだ。これからはこの手を使おうと思う。事のついでに私はまたこういうことを考えた。

それは嫁と姑との場合はどうであろうか。孫がおばあちゃんと呼ぶのは当然として嫁はどうであろう。嫁が孫と一緒にではおかしいことである。だが大抵の家ではちょっとおばあちゃん式で、いとも気安くそしてさりげなくまかり通っているように思われるのだが。

孫はかわいければ嫁はこれが問題である。へソ曲がりなお姑さんならば、「わたしあ、あんたのおばあちゃんではない」と、あの診療所のお年寄りと同じせりふを投げかけられるかもしれない。

これは事実祖母ではなく姑である。それについて私は少し後悔していることがある。若さのせいか気が付かなかったが、姑が在命中子供と一緒におばあちゃんであった。少しも違和感といったものはなく、親しみのこもった言葉だとさえ思っていた。姑はどんな気持ちで受け取っていたか知らないが、嫌な顔はしなかった。

主人の母にはおばあちゃんと呼んでいた私が、実家の母には五十歳になった今でもお母さんである。妹も弟もその嫁もお母さんである。このことに気が付いたとき、私はあつと思つた。もうずっと前のことである。主人の母にはまことにすまないことであつたが、急に変わる気にもならず死ぬまでおばあちゃんを通つた。

さて私、孫があるのに嫁はお母さんと言つてくれる。くすぐったいようだがうれしく受けている。私は何にも注文はしていないし、どうせ孫が生まれたらおばあちゃんなのだからどっちでもいいと思つていた。けれどもお母さんのほうが何となく若い気持ちになるのはなぜだろうか、それが言葉の魔力というものかもしれない。

考えてみれば言葉とは不思議なものである。こちらは何とも思つていなくてもむしろ親愛の情を込めたつもりでも、相手を傷つけていることが多々ある。何げなく出た言葉にもとげがあることに気付く。

好かれる人になるため、私はおそまきながら言葉遣いについて勉強しようと思つた。今更と思つけれど、人生八十年というからには決して遅いとは言えない。

それぞれの「遠野物語」

東京都世田谷区●福地園子

「むがず、あつたずもな……」(昔々のお話です……、の意)で始まる民話の数々。語り部の淡々とした口調とは裏腹に、何ともおどろおどろしい話の内容。柳田国男の

「遠野物語」で知られる民話の里、岩手県遠野に心引かれて、私はこの夏、昨年に続いて再びこの地を訪れた。

一人暮らしをしている母から電話があつたのは、梅雨に入つたころだった。

「夏休みに一緒に旅行に行つてくれないかしら。ひざもだんだん悪くなるし、歩けるうちに色々見ておきたいの。行き先はあなたにお任せするわ」

私は迷わず、というかちゃっかり遠野に決めた。昨年、宮澤賢治の故郷花巻を訪ねたついで、といった感じでさして期待もせず「民話の宝庫」だということに少しばかりの興味を持って訪れたのだった。が、実際その地を歩いてみると、心にズンと響くものを感じた。つまりハマつてしまったわけだ。

遠野は、早池峰^{はやちね}、六角牛^{むかくし}、石上の山々に囲まれた盆地で、藩政のころ内陸と三陸部を結ぶ宿場町として開かれたという。しかし、そこに暮らす人々のほとんどはやせた土地を耕す貧しい農民だった。

現在でも、東北本線の花巻から釜石線に乗り換えると車窓には山の緑が迫り、いか

にも「山深い地」といった印象だ。

常に飢餓と背中合わせの暮らしをしてきた農村に、数々の民話が語り継がれたことは必然と言えるかもしれない。自然のあらゆる物に畏怖と尊敬の念を持ち、それぞれが魂を持つものと考え、生活に溶け込んだ民間信仰を心のよりどころに、自然の恵みに感謝しながら生きる。そんな失われてしまったものへの憧憬が、どうしようもなく私の心をキュンと締め付けるのだ。

さて、遠野は初めての母を、農村のかつての生活を今に伝える「伝承園」、いかにもカップが出てきそうな「カップ淵」、国の重要文化財に指定されながら現在も住居として使用されている「千葉家の曲がり家」などに案内して歩いた。

道すがら、俳句を物する母はあせに咲く小さな花を見ては「まあ」と声をあげ、何やら手帳に書き込む。民家の裏庭にあった何とかの花が見事だと一句詠み、小川に架かる土橋を発見して走り出し、ホップ畑を初めて見たと感激してまたも手帳にメモをする。どこか「歩けるうちに……」なんだ、と笑ってしまうほどの勢いなのである。

私は、といえただだ黙って民話の世界に心を遊ばせている、という状態だった。何ともおかしな母娘の姿なのだ。

それにしても、どうして私はこれほど遠野の、民話の世界に引かれたのだろう。前述のように失われてしまったものへの憧憬もある。さらには、1+1=2だけでない世界、科学では解き明かすことのできない“神秘”を心の奥深いところで求めているからかもしれない。

娘の大冒険

東京都葛飾区●田中恵子

「ママ、私が書いたのを百人も見に来てくれたんだよ」と学校から帰ってきて、跳びはねんばかりのうれしさで小二の娘が報告した。

四月二十五日、日曜日のことだった。新小岩の自宅から娘が通う赤羽の学校までの長距離を、親子三人で自転車に乗って行ってきた。そのことを作文に書き、地図・写

真も添えて担任の先生に見せたら、廊下に掲示してくださったそうである。

朝十時に出発したころは、それほど風が強くないので計画を決行した。しかし、その日は電車が止まるほど風の強い日だった。荒川沿いに学校まで何キロぐらい走っ



ただろうか。

娘にとって強風の中を自転車に乗ることは、ほとんど初体験だった。土手の上は吹きさらしではこりが舞い上がり、何回も橋を渡ったりぐったりしたりした。また橋の上で受ける強風は悲惨だった。大人でも立っているのが大変で、娘は目にはこりが入り大泣きべそをかいていた。

川沿いといっても道路が中断されたら一

般道路を走るので、想像していたより危険であった。娘の自転車は十八インチなので、大人よりペダルを多く踏まなければならない。悪条件が重なったので、主人と私は引き返そうかと悩んだが、娘は「行く」と言った。

正味三時間十分経ってから、やっと学校の正門に着いた。娘は「やったあ」と大喜びで、ほっとした様子だった。親として、何よりも娘が自分で関心を持ったこと、こだわりを持って、最後まで頑張る底力には感激した。

帰りも相変わらずの強風なので、環七をひたすら走るようになった。一般道路でも幾つかある橋越えはつらいものだったが、行くときに比べれば少し気楽だった。

途中で西新井大師のぼたん祭りに寄った。そこでなめたアンズあめの味は、娘のよい思い出になることだろう。帰りは、正味二時間半くらいで家に着いた。

この「世紀の冒険談」をみんながワイワイと見に来てくれたので、うれしさのあまりトイレに行きたいのも我慢して、その人数を数えたというわけである。

クラスのお友達、上級生、一年のときの担任やほかの先生など多数の方々に披露できた。

「みんながすごいね、よく頑張ったねって言ってくれたの」なんと一躍スターになってしまったのだ。

「最後には、あまりにぎやかなので何かと思ってた、校長様まで見に来てくれたの」

と興奮して言う。何という光栄！ 児童数七百人余りでは、何かに秀でていなければ、なかなか個人的に声をかけていただけるとはいえないだろう。

勉強では今のところ低空飛行だが、学校側が多方面にわたって評価してくれたので、ほんとうによかった。これから娘が成長していくときの自信につながり、いつか伸びてくれたらと願う気持ちで一杯である。

後日校長様に書中お見舞いを書くときにそのうれしさを伝えた。するとじきじきにマリア様の絵はがきで返事を下さった。

「子供に対する愛の表現に感心しています。やる気を持って事に当たれるすてきなお嬢さんが育つでしょう」

(え・小島佳子)

自然食通信57

隔月刊/定価五七〇円
千二四〇円

特集 元気の素 野菜ふんだん夏の料理

効きすぎるエアコンと排気が生み出す異常な酷暑の戸外との落差や気候不順で苦しむ夏のからだ自覚していますか？ だからこそ旬の素材大切に、からだに無理強いない料理の数々を夏の生命力溢れる野菜中心に定番と各地からのオリジナルアイデア盛りこみ満載しました。

地球を汚さないシリーズ② 発売中

愛して使って見届けたいリサイクル「布」「紙」

着古された布一切れと暮しの中で向かいあう人々を紹介。古布回収・再生に関わる現場の声を拾いつつ「布」のいのちの再生を追う。全国から寄せられた手軽に楽しめるアイデア百選も盛り込み「布っていいな」の一冊。「紙」とのつきあい方再考編つき。

『自然食通信』編集部編
定価927円

シリーズ①
100の洗い方と好評発売中
自家製石けん 定価515円

自然食通信社

東京都文京区本郷2-20-8 ☎03-3816-3857 振替・東京5-78026

連載4

私を襲った 老人問題

早川 裕子

施設を出て施設へ

いささか緊張して迎えた五月十四日、家事を済ませて九時半ごろ家を出る。前日にTホームに電話して、谷口さんが持っていく荷物を預かってくれるよう頼み、この日十時半ごろとよみを迎えに行くことを伝えたのだが、以前K病院で退院の前の晩興奮して眠らず、看護婦さんたちに迷惑をかけたことを思い出し、この日に私が行くことをいつ彼女に伝えるかは、職員に任せてあった。

予定の時間にTホームに着くと、とよみはもう準備万端整えて、私を待ち構えていた。私の顔を見ると大喜びですぐ出る気になってくれて助かった。トイレに入ったら下着をぬらし、またをふいたり、かばんから着替えを出してはかせたり、汚したのを洗ってビニール袋に入れたりのおまけ付きだったけれど……。

「大変ねえ。近い関係でもないのに……」と言いながら見守る中年女性のスタッフ二人の同情のまなざしに見送られてエレベーターに。

一階でタクシーを呼んで支払いを済ませたが、その安さに驚く。一週間でなんと一万七千六百円であった。この社会福祉法人の老人施設への入居を待っている人が多いのもうなずける。

タクシーでVホームに向かう間、とよみと大声で話す。補聴器をつけさせてもなかなか聞き取れないのだ。おじさ

んはもう大分よくなったのだが、あと一カ月くらいは入院してすっかり元気になって出てこない、再発する恐れがあること、その間おばさんは、今度はもっときれいな施設に移って、待っていることになったこと……。

「私がそこへ行くことはだれが決めたんですか？」

ホイきた、これは鋭い質問だ。ほんとうのことを話してあげたいのは山々なれど、理解させられる前に私の声がかれてしまいそうなので、また神様の名前をお借りすることにする。〃すみません、こんなに利用させていただいて。罰を当てないでくださいまし〃と心の中でわびながら、

「キラ先生よ」と言うと、

「また裕子さんの夢の中に出てみえたんですか？」

「そうなの。今度はVホームというところで待っているように。その人たちと仲良くして待っていれば、おじさんの体はきつと治してあげますって言われたのよ」

「そうですか。私はキラ先生に一度お会いしたことがあるけど、そんなふうに出でくたさったことはないんです。裕子さんは霊感があるんでしょうかねえ」

今日のとよみはさえている。Vホームの場所も説明すると分かって、そこは病院ではないと言うと、

「そうすると気分的にもいいですねえ」と実しうがった返答が返ってきた。

四十分ほどで、予定どおり十二時にVホームに到着した。荷物ととよみを両手に抱えて受付にたどり着くと、副

園長が待ち受けていて、

「いらっしやいませ、杉田様！」と満面に笑みをたたえて迎えてくれた。その笑顔は、Tホームのスタッフらのそれに比べると、多分に営業的なおいはしたけれど、おばさんも温かく迎え入れられて気をよくしたに違いない。

ちょうど昼食時でみな食堂に集まっていたので、私たちはすぐそこに案内されて、まるで転校生のように前に立って紹介された。昼食時にかかるということで、私も一緒に食べたかどうかと勧められ、申し込んであったので、とよみと一緒にテーブルに着く。



三三三

彼女の隣には上品な老婦人がいて、自分の分はすでに来ているのに、私たちの分が来るまで待っていてくれる。とよみは、私が言うと同じように、「どうぞ召し上がってくださいませ」などとその人に勧めている。彼女だって場所がらをわかまえてこんなせりふも言える人だったのだと、改めて見直した。ほんと、今日のおばさんは上出来なこと。



出された昼食は、ひじきご飯とか、かぼちゃのあずきかけとか、白身魚の酢の物とか、薄味においしく調えられた、

栄養のバランスの取れた老人向きのものであった。

ふと孝のことが思われた。退院したら二人でここに入って、もう食事の心配なく暮らさせてあげたい。それを勧めよう……。

十数名が食べているその中に、ナプキンを胸にかけて食べさせてもらっているおじいさんがいた。何かでそれが失敗したのであろう、「ごめんなさいね、ごめんなさいね」と、しきりに謝っている女性スタッフの声が響いた。

食後には、それぞれの薬が職員から配られた。各自の薬もスタッフによって管理され、間違いない正しいときに正しい分量が飲まされるようになっていたのだ。

食事が終わると私は再び副園長に会って、手続きや支払いを済ませる。半月余りある五月分として、二十九万円余を払った。とよみを部屋へ連れて行って落ち着かせると、「私はこれからおじいさんのところへ行って、おばさんがここに無事入ったことを報告してくれるからね。また来るから、元気にしててね」と、無理に別れてその足でS病院へ回る。

私の報告に一つ一つ顔をほころばせてうなずき、「ああ、これでほっとしました。ありがとう」という孝の言葉を背に帰路につきながら、やっと一段落との思いを深くした。

翌日仕事の取材の後、風邪でダウン。連日の気の張りで押さえ込んでいた症状が、一段落した気の緩みで吹き出したものか、その晩グッタリとベッドに倒れ込んだ。

● 予期せぬ退院通知

それ以後も私は、決して楽になつたわけではなかった。両方の施設から絶えず電話がかかってきたからだ。

Vホームからは、美容師の来る日だが髪をカットしてよいかとか（これはしてくださいと頼んだ）暑くなつてきたのに長そでの下着しかないとか（これは、近くのスーパーで適当な物を求めてくださいと頼んだ）の事務的なことから、〃ご主人のことをしきりに心配しておられます〃という訴えまで寄せられた。

が、Vホームは、K病院のように〃手に負えないので何とかしてください〃という言い方はせず、「ではお祈りしましょう」と言つて一緒に祈ったり、「ご主人は必ずよくなつて帰っていらっしゃるから、ここで待っていますよ」と筋道を立てて話せば分かつてくださるので、杉田さんはとてもいいです」と言つてくれる。うれしくて頭が下がった。

痴呆気味の人たちに比べたら、とよみは物分かりがよいほうなのかもしれない。それにしても、石井氏らからは〃精神科に診てもらつたことはあるのか？〃などと精神病扱いをされたこともあるので、Vホームの扱い方は有り難く、心強い。こういうところだったら、一生とよみの世話を任せられるのではないかと、孝の退院後の二人の落ち着き先として、一層大きくVホームの存在が浮かび上がった。

てきた。

S病院の孝からも、リハビリのほうに部屋が移つたとか色々の電話が入っていたが、そうこうするうちに五月二十七日、来週末退院できることになつたと、耳を疑うような知らせが入つた。来週末といえは六月六日で、わずか一月しか経っていない。予定より二カ月も早いではないか！私は小躍りするような気持ちで、とにかく行つてみよう、翌二十八日S病院へ出かけた。

ちょうど担当の医師に出会えたので、話を聞く。孝の場合、症状が軽かつたうえリハビリの経過もよく、予想よりずっと早く快復できたのだという。来週いっぱいをメドに退院可能で、その後は通院もいらず、普通の生活に戻つていいとのことだ。普通の生活といっても、孝の場合とはよみを抱えると無理して再発の恐れがあるのでは？と心配して確かめたのだが、それほどの無理さえしなければ、普通の生活をするのがすなわちリハビリになるのだという。

ああよかったと安心しておじさんに会いに行つたら食事中だった。リハビリ棟はまるで老人ホームのようで、みな一緒に食堂に集まって食事をしていた。手を振つて知らせると、孝も気付いてにこやかにこたえる。同じ病院を訪れるのでも、入院したばかりと退院間近とでは、こうも気分が違ふものか。今日の私はどことなく浮き浮きしているのを自分でも感じる。まだまだ課題はたくさん残されてはいるのだが……。

待つ間にソーシャルワーカーの部屋を訪れる。意外に早く退院できることを伝えると、彼女も知っていて喜んでくれた。彼女が市の福祉課と連絡を取り、退院後の家政婦の手配などをしてくれるというので、よろしくと頼んで部屋を出る。

孝の部屋へ行くと、もうすっかり元氣そうで、いすに座って待っていた。退院後の生活について相談する。とよみが今入っているVホームの副園長らスタッフが、とよみの性格を飲み込んで上手に世話してくれているので、このまま長期契約にして、おじさんも一緒に入ったらどうかと提案すると、意外とすんなり同意した。

退院後の食事づくりが、よほど重荷になっているらしい。週末は家政婦がいなし、普段の日の夕食もいつもは頼めないという。市の給食サービスもあるのだが、それはまずいというのだ。

とにかく、このまま二人の生活に戻して再び今度のような恐ろしい目に遭うことのないように、老人ホーム入居を勧めることに話を決めて別れる。

その後、またも杉田宅へ寄る。最近Vホームから電話で、とよみがうがい薬がないと騒ぐので持ってきてほしいと、頼まれていたのだ。とよみを電話口に出してもらい、「うがい薬なんかなくても、お水でうがいすれば大丈夫なのよ」と言っと、

「裕子さんはお医者さんでないから分かりません」ときた。



「お医者さんに聞いたのよ。丸屋先生に」と、掛かりつけ医師の名前が浮かんたので言うと、「ふーん、丸屋先生が……」と、そのときはいったんは収まったのだが、ま、ここまで来たので、ついでに持って行ってあげようかと、おじさんにあり場所を聞いてきたのだ。

それを見つけ、ちょっと見ると部屋のハンガーに薄手のブラウスがかかっていたので、これから暑くなるからとそれも持って、今度はVホームへ向かう。

とよみは部屋で寝ていたが、私を見ると大喜びで起き上がって、一緒に食堂へ行つて話す。

「裕子さん、今日はここへ泊まっていてくださいよ」としきりに勧めたが、そういうわけにはいかない。見るとやけに厚着をして汗をかいているので、ヘルパーさんに、入浴後はこれに着替えさせてと、持ってきたブラウスを渡す。



おじさんが、あと少しで退院できることになったと話す
と、「ええっ、そう？」と目を丸くして驚き、両手を合わせて
「ありがとうございます。よかった、よかった」と喜ぶ。
「それでね。退院してもおじさんは食事づくりが大変で、
また病気になるといけないから、おじさんもここへ来て一
緒に暮らすことにしたらどう？」と言うと、
「それはいい考えですなえ」と、こちらも難なくその気にな
ってかれてホッ。

早速副園長にも会ってこちらの希望を伝えると、なるべ
く早く二人用の部屋を確保できるかどうか見直しをつけて
知らせるとのこと、念のためこんなところにもあると、他
地域の同一経営者の施設のパンフもくれた。

● 老人ホーム入居へ

翌日にはもうVホームから電話があり、七月五日からな
ら、Vホームで二人一緒に部屋の孝に伝えられると知らせてき
た。早速そのことをS病院の孝に伝える。長期滞在コース
のツインルームとなると、入居時払い込み金が三千七百五
十万円ほどと、毎月の食費・管理費が二人で二十七万八千
円かかるのだが、色々調べた結果、ここはまだ安いほうだ
と分かった。前日渡されたパンフを見ても、新しいところ
ほど高くて、入居時の費用が六千万以上かかるころもある。

孝に、退院したら一度行ってみてから決めるかと聞いた
のだが、見なくていいという。それならその線で申し込む
ことにし、退院後入居まで一カ月近くあるので、孝一人で
家の整理をしたほうが能率が上がるだろうと、とよみはそ
こに預けたままにしようといったんは決めた。

ところが翌早朝もう、私は彼からの電話で熟睡中を起こ
され、退院後とよみをいったん家へ帰してほしいと言われ
た。どうやら彼は、どうせ家政婦を雇うのなら、妻がいて
も経費は同じ。ホームに払うお金がもったいないと考え、
眠れなかったようだ。

それ以後も、退院の日取りやら、退院時の支払いに手元
のお金が足りないかもしれないとか、散々孝からの電話に
悩まされ、Vホーム、ソーシャルワーカー、谷口さんらへ

の連絡に追われた。結局六月十日に孝が退院、十六日にはとよみがいったん帰宅と決定した。

十日、授業を終えて二時ごろ、杉田宅へ行ってみると、孝は元気で戻っており、手伝ってくれた白川氏と谷口さんもいてくれた。早速三人にVホームの資料を見せて説明した。「おじいちゃん、今庭のある家に住んでるでしょ？急にこんなマンション暮らしになって、ポーツとしちゃわないかしら。そういう話よく聞くじゃないですか」と谷口さん。

確かに、このホームは場所が便利な分緑は少ないが、緑の豊かなホームとなると、ずっと遠くなってしまう。まだここに貸家があって行き来しなければならぬことを思えば、便利さを優先すべきじゃないか、部屋に鉢植えでも置いたらどうかなどと話がまとまる。

先日の副園長の話では、一番外れにある三人部屋を、ここの二人で大声で話してもほかの同居者の迷惑にならないだろうと、二人のために空けてくれたとのことだった。ホーム側の営業政策もあるのだろうが、そんなことも話す。

間もなく、連絡しておいた福祉事務所の石井氏も現われた。予想以上に早い退院を祝い、「Vホームに入居を決められたのはほんとうですか？ マンション一軒買うぐらいかかるんでしょうか」などと聞いた。

六月十六日にとよみをいったん引き取り、この家を整理

して人に貸すようにしたら、七月二十日に二人で入居、というごとに、このときは決めたのだが、この入居予定はこの後散々延ばされ、一時は入居自体も危ぶまれることとなつた。



石井氏がこのとき提案したのは、緊急電話の取り付けである。夜間家政婦がいない間に何か起きたとき困るからというのだ。ホーム入居までの間市から一時的に貸してくれることになった。

一緒に家路につきながら、白川氏がしみじみ語った。

「やーしかしよくあの二人が、特に奥さんが老人ホームに入る決意をしてくれましたねえ。今まで僕なんかも散々勧めたんですが、頑としてきかなかったんですがね。」

その意味では、今度の入院がいい警告になりましたね」私もそのとおりだとうなずいた。

(文中の人名は仮名です) ーつづくー

(え・佐藤瑞江子)

わいふ30周年記念パーティーのおしらせ

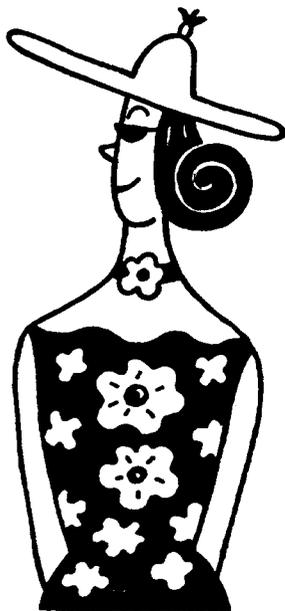
「わいふ」が兵庫県宝塚市の団地で発刊されたのは一九六三年。編集部が東京に移ったのは一九七六年、あたかも国際婦人年。「二〇〇パーセントの言論の自由」という創刊時の理念は今も健在、ユニークな投稿誌、ライターの育つ場、女性のネットワークとして発展してきました。今年で三十周年に当たります。読者の皆様、誌上では知らない仲間と会い、楽しい一夜を過ごしてみませんか。そして今後の「わいふ」を励ましてください。記念誌も発刊されます。

時・十一月二十六日(金)午後六時より

所・スクワール麹町3F

会費・六千円 申し込みは電話かハガキで編集部へ。

締め切りは十一月十日ですがなるべく早く。



〒102 東京都千代田区麹町6丁目6番地

TEL. (03)3234-8739

交通至便な四谷駅麹町口前。

JR中央線「四谷」駅前。地下鉄・丸ノ内線「四谷」駅から徒歩2分。または、地下鉄・有楽町線「麹町」駅より徒歩6分。

わいわい がやがや

十六歳の父

栃木県鹿沼市●神山壽子

二年生の二学期が始まってしばらくしても、T君は学校に現われなかった。

やめちゃうのかな？

私の通っていた都立高校は、もと女子校だったせいかな、あまり中退者のいない学校だった。それでも年に数人は、いつの間

にか姿を消すが、同じクラスの子がやめてしまうのは、これが初めてになりそうだった。

「あのね、T君ね、彼女に子供で来たんだって」

クラスの世話係を任じていたオモがある日知らせてくれた。

「えっ！ 彼女いたの？」

T君のように目立たない子に彼女がいたとは知らなかったわ。

「それでどうするの？」オロシちゃうんだらうと、思いながら尋ねると、

「違う、違う。子供で来たっていうのはさ、生まれちゃったってコトなのよ」

「……」

彼は十六歳で、一児の父親になっていたのである。

オモの話は、彼は学校をやめて一歳年上の妻と子を養うことにした、ついでにはクラスの有志で出産祝い（お見舞い？）を送りたいがどうだろう、というこ

とだった。

あまり派手な出来事のない学校だっただけに、彼の一件はちょっとしたニュースであった。

担任は若い体育教師であったが、「オレだって、まだ子供いないのになー」とためいきをつ

き「赤ちゃん、かわいいだろうね」と、ピント外れの感想を漏らす女子や、T君の名を耳にするだけで怒りだす男子やら、一時は騒然としていた。

しかし、私たちの興奮をよそに、T君自身姿も見せず、何の連絡もないため、彼のことはほとんど忘れられてしまった。

その年も押し詰まったころ、オモがみんなに一枚の写真を回覧した。

写真の中で、T君のアグラの中に小さな赤ちゃんがちんまりと座っていた。

「カオリちゃんっていうんだって。みんなにお祝いありがとう

って」

「へーっ」と、一斉に声を上げた後は一同何を言っていたのか、言葉に詰まってしまった。写真のT君はすっかり「お父さん」になってしまっていたのだ。

それ以来T君のことはすっかり忘れていたのに、三十半ばで初めて子供を持って、唐突に彼のことを思い出した。

今ごろになって初めて十六歳の父となった彼の驚き、戸惑い、決断を思っ、胸が痛んだのである。

婚姻届も出せず、何をして生活をたてようとしたのか、不安一杯だったのではないだろうか。もちろん、そんな心配は大きなお世話で、案外親がかりでヌクヌク暮らしたってことも考えられるのだけれど、彼のその後の人生は、ほかの十六歳の男の子とは大きく違ってしまったことだけは確かなのである。

家族旅行

大阪府南河内郡●中野正美

その後二十年近く、親として歩んできた彼の人生と、今ごろになって親になった私の人生を思うと、小さな別れ道の行く末を思い、感慨が深い。

彼の娘は、今年二十歳になる。

私の家族は、夫、子供二人、夫の両親と姉の七人である。

七、八年前から父の提案で、年に一度は家族そろって旅行をすることにしている。

費用の足しにということ、一カ月に一人当たり一定額を貯金することを決めたのも父である。ちりも積もれば山となるで、少しの金額であってもたまれば交通費の足しぐらいにはなり、これはなかなかよいアイデアだと思っている。

さて、一番問題になるのは行く場所である。何しろ、好みも体力も年齢も違う三世代であるから慎重に考えねばならない。最低の条件は、全員がどこかで満足できる旅にすることだと思ふが。

例えば、能登に行ったとき、私たち夫婦、子供、姉の五人は羽咋の千里浜で泳ぎ、両親は能登半島を観光バスで周遊した。和歌山の白浜に行ったときは、私たちは白良浜で泳ぎ、両親は足を延ばして那智の青岸渡寺へ行く。というふうには、主として私たち若者組は泳ぎに、両親は観光や神社や寺詣でにというパターンが多い。もちろん、一、二カ所は全員で行く場所もつくっておく。

ちなみに今年には箱根、東京都内観光、デイズニールランドと珍しく全員同じコースを旅したが、特に父母と子供たちの好み

が違いすぎて、少し無理があったように思う。

ところで、私たちの旅行では、いつの間にかそれぞれの特性？を生かして役割が決まってしまうている。

毎月の積立金を集めて銀行へ預けるのは父。みんなの希望を取り入れて、旅行の細かい日程や宿泊場所などを計画するのは夫である。計画に従って切符の手配などをしてくれるのは姉。私は、旅行中に切符やお金、クレジットカードをしっかりとポケットに入れて、支払いを担当している。日ごろのお付き合いに合せて、隣近所や知人にお土産を購入するのは母の役目である。

帰ってから、旅先での写真を見ながら、様々な出来事を話し合うのも大きな楽しみの一つである。とにかく七人もいるので、色々な場所が何かが

をしでかすので、話題には事欠かない。さらに話は発展して、次はどこへ行こうかということにもなっていく。

両親は年々取るし、子供たちは成長するに従って忙しくなり、あと何回このような旅ができるのかなと思うこともあるが、今のところ家族旅行はわが家の家庭円満の秘けつの一つである。



「カワイソー」と感じる切なさ

埼玉県上尾市●青木和子

専業主婦の母親を持つ女性が

「何か、お母さんで、かわいそーな人っていうイメージで子供のころから見えてたなあ。こっちのほうが罪悪感持たされるような後ろめたい気分にはせられない」と言っていた。そういえば、「日本の母」って、やっぱり「カワイソーなひと」の伝統があるのかもしれないと思ったりする。

しかし、辛い私はつい最近まで、母をそう思ったことはなかった。彼女は離婚後三十年間ローカル新聞の記者生活を送り、停年目前に退社し、団塊の世代の女たちとミニコミ紙づく

りを始めた。自分のやりたいことだけを、忠実にやってきた母の人生に「カワイソー」という言葉は似合わない。それどころか、娘の私のほうがよほど「カワイソーな子供」であったと思っている。

ユニークでとても面白い生き方をしてきた母と、娘を放置して自己本位に生きてきた母が私の中で共存して、母に対する気持ちは複雑だ。母の仕事仲間の女性に、「ほんとうにね、和子さんが中村さん(母の名)の娘じゃなかったら、もっと違った出会い方ができたらうね」と言われたりした。

その母が、三年前ガンにかかり声帯を切除して、障害者として暮らすことになった。足は弱り、体はこわばり、まっすぐ歩くことはできなくなって、社会的弱者となったのだ。のどに開けられた穴から絶えず痰が流れ

て、人前には出られなくなった。今でも仕事は続けているが、うつ病気味で頑固な老人のようになっていて。

私は母が「カワイソー」と思



うようになった。社会的な場から離れて嫌いになった母の極端な変化を目にするのは、ショックだ。以前の母では考えられなかった、ねたみ、やっかみ、ひがみという感情が母の心を占めているのにあ然として、病

いられない。そしてそんな母が、いとおしくさえある。そして思うのだ、自信たっぷりの力強い親、憎まれている親も、いつか子供の前でおおどと弱い人になるときがくるかもしれない。そして、そんな親を受け止めるだけの力が私にあるだろうか。

悲しかったコト

群馬県新田郡●麻宮由美

四月から始めたパート先でのこと。

この夏から、それまで私服だった私たちパートの人にもブラウスだけ支給されることになりました。ところがそのブラウスの素材が化繊だったため「うーん、どうしよう」と悩む羽目に！

実は、私は幼いころからアト

ピー性皮膚炎で今まで化繊素材のものは極力避けるようにしていたのです。特に夏場は汗で擦れやすく、Tシャツを着ているだけでも背中じゅうが真っ赤になってしまい、かゆくてかゆくて寝つかれないときもありました。こればかりはアトピーの人にしか分からないでしょう。

幸いなことに以前から制服が徹底している職場ではなかったのですが、一応最悪の事態も覚悟しつつ、思い切って上司に相談してみました。これが案外簡単に承知してくださり、今までどおり私服のまままでよいことになりました。

ただ一つ、その条件として「必ず白色のブラウスを着るように」と言われたので、その日から私はそのことを忠実に守っていたのです。それなのに、数日もすると今度は同じパート仲

間から「どうして制服のブラウスを着ないの？」としつこく聞かれるようになりました。私自身、あまり言いたくはなかったのですが、(別に隠す必要もないか)と正直に事情を説明すると、「そんなことを気にしていたら、生きていけないわよ！」と逆にこちらがしかられる格好になってしまい、私はガクゼンとしました。(なぜこんなことを言われなくちゃいけないの?) 悲しさと寂しさとで胸が痛くなるほどのショックでした。

今もアトピーの人は大勢います。その中には「アトピーだから」



ら」というだけでいじめられている子もいるのかしら? 相手はほんの軽い気持ちで言ったのかもしれないが、あの非情な言葉は恐らく一生私の心の傷となって残ることでしょう。

無農薬野菜の恐怖

東京都墨田区●七森 咲

家へ帰り着くやいなや、夫にむかって開口一番、「あなたの親何とかしてよ」子供二人を田舎に置き去りにして、帰りはウキウキのラクラクのはずだった。それなのに私のポストンバッグはパンパンで、おまけに肩もパンパン。バッグの中身はキャベツ二個、大根二本葉っぱ付き。ピーマン、菜っ葉、ぜんま

い。「東京は野菜が高いだろっ」と病弱の義父が畑へおりていて、手ずから採ってきた野菜だと思えば置いてもこれない。夫はあきれて笑っている。「あゝたは笑っていれば済むけどさ」と捨てぜりふを残して台所へ。「よし、生で食うぞ」とキャベツの葉を一枚一枚むき始めた。間もなく「ぎゃあゝゝ」という私の悲鳴を聞きつけてやって来た夫。

「おう! これはめめずだ」そんなことあゝ私だって分かってる。「早く捨ててよ! 全部よ!」「こだけ取ればいいんじゃないの?」「だめ! もう信じない」私はカバンにみみずを入れてきたんだと思ったら全身の毛が立ってしまった。そう、私は「みみずをぶつけるぞ!」と言われたら、何だっけ言うことを聞いちゃうくらいのみみず嫌いだ。

私にとって無農産野菜は恐怖である。「安心して食べられる野菜を」とうたわれて出回っているのが無農産野菜。しかし私にしてみればそれは安心ではなく心配なのである。キャベツはもちろんブロッコリー、ピーマン、スパーで売っている野菜にだって虫さんはくっついてくる。いわんや、産地直送野菜においておや。生協でも絶対買わないのが野菜類だ。

農産野菜が体にいけないのはよく分かっているけれど、虫が怖いから、農産物が怖いから、怖いものは人それぞれだ。虫入り野菜に身の縮む思いまでして、安全なものを食べたいと思わないのが私である。こうなったら虫たちと一菜托生。農産物で虫と心中、それでもいいと思っっている（もちろん家族にも付き合ってもらいますが）。私は農産野菜が大好きである。

結婚について 思うこと

東京都田無市●石川真理子

不意を食らった。先日、高校時代からの親友に「結婚、決まったんだ」と、打ち明けられたのだ。一瞬、コーヒークップを握っていた手が止まってしまった。

「ええっなんでー？」思わず飛び出した声は一オクターブ上ずり、こんな失礼な第一声を上げた自分に面喰らっていた。

二度目の婚約破棄でポロポロになっていた彼女を慰めたのは、今年の正月明けのこと。しばらくだれにも会いたくない、と言われていたので、久しぶりの再会だった。聞けば、結婚相談所から紹介された相手に気に入られ、全然好きなタイプではなかったけれど、もう疲れたのですぐに決めたのだという。一気に話し終えたその顔は、終始うつ向きかげんで、笑顔にはならなかった。（大丈夫かなと、不安がよぎった。どこか遠くの世界をながめているような私に、彼女は続けて言った。「で、明日結納なの」。その晩、複雑な気持ちで彼女と別れた。

彼女とは大学に入ってから急に親しくなり、以来月に一度は会って互いの近況報告をし合う間柄である。ここ数年、疲れたから会社辞めて結婚したい、と繰り返されるたびに「折角主任になれたのに仕事辞めたらもったいないよ。焦って結婚してもしかたないと思うよ」と、言い続けてきた。〇し生活も十年ともなれば疲れもたまる。私だって同じだ。嫌な上司のご機嫌を

とるより、妻として一人の男性に尽くしたほうが、やりがいもありそうだ。早く結婚して楽になろう。つい安易な考えに流されそうになるときもある。でも結婚しさえすれば救われるなんて幻想だ。逃げるように結婚したとたん、独身は気楽でいいわねと、勝手なことを言う人のなんと多いことか。



どんな出会いや理由で結婚してもかまわないが、自分がその道を選んだことに気付いていないと不幸になるだろう。彼女は一体どうなのだろう。ふと、考えさせられてしまった。

カニのいたずら

横浜市戸塚区●万江初美（34歳）

不本意な目覚めだった。おなかの回りが異常にむずがゆい。幾らかいても、かゆみは治まらない。パジャマのズボンのゴムがきつすぎたのかしら。昨夜、伸びきったゴムを入れ替えたときは不都合はなかった。まあ、この年になるとちよっとした気の緩みで、腹回りは日々肥大しつつあるようで……。

寝ぼけ眼で腹部をのぞき、私は目を丸くした。大小様々な赤い発しんが、あっちこちで合体している。体中に赤くただれた世界地図ができていたのである。これはただ事ではない。私は、夫を呼んだ。どれどれと、夫は私の服をめくり上げた。「ひエー、気持ち悪い」夫の

奇声で、子供たちも寄ってきた。「あ、ここにもある」「ほら、こんなところにも……」おもしろがっているときか思えない。「腐ったものでも食ったんだろう」夫にデリカシーはない。



昨日の夕食は、夫の大好物のカニなべだった。大特売のカニのほかに思い当たる食品はない。そのカニを独り占めして食い荒らした夫は、すこぶる元気。夫に勧められ、夫の食い残しを一口食べた私だけが発病!? 自分のいじきたなさを悔いるば

かりである。

まずは取り急ぎ病院へ。「これは見事なじんましんですね」医者も見とれている。「カニでしようか」「疑わしいですね。それにしても、お顔に出なくて

何よりですよ。人相が変わってしましますからね」「つらの皮が厚いおかげです」今のうちに食い止めなければならぬ。体型も変わりつつある昨今、人相まで変わってしまったら……。治りたい一心で、嫌いな注射にも進んで腕を差し出した。

夜になっても相変わらず、痛々しい体である。塗り薬のおいもツンツン鼻につく。夫は一足お先に布団の中。たかがじんましんと侮り、気に留める様子もない。そと、布団に潜り込み、夫にびったりくっついてみた。「やめろ、やめろ。うつる」寝込みを襲われた夫は騒ぎだし、カニのようにすばやく横へずれた。かゆいところに手が届かない夫に愛想を尽かし、私は寝返りをうつばかり……。

それにしても、じきに快方に向かうと思っていたじんましんが、とんでもなくくせ者だった。半月余りも発しんは消えず、家人に疎んじられ続け、居心地の悪いことこの上もない。じんましんなんて、割に合わない病気である。店頭で立派な値札を付けたカニを見るたび、腹立たしさが込み上げる。

つわり

千葉市花見川区●藤田勝美（30歳）

「ゲー」「ゲー」

とても口で表わすことのできないようなうめき声とともに洗面所へ駆け込む。人によって様々だというが私のつわりは、ひどく重い。

今、妊娠七週目だが、六週に入ってから口にできるのはオレジンジュースだけとなり、何をするのにみだるく吐き気がする。長男健嗣のときもこうだった。まだ会社勤めをしていた私は、点滴をうちながら仕事を続けた。

「一人目は楽よ」「女の子だとつわりはないよ」という言葉を真に受けた私が甘かった。とてもではないがこのままではいられない。吐くものはなく胃液しか

出ない。イライラして健嗣のこともどなってばかり。さすがに限界を感じて「病院に行こう」と決心した。

家から外に出ることは決心が必要であった。妊娠判定をした助産院は家から電車で五つ先の駅にあるのだが、とてもそこまでは行けそうもない。とりあえず車で一番近くの産院に行こうと車に乗る。ところが五分も走らないうちに吐き気におそわれ車なんか運転できない。

家に戻り主人の母に電話をする。義母はすぐに駆けつけ私たちは彼女の車で主人の実家へ（このときばかりは近くに住むっていいもんだと思った）。私だけ義母に連れられ病院へ行き、つわり止めの注射をうちやっつと落ち着いた。

私は長男を出産したとき帝王切開であった。手術後の痛みはもちろんだが、自然分娩びんぱんで

い私に与えられたのは精神的な苦痛だった。

実母が私に「普通に産めないなんて女として恥ずかしい」と口にしたとき、私は完全に打ちのめされてしまった。そして二人目は意地でも自然分娩びんぱんしたいと評判のよい助産婦を必死で探したのだった。

でも今このつわりと戦いながら、それはどうでもよいことに思える。私のおなかに四十週紛れもなくこの子はいる。どんな方法で外に出てしようと、私のかわいいかわいい子供なのだから。

私の提案

埼玉県鴻巣市●鈴木洋子

「わいふ」二四三号を開くと、ハラリと落ちた紙。三年ぶりに投稿した文が、没になったとの

連絡文である。

紙面を読んでいくとなるほど、みなうまい。それに引き替え私の文は、安住の主婦の生活にどっぷりつかった、生ぬるい文章だったようである。だが待てよ、と一つの疑問が頭を持ち上げてくる。

掲載されている人の名前の中には、毎回のように見られる方もある。確かにその方々の文は、豊富な経験からくる、生き生きとした文章で、読む私も引き付けられるものがある。だからと言って、紙面が足りなくて没になる人も多い中で（どれくらいなのか？）このような状態でよいのでしょうか。

「わいふ」は営利目的ではないはずと思うのですが。購読している方には、一度は掲載の場を与える機会をつくってはいかがでしょうか。

（え・小宅昌枝）

次号投稿募集

●特集テーマ原稿

二四五号の特集テーマは「病氣とのつきあい」です。

医学が進歩したため、あらゆる病氣は病院で治せる、とみなが思い込むようになっていのではないのでしょうか。

ちょっと風邪を引いてもお医者さんにかかる。薬を買って飲む。昔は「医者殿は結局うどんで引っかぶり」などと言って、自然治癒を待ちました。

このごろ大人にまで広がっているというアトピーも、胎毒だから大きくなれば治る、で済んでいたのです。

過激な薬より気長く付き合うことで、病氣を自然に治したり、共存して暮らしている経験をお持ちの方、ぜひその経緯をお書きください。読んで救われる方もあると思います。四百字詰原稿用紙で十枚前後。

●ワンポイント情報

「私の愛読コミック」です。古いところで「ガロ」などという雑誌、六〇年安保闘争を激励した「忍者武芸帳」。思えばコミック時代も始まってから三十有余年。

「わいふ」の読者のはとんどが、愛読コミ

ックを持っていらっしゃるのでは？

大好きだ、すごく感激した、何度も読み返した、というものを紹介してください。

四百字詰原稿用紙で二〜四枚。締め切りは
双方十月二十五日。

●女の時事談

「政治浄化の決め手はどこに」

細川首相は今年中に政治改革ができなかったら解散する、と明言しました。

やれ小選挙区制だとか、比例代表制との並立制だとか、一票制だ、二票制だと、男たちは制度いじりにばかり熱中しています。

私たちが求める政治改革とはそんなことでなく、お金で動かされない政治、腐敗や汚職のない政治なのです。

そこで今回はこの問題に関係の深い政治関係の人を招いて、議論を深めてみたいと思います。

現在の選挙の表情はどうなのか。自分も含めて、周囲の人たちは政治にどんなかわり方をしているのか。どうすればクリーンな選挙ができるのか。関心のある方のご出席をお待ちしています。

日時は十月二十九日、午後六時半より。場所は未定なので、出席ご希望の方は電話で編集部にお問い合わせください。

ご要望がしばしばあるので、原稿の添削をすることにしました。添削して欲しい方は、左記の要領でお送りください。

●添削のみ希望の方は、原稿の最初に「添削のみ希望」と赤字で書くこと。

●「わいふ」に投稿して、さらに添削希望の方は、「投稿、添削も希望」と原稿の最初に赤字で書くこと。

●投稿して、ポツになった場合のみ添削して欲しい方は、「ポツのときは添削希望」と、原稿の最初に赤字で書くこと。

添削料は四百字詰原稿用紙一枚につき（ワープロ原稿は20字×20行で打つこと）二千円いただきます。返送の際振替用紙を入れて、返送料共にご請求します。

誤字、仮名遣い、文法、文脈などの誤りを止したうえ、編集長か副編集長が講評をいたします。

編集長の著書「書きたい女たちへ」（六四〇円）も、基礎を勉強したい方にはおすすです。ご注文ください。

わいふ 投稿規定

●定期購読者はどなたでも(男性でも)投稿できます。原稿には住所氏名を(都道府県名から)明記のこと。誌上匿名・ペンネーム可。

●次のコラムを設けています。

◆エッセイスト・クラブ
(一六〇〇字まで)

随筆の楽しさを十分に味わわせてくれるよい文章をお待ちします。

◆ズバリ一言

(八〇〇字まで)

マスコミ、事件、商品、サービス、その他目にふれ耳にきき手にするものに、どうしてもこれだけは言わずにいられないという「もの申す」の欄。改善への具体策の提言もどうぞ。

◆奥さんから外さんへ

(一六〇〇字まで)

いまや家から外へ、既婚の女性がどんどん進出しています。どうして、どうやって何のために、あなたは奥を捨てて外へ出たのか。職業ばかりでなく、趣味、市民運動、どんな目的のためでもよいのです。家族の反響、得たもの失ったものetcをお書きください。

◆マイ・ジョブ/マイ・プロフ

エッジョン

(一六〇〇字まで)

あなたのしていらっしゃるお仕事の内容、どんな技能、どんな適性が必要とされるのか、などをレポートしてください。保険の外、校止の仕事、陶芸、八百屋、何でも。

◆サーブレシーブ

(八〇〇字まで)

本誌の投稿や記事についての反響をお載せします。感想、反論、何でもどうぞ。

◆人間マンダラ

(一六〇〇字まで)

あなたにとって忘れられない人の姿を描いてください。もちろん家族の一員でもよ

いのです。

◆親の言い分・教師の言い分

(一六〇〇字まで)

それぞれ重い問題を抱えながら、面と向かつては言えない関係。教師から親へ、親から教師へ言いたいことを率直に言いあってみましょう。抽象論でなく、それぞれが抱えている問題を具体的にお書きください。

◆フリースペース

(八〇〇字まで)

どんなテーマでも書けます。思想・信条にかかわらず、一〇〇パーセント言論の自由のある「わいふ」ならではのコラム。

◆わいわいががや

八〇〇字以内で。誰でも気軽に書けるコラム。

◆読んでみました

(八〇〇字まで)

書評のコラム。女性問題にかぎらず、視野の広い読書体験を。

◆情報コーナー

(三〇〇字まで)

お知らせ、募集、お願ひ、捜し物、交換相談、何でも。なるべく短く、要点をまと

めてください。

◆サークルだより

(八〇〇字まで)

“わいふ”には読者が連絡をとりあい、自主的に作ったサークルがあります。作りた、というよびかけ、こんな活動をしました、これからしますからご参加を、などというお知らせをどうぞ。

●投稿は多少添削することがありますのでご了承ください。

●以上、締め切りは原則として偶数月の二十五日。それ以後については、次号までとしとなります。

規定枚数はより多くの投稿を載せるために、守っていただきたいと思えます。ただし内容がよければ、多少オーバーしてもお載せします。

【コラム以外の投稿募集】

◆特集テーマ原稿

毎回テーマを設定して募集しています。

◆ワンポイント情報

一つのもの、または事柄に関する読者の情報の徹底収集。テーマはそのつど設定し

ますので、募集欄をごらんください。

◆特別寄稿

ルポルタージュ、自分史、伝記、旅行記、その他の体験記、評論、小説、どんなジャンルのものでもけっこうです。枚数も自由。

●本誌に適合と思われるものは掲載します。長編なら連載になります。

●本誌には合わないが、価値ありと思われるものは、出版社に紹介、推薦します。

●本誌掲載の場合は薄謝をさし上げます。

絵・カット・イラスト・写真・コミックも募集しています。

●ご自分の投稿にイラストや写真が用意できる方は、あわせてお送りください。

【注意】

●投稿は一人一篇に限ります。

●ただし次のコラムへのご投稿とはだいぶてかまいません。情報コーナー・ワンポイント情報・サブレビュー・サークルだより。

●投稿は原稿用紙に。本誌はタテ組みです。ヨコ書きはご遠慮ください(書き直

すことになるので)。

●原稿はお返しできませんので、必要方はコピーをとってからお送りください。

●匿名、ペンネームは原稿の最初に、住所・本名はそのすぐあとに並記してください。

●匿名、ペンネームの場合には、理由をお書きください。とくに理由がない場合は、本名でお願いします。

●ペンネームをいくつも使い分けるのも、ご遠慮ください。居住地もとくに理由がなければ記載したいのでよろしく。

●ただし匿名・ペンネームは原則として自由であり、書くことの自由を守るためであれば、むしろ積極的に評価したいと編集部では考えています。濫用は避けていただきたい、ということです。

●おたよりで掲載ご希望でない場合は、必ず私信とお断わりください。

●年齢をお書きそえになりたい方は、名前の下にアラビア数字で。

●二重投稿は固くお断わりします。

●ワープロ打ち原稿は、字詰め二十字で行間、字間をあまり詰めないように。また禁則処理をしないで打ってください。

編集だより

●今回の特集は当たりました！ 多数のご投稿がありました。

しかし……喜ぶのは申し訳ない、たくさん来ればページ数が限られているので、どうしてもポツが出てしまうのです。

ポツになった中にも、惜しい作品がありました。やはり内容をタイプ別に分類して、変化がつくようバランスを見て選ぶため、作のよしあしだけの問題ではなくなるのです。ポツの方もがっかりなさらず、重ねてご投稿ください。

●ポツのことについては一四〇ページ、「私の提案」というご投稿がありました。

「同じ人の作がよく載っているが、〃わいふ〃は宮利目的ではないはず、購読している方には一度は掲載の場を与えて」という趣旨です。宮利目的というほどの野心はないけれども、編集の人たちが無給で働いていたらとつづく〃わいふ〃はつぶれていたでしょう。無給ではなかなか長期にわたって責任ある仕事をして、いまだに赤字の〃わいふ〃を支えることはできなかったでしょう。普

通のパートより低い時給ではあるが、手当あればそこままでやって来られたのです。

同人雑誌ならば、読者がどう思うかなど問題でなく、集まった原稿を載せられますが、そのかわり費用をページで割った掲載料を、作者からいたたかなければなりません。〃わいふ〃の投稿が年間購読料だけで掲載できるのは、たくさんの方が読者に回ってくださるからです。ですから喜んで読んでいただける、面白い本づくりをしなければなりません。ポツも出てしまうわけですが、基準は文章の上手下手ではなく、心から、または生活からにじみ出た、胸を打つもの、面白いものという内容本位です。ぜひご理解

のうえ、多数のご投稿をお寄せください。●〃わいふ〃は今年の秋で創刊三十周年を迎えます。昭和三十八年兵庫県宝塚市で創刊。昭和五十年まで発行を続けた前期〃わいふ〃の編集長、副編集長もご出席の予定で、十一月二十六日夜記念パーティーを開きます。お知らせは一三三ページにあります。ぜひ多数のお申し込みを！

●新連載で、母から娘への腎臓移植の体験談が始まりました。ご期待ください。

□購読申込は……ハガキか電話でどうぞ。

すぐ本に振替用紙を添えてお送りしますので、折り返しご送金ください。バックナンバーのご注文も同様に。二冊以上まとめられますと送料が半額以下になります。

わいふNO.244

(隔月刊)

1993年11月1日発行

編集・わいふ編集部
定価460円(本体447円)

(年間購読料送料共4200円)

印刷・平河工業社

発行所・(株)グループわいふ

東京都新宿区矢来町115

東海神楽坂マンション406

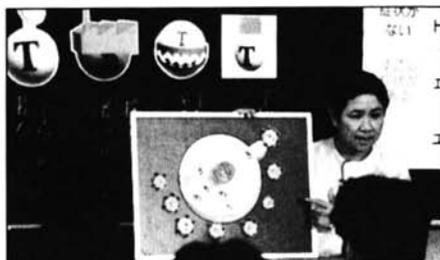
〒162 TEL (03) 3260-4771・4773

郵便振替 東京 5-110430

加入者名 わいふ編集部

□購読中止は……必ずお申し出ください。

送金をお忘れになる方が多いので、誌代が切れても引き続き送本しています。お申し出がないとお送りしてしまうので、ぜひハガキか電話を。

AIDSNHKテレビ放映で
大反響のエイズの授業**最新刊****エイズの授業** 中学校・高校で行なった
エイズの授業の記録

中・高校生に向けて北沢杏子が実践した
エイズの授業を詳細に収録。

- 豊富な写真で、授業展開の実際がよくわかる。
- 指導案をはじめ、予想される生徒たちの質問50、アンケートのとり方など、実践のヒントになる資料も多数。

北沢杏子 著
定価1,000円(本体971円)
A4変型判54ページ

**アーニ出版**

〒158 東京都世田谷区用賀3-5-6
TEL03-3708-7321 FAX03-3708-7325

東京都文京区春日1-8-6 **創和出版** ☎03(3812)5811 FAX03(3814)4090

創る喜びと遊びを楽しむ本—工夫と発見がいっぱい
連続写真・イラストでわかりやすく解説した手づくりシリーズ

自然を編む
凧をつくる
ユーモラスなからくり
紙でつくる楽器
豆本をつくる
段ボール遊具をつくる
モビールをつくる
切り絵を楽しむ
からくりペーパーサート
小石に描く
木の遊具をつくる
籐の工作あそび
紙ねんどでつくる
牛乳パックでつくる
イントラ篇
竹でつくる楽器
アウトドア篇
牛乳パックでつくる
道具の連想工作
おもちゃ文庫をつくる
野草で紙をつくる
草笛を楽しむ

既刊19巻 定価各1,442円(税込)

コミュニケーションのための

日本語学——きく・話す・読む——

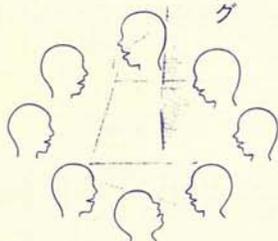
言語表現研究会編 B5判 美装カバー

元NHKアナウンサー5人が、長年培ってきた経験と実績を基に体系化した「話しことば」入門書。ことばの基本から実践、応用の場面まで豊富な実例をまじえて、わかりやすく解き明かす。

二六〇〇円

●目次——

- 1 はじめに
 - 2 ことば学入門
 - 3 きく力
 - 4 話す
 - 5 応用パブリック・スピーキング
 - 6 話し合う
 - 7 声とことば
 - 8 日本語の発音 I
 - 9 日本語の発音 II
 - 10 ことばと人間関係
 - 11 読む
 - 12 ことばを生かす
- 「let's speak」——おわりにかえて
索引／コラム



〈シニアアラン叢書・創刊〉

①シニア宣言 われら自遊人

シニアアラン開発機構編 心を若く、原点は好奇心——木村尚三郎、玉村豊男、斎藤茂太、今井通子、森毅他、フォーラムでの刺激的な提言を満載、いきいきとしたシニアライフを考える。一六〇〇円

②スウェーデン発 住んでみた高齢社会

山井和則著 世界一の高齢者大国であるスウェーデン。そこで出会った人々をとおして、見た・聞いた最新の情報を伝える。日本の未来社会へのヒントはあるのか。人生のおまけでない老後の実現のためにまとめた福祉先進国の実態。一六〇〇円

③現代サラリーマンの生活と生きがい

斎藤茂太監修 シニアアラン開発機構編 生きる喜びや満足感はあるですか？ データによるサラリーマンシニアの素顔に迫る。ココロの時代へ。一六〇〇円

●目次より——男50代は立場の分かれ目 「仕事人」より「社会人」志向の女性たち／「頼りにして」でも「自立して」サラリーマンは男女とも地域関係が希薄／夫婦で語ろう定年後の生活

株式会社 ミネルワ書房
〒607 京都市山科区日ノ岡塚谷町1
☎(075)581-5191 振替京都 2-8076

